

# 下総小川台古墳群

——千葉県匝瑳郡光町小川台古墳群調査報告書——

1975

八匝教育委員会  
小川台古墳群調査団

# 下総小川台古墳群

—千葉県匝瑳郡光町小川台古墳群調査報告書—

1975

八匝教育委員会  
小川台古墳群調査団

No.70



No.58



小川台第5号填出土人物埴輪

## 序

古墳群の存在する小川台でその一部が発掘され、貴重な資料を得られたことは大きな成果でありました。

温故知新のことばの如く、古いものをたずねて新しいものを知ることは、現代人の何よりの教訓になるわけであり、とくに先住民の文化を追求し、近代科学によって分析してゆくことは、単に考古学や歴史の研究だけではなく、広く現代人の福祉生活の上にも裨益するものが少くないと思います。

原始時代より中世、現代に至る過程において、祖先の築き上げた文化はその価値観の上で貴重なものであり、この文献は生きた資料として高く評価されるものと思います。

昭和50年3月

光町町長 植名彰

## 序

栗山川は小流であるが、古代から近代に至るまで、その流路近くに居住するひとびとにとって重要な川であった。すでに石器時代にここに人が住み、貝塚をはじめ多くの遺跡をのこし、水田耕作の技法を得てからは、流域を利用した農耕生活が長く営なまられてきている。流域には古墳ものこり、律令以後の遺跡もある。かつて鮭の埴輪を出土したのはこの川の支流であるし、その報告を今回の調査主体である浜名徳永氏が「古代」に載せているが、江戸時代に遡上する鮭を捕食したことを示す神社行事が残っていたという。ひとつの流れを中心に人がどのように暮してきたかを語るほほえましい話である。

光町小川台の台地上に、前方後円墳数基を含む古墳群がある。付近の小群とくらべれば偉容をもつものである。その数基が土地の変貌により消滅するやむを得ない事態に立ちいたったという。それが今回の調査の発端である。調査主体の浜名氏は、芝山仁王尊を守る僧籍のかたであるが、「人の生活」について深い心を持つ篤学の僧で、古代文化のみならず、近世の民衆文化にも造詣の深いかたである。

芝山古墳群の殿塚・姫塚の調査も同氏のすすめによるものであるし、その後、観音教寺境内に「芝山はにわ博物館」を造建され、遺物の研究を進められている。考古学研究は、不慮の死をとげた同氏の令弟、浜名厚氏の念願でもあったので、その遺志を維ぎ拡大されているものである。

小川台古墳群には、第4号墳のように方形と判断されたものも含まれ、貴重な資料を提供すると思われたが、この方墳の破損は殊に著しく、石室と思われるものは全く破壊され遺品も鉄器数点のみであった。これに対して、5号墳は、破損の少なかった北側に多くの埴輪を残置していたし、墳丘築造が当初円形であったものに前方部を添加したものであることが発掘によって明らかになった。この種築造法に一例を加えるものである。

浜名氏を助けた神山崇氏、調査と刊行に絶大な協力をなさった相山林継氏、そのほか支援戴いた諸氏に厚く御礼申し上げる。

昭和50年3月

調査団長　滝口宏  
早稲田大学教授

# 目 次

口 絵 小川台第5号墳出土人物埴輪

序 光町町長椎名彰

序 調査団長滝口宏  
早稲田大学教授

## 序 章 調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
1. 経過概要	2
2. 日誌抄	4

## 第1章 遺跡

第1節 遺跡の立地	13
第2節 歴史的環境	16
第3節 調査古墳1—第1号墳	17
第4節 調査古墳2—第2号墳	24
第5節 調査古墳3—第3号墳	25
第6節 調査古墳4—第4号墳	27
第7節 調査古墳5—第5号墳	29
1. 遺構	29
2. 墳輪の配置	33

## 第2章 遺物

第1節 第1号墳出土遺物	38
1. 鉄製品	38
2. 石製品	42
3. 土器	45
第2節 第4号墳出土遺物	46

1. 鉄 製 品 .....	46
2. 須 恵 器 .....	47
第3節 第5号墳出土遺物 .....	50
1. 鉄 製 品 .....	50
2. 玉 類 .....	53
3. 墳 輪 .....	54

### 第3章 考 察

第1節 第5号墳形象埴輪の配列について .....	64
第2節 第1号墳出土石製模造品について .....	76

跋 芝山はにわ博物館館長 浜 名 德 永

英 文 要 約

## 図 版 目 次

- 図版第1 小川台空撮（京葉測量株式会社撮影 1974）  
図版第2 景観 上…北方より小川台を望む 下…1号墳上から南を望む  
図版第3 第1号墳 墳丘  
図版第4 第1号墳 主体部  
図版第5 第1号墳 第1主体部  
図版第6 第1号墳 第1主体部の遺物出土状況  
図版第7 第1号墳 中央部の遺物出土状況  
図版第8 第1号墳 出土遺物その1  
図版第9 第1号墳 出土遺物その2  
図版第10 第1号墳他 出土遺物  
図版第11 出土遺物細部 剣身に付着した矢羽根他  
図版第12 第2・3号墳近景  
図版第13 第4号墳 墳丘他  
図版第14 第4号墳 主体部跡他  
図版第15 第5号墳 墳丘並びに墳丘断面  
図版第16 第5号墳 墳丘  
図版第17 第5号墳 北側周溝  
図版第18 第5号墳 主体部  
図版第19 第5号墳 主体部 遺物出土状況  
図版第20 第5号墳 墳輪出土状況  
図版第21 第5号墳 墳輪出土状況  
図版第22 第5号墳 墳輪出土状況 鹿頭部 (No. 10) 水鳥 (No. 32, 33)  
図版第23 第5号墳 墳輪出土状況 水鳥 鶲 (No. 33の2)  
図版第24 第5号墳 墳輪出土状況 墳輪馬 (上より No. 34, 38, 39)  
図版第25 第5号墳 墳輪出土状況 転落した人物埴輪  
図版第26 第5号墳 墳輪出土状況 人物埴輪 No. 54 No. 17  
図版第27 第5号墳 墳輪出土状況 人物埴輪 No. 56 No. 59  
図版第28 第5号墳 墳輪出土状況 人物埴輪

- 図版第29 第5号墳 墳輪出土状況 原位置の脚部
- 図版第30 第5号墳 墳輪出土状況 原位置の脚部
- 図版第31 第5号墳 墳輪出土状況 人物頭部
- 図版第32 第5号墳 出土遺物
- 図版第33 第5号墳 出土埴輪 人物 No. 59
- 図版第34 第5号墳 出土埴輪 人物 No. 58+No. 64
- 図版第35 第5号墳 出土埴輪 人物 No. 17, 壺を頭上にした女子
- 図版第36 第5号墳 出土埴輪 人物 No. 56, 男子
- 図版第37 第5号墳 出土埴輪 人物(1 頸部—No. 22, 他)
- 図版第38 第5号墳 出土埴輪 人物(右 No. 36, 70, 左 No. 28) 武人
- 図版第39 第5号墳 出土埴輪 人物(No. 40) 武人
- 図版第40 第5号墳 出土埴輪 人物(No. 69, 67) 武人
- 図版第41 第5号墳 出土埴輪 人物台
- 図版第42 第5号墳 出土埴輪 人物部分
- 図版第43 第5号墳 出土埴輪 墳輪馬
- 図版第44 第5号墳 出土埴輪 家形埴輪破片 鶴, 水鳥の頭及尾
- 図版第45 第5号墳 出土埴輪 鹿
- 図版第46 第5号墳 出土埴輪 人物埴輪 (No. 56, No. 58, No. 36・70)
- 図版第47 参考図版 1 右…殿部田1号墳 墳輪出土状況  
左…高田木戸前1号墳 墳輪出土状況
- 図版第48 参考図版 2 上…芝山姫塚古墳 墳輪出土状況  
下…経僧塚古墳 墳輪出土状況
- 図版第49 参考図版 3 芝山町殿部田1号墳出土埴輪
- 図版第50 参考図版 4 芝山町高田木戸前1号墳出土埴輪
- 図版第51 参考図版 5 横芝町殿塚出土水鳥, 同姫塚出土人物埴輪

## 挿 図 目 次

折込 1	栗山川流域を中心とした古墳群分布図	
折込 2	第 5 号墳埴輪配置図	
第 1 図	小川台古墳群地形図 (1: 25000)	14
第 2 図	小川台古墳群位置図	15
第 3 図	第 1 号墳埴丘実測図 (1: 300)	18
第 4 図	第 1 号墳遺構図 (1: 300)	19
第 5 図	第 1 号墳第 1 主体部(上), 第 2 主体部(下)	20
第 6 図	埴丘断面図 (1. 第 1 号墳南北, 2. 同西東, 3. 第 2 号墳北南, 4. 第 3 号墳東西, 5. 第 5 号墳主軸, 6. 同後円部南北, 7. 同前方部南北, 8. 第 4 号墳西東)	22
第 7 図	第 2 号墳埴丘実測図	24
第 8 図	第 3 号墳埴丘実測図	25
第 9 図	第 3 号墳の砂岩塊	26
第 10 図	第 4 号墳埴丘実測図	27
第 11 図	第 5 号墳埴丘実測図	30
第 12 図	第 5 号墳遺構図	31
第 13 図	第 5 号墳主体部実測図	32
第 14 図	第 5 号墳後円部北側周溝内土師器出土状況	33
第 15 図	第 5 号墳埴輪位置図	34
第 16 図	第 5 号墳人物埴輪配列状況図	35
第 17 図	第 1 号墳出土鉄製品実測図 1~4・12・13 中央部出土, 5・6・14 第 2 主体部出土 7~11 第 1 主体部出土	39
第 18 図	第 1 主体部出土有孔円板・白玉実測図	43
第 19 図	第 1 主体部北側出土白玉実測図	44
第 20 図	第 1 号墳出土土師器実測図	46
第 21 図	第 4 号墳出土刀装具実測図	47

第22図	第4号墳出土須恵器実測図	48
第23図	第4号墳周辺出土の須恵器実測図	48
第24図	第4・5号墳出土直刀実測図 1~5. 第5号墳, 6. 第4号墳出土	51
第25図	第5号墳出土遺物実測図 1. 刀子, 2. 鐵, 3. 勾玉	52
第26図	第5号墳出土ガラス丸玉実測図	53
第27図	第5号墳出土ガラス小玉実測図	53
第28図	第5号墳出土人物埴輪実測図1 No. 58	55
第29図	第5号墳出土人物埴輪実測図2 上 No. 40, 下 No. 59	56
第30図	第5号墳出土人物埴輪実測図3 No. 70	57
第31図	第5号墳出土人物埴輪実測図4 No. 56	58
第32図	第5号墳出土人物埴輪実測図5 No. 17	60
第33図	殿塚・姫塚埴輪配置図	66
第34図	高田木戸前1号墳埴輪配置図	68
第35図	殿部田1号墳埴輪配置図	71

## 表 目 次

第1表	第1号墳第1主体部出土白玉計測値一覧	43
第2表	第1号墳第1主体部北側出土白玉計測値一覧	45
第3表	第5号墳出土ガラス玉計測値一覧	54

## 例　　言

- この報告書は、千葉県匝瑳郡光町小川台所在古墳の調査報告書である。
- この調査は、千葉県教育委員会指導の下に、八臣教育委員会が調査事務を担当し、芝山はにわ博物館を中心に発掘調査団を組織し、昭和49年度国庫補助金事業として行なわれたものである。なお補助金事業の対象は光町である。
- 調査は、大字小川台の台地上に散在する古墳の内、農業構造改善事業の予定地域内にあって、破壊される古墳2基（第1・5号墳）、及び耕作等により既に破損されているが、盛土の見られる3基（第2・3・4号墳）について実施された。
- 調査担当者は、早稲田大学教授　滝口宏があたり、団長として総括したが、現地における作業については、宗教法人観音教寺付属芝山はにわ博物館館長浜名徳永が副団長として事に当った。なお調査団組織等は、序章によられたい。
- 報告書の刊行は、本事業のほかに、予算上の問題から芝山はにわ博物館の事業と合せ行なうものである。
- 報告書の執筆は浜名を中心に行なったが、分担は次のとおりである。

浜　名　徳　永　　序章第1節、第1章第1・2節、第7節2、第2章第3節4  
第3章第1節

相　山　林　継　　第2章第1節、第2節1、第3節1・2・3、第3章第2節

山　田　友　治　　第2章第2節2

神　山　　崇　　序章第2節1、第1章第3・4・5・6節、第7節1

山　崎　　仁　　序章第2節2

- 報告書の編集は、浜名、相山が担当した。

- 本報告書に掲載の地形図の内、国土地理院発行分については、同院の複製承認を得ている。（この地図は建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の2.5万分の1地形図、5万分の1の地形図を複製したものである。「承認番号」昭50総複第423号

- 参考資料としての埴輪配置図等は各調査者の御好意に依り転載したものである。

- 英文要約は、国際基督教大学小山修三・グレイス田尾両氏の手を煩わした。

- 題字の揮毫は、調査団長滝口宏先生による。

## 序 章 調 査 経 過

### 第 1 節 調査に至る経緯

昭和48年の末か、49年に入ってからの事が記憶がはっきりしないが、教育庁文化課の紹介を持って、八匝教育委員会社会教育課長の飯田さん、同主事の深田さんを始め関係者10数人が揃って博物館に見えられたのが、今回の調査の発端である。聞くところによると、光町の小川台部落及び台部落の有志62軒が、農林省の補助金を得て畑地の整備事業をする事になり、補助金決定の見通もついて、いよいよ事業の準備にかかったところ、該当地内に文化財（古墳5基）が所在する事を教育庁文化課から指摘され、この調査を行わないと整備事業に着手出来ない事を知ったと言う。事態の重大さに気付いた地元の人々は、八匝教育委員会の担当者は勿論の事、県文化課の関係者も交えて鳩首相談すると共に、関係方面に陳情を繰返した結果、種々の曲折を経た後、ようやく国の昭和49年度の文化財保存事業に取り上げてもらう事になったと言う。についてはこの調査を担当してくれないかと言う依頼であった。当博物館はその名称の示す通り、殿塚姫塚と言はれる2基の古墳から出土した埴輪を中心として当地方の古墳文化の内、特に埴輪を持つ古墳を重点的に調査研究して来た訳であるが、栗山川沿岸の古墳群については種々の点から研究調査する必要に迫られていた事でもあるので、条件さえ合えば調査を担当しても良いと考えた。ただ予算は補助金を49年度に繰上げてもらった事もあって充分ではなく、いさか問題もあるかと思ったが、地元の人達が勤労奉仕のつもりで働くからという言葉になかばほだされて、なかば学問的興味にひかれるまま遂に引受けに至った。そこで吾々は自分達の経験不足を補うため、団長に恩師である早稲田大学教授淹口宏先生を仰ぐと共に、下記の通りの調査團を組織し、調査に当る事とした。

團 長 淹 口 宏

副 団 長 浜 名 徳 永

調 査 主 任 神 山 崇

調 査 協 力 相 山 林 継

調 査 員 安藤文一、青木 理、石井克己（以上国学院大学学生）、浜名徳峰、柳田政徳、山崎 仁、真行寺久雄、堀越 昭、秋葉律子（以上博物館職員）

調査補助員（光町台部落）：山崎平八郎、山崎 秀、山崎文武、山崎光弘、山崎琳三、鈴木 武、鈴木 豊、鈴木義夫、鈴木重徳、山ノ先麻尾、加瀬重雄、飯島

良郎，大木与平，古郷恒夫，加瀬 勇，古郷喜男，本橋文一，本橋正士，  
加瀬友吉，霞 あさ，鈴木玉枝，山崎うめ，加瀬さく，山崎つね子，大木  
たつ子，加瀬みや，鈴木あき，鈴木たか，本橋まつ，山崎房子，山崎高子，  
山崎芳子，尾瀬 才，鈴木あい子，鈴木愛子

(光町小川台部落)：林 正，飯田正己，鈴木誠之進，山田喜一，須合  
平，鈴木 治，村越喜久司，林 一雄，林栄一郎，鈴木丈夫，鈴木文雄，  
鈴木總夫，林 正俊，林 武，林 云雄，村越満治，須合秀治，林  
勝，林 実，青木 栄，須合一平，林 貢，鈴木 充，鈴木莊一，須  
合 誠，須合 昇，須合勇吉，鈴木喜八郎，林 健正，林 春雄，鈴木健  
司，鈴木重夫，林 和平，須合和子，鈴木あい，青木初枝，須合ちえ子，村  
越静枝，鈴木せつ子，林 さく，林 よし，山田悦子，鈴木マサ，鈴木ま  
さ，林 たき，鈴木たき，鈴木充子，林 和代，山田とみ子，林 洋子，  
林 しげ子，須合叔枝，鈴木節子，鈴木とし子，鈴木菊枝，須合波留子，  
鈴木みつ子，須合智恵子，林 文子，須合秀子，林 ヨシ，林 政子，鈴  
木まさ子，鈴木あき子，鈴木愛子，鈴木八重子

(芝山町芝山部落)：藤田莊二，鈴木すい，木川ふさ，秋葉きよ，五木田タ  
カ，藤田なほ子，伊藤たい，伊藤利子，鈴木やす，大木八重，秋葉コト，  
倉持コト

事務局員 山 本 と み (芝山はにわ博物館職員)

## 第2節 調査経過

### 1. 経過概要

小川台古墳群の内緊急調査の対象として示された古墳は5基である。便宜上これらの古墳を  
北側から順次第1号墳～第5号墳と呼ぶ事にした。この内第4号墳は外見では細長い楕円形を  
示し、古墳であるかどうか判然としなかった。第2・3号墳は永年の農耕により、墳丘がほと  
んど削平されていた。従って調査を進めるに当り、最も日時と労力を要するものは、第1号の  
円墳と第5号の前方後円墳であると見られた。そこでこの2基を同時に調査する事のないよう  
にスケジュールを組み、まず、第5号の前方後円墳と、これに近い第4号墳を調査し、しかし  
後に第1号の円墳と、第2・3号の円墳を調査する事に決定した。第5号墳はまずその規模を確  
認する意味で、長軸に沿って墳丘を両断する形で幅1.5mの第1トレンチを設定、前後とも周  
溝部の探索から始め、やがて墳丘を両断し、その築造状態を調べる事にした。さらに長軸に直

## 序 章 調 査 経 過

角にくる第2トレンチを後円部に、第3トレンチを前方部ほぼ中央部に、所謂「キ」の字状に設定し、墳丘の形態を確認する事にした。また、内部施設は後円部南側に設定された石室であろうとの想定のもとに、同所の掘り下げを試みた。後円部南側は当時の地表と思われるところまで完全に封土を取り除いたが、何んらの遺構も発見出来なかった。そこであるいは南側中段のくびれ部または前方部に開口する石室である事を考慮し、長軸に沿って、南側面にさらに第8トレンチを設定してこれを掘り下がたが、なお内部施設を発見出来なかった。この間に先に墳丘を両断する形で設定された第1トレンチを後円部の方向から掘り進めていたところ、墳丘中腹の封土中より鉄片一個を検出した。ここに至り初めて本墳の内部施設が木棺直葬の可能性が極めて強い事に気付き、さらに探索を行った結果、後円部墳頂部分から主体部を検出する事に成功した。また後円部のトレンチを掘り下げ中、円筒埴輪の底部と見られる破片を発見したが、他のトレンチからは全く埴輪片が検出されなかったので、本墳に円筒埴輪をともなう可能性は認めながらも、この時点では形象埴輪を持つとは考えていないかった。しかし発掘が進むに従い第2トレンチの北側周溝内から家形埴輪の破片、第3トレンチの北側中段原位置と思われるところから人物埴輪の台などが次第に発見され、本墳が形象埴輪列をともなう事を知ったが、さらにG2(第2グリッド)にて前方部の周溝の探索を行っていた時、木根の下より有角の鹿の頭部が発見されるに及び、形象埴輪の種類が豊富らしい事と、北側斜面の前方部稜線近くから樹てられている事を知った。そこで検討の結果予定を変更し、埴輪列の探索は各古墳の調査の終了をまって集中的に行う事とし、当面本墳の調査は、規模と築造の状態を知るにとどめた。もっとも周溝確認の作業中にも埴輪片は多數発見された。

第1号墳の調査が一段落した後、北側斜面のほとんど全域を周溝部外堤に至るまでの区域を限り、堆積土を完全に取り除く事にした。この作業を進めるに従い周溝内の原位置から転落したと見られる多数の埴輪を発見した。また墳丘の斜面からも原位置をそのまま保つと見られる状態で、5体の人物埴輪台部を発見したので、この位置に埴輪が並べられていた事を知った。埴輪列がどこまで延びているかを知るために、このレベルで後円部にかけてさらに探索したが、No.60以後は埴輪片もほとんど発見されなかった。そこで周溝内に転落している場合を想定し、周溝内も丹念に探索したが、わずかにNo.44、No.45の二点を発見したにとどまり、埴輪列の探索を終了した。一方本墳の調査と平行して第4号墳の調査に入った事は前述の通りであるが、本墳も細長い墳丘のほぼ中央部に十字に幅1.5mのトレンチを入れ、その規模の確認をする事にした。さらに本墳は外観からでは、円墳と見なし難いので方墳または中世以降の供養塚である事も想定し、周溝の探索に力を注いだ。G1、G2を設定したのはこのためである。この結果本墳が方墳である事を確認した。この作業中、第2トレンチの南側を掘り下げたところ、周溝に近い部分から砂岩の一部が発見され、検討の結果、これが主体部の石材の一部であると判明

した。本墳は小形の横穴式石室を持っていたものと見られる。次に第1号の円墳の調査については、まず形通り幅1.5mのトレンチを方位に沿って十字に設定した。ただ墳頂部に内部施設がある事を想定して、中央部には約4m四方のグリットを設けておいた。さらに周溝を明確に把えるため放射状に5本のトレンチを設けた。この南側トレンチを掘り下げ中に鉄剣の一部を検出、木棺直葬の内部施設が墳頂部より極端に南側に設けられている事を知った。主軸の方向は東西であった。この内部施設の位置から見て、さらに第2、第3の内部施設が墳頂部にあるものと考え、慎重に掘り下げを行い、第1主体と方向を同じくして第2主体部を発見した。

一方農耕によりかなり破壊された第2号の円墳については、墳丘が崩れているのと耕作物の関係で方位にならってのトレンチの設定が無理なため、任意に幅1.5mのトレンチを墳頂部にかけて設定し掘り下げを行った。また東南部方向に内部施設が設けられている場合も考慮し、G1を設定、地表まで封土を取り除いたが内部主体と見られるものは遂に発見出来なかった。従って本墳についてはその規模を確認する事で調査を終了した。第3号の古墳については、外見からでは梢円形を呈し、円墳ではないかと見られていた。この古墳も永年の農耕に依り封土のほとんどを失い、わずかに小高くなっているに過ぎなかった。そこでトレンチの設定は墳形にならぬ梢円形上の長軸と見られるところに幅2mのT1を設定、掘り下げていった。T1の両端に於て周溝を発見したがその距離は極めて長かつた。そこで本墳が円墳ではなく前方後円墳である疑いをいただき、さらにT2、T3、T4、T5、T6、T7と次第にトレンチを設定、周溝の探索を進めた結果、本墳が前方後円墳であることを確認した。またT6の掘り下げを行っている時、墳丘中腹と思われる位置で砂岩を発見、石室または石棺の一部ではないかと心を躍らせた。そこでG2を設定してこれを確認する事にしたが、結果的には土留に用いられた石材である事が判明した。そこで内部施設はすでに失われたものと判断し、本墳もその規模を把える事で調査を終了した。

## 2. 日誌抄

6月14日（金）小雨 小雨降る中を現地踏査を行う。八匝教育委員会、芝山はにわ博物館一行11名。今回調査対象となる5基の古墳及び周辺の地形を見てまわる。

6月15日（土）晴 第5号墳（前方後円墳）の草刈り及び伐採済みの枝などを片づける。同時に墳丘の測量を行う。午後、清掃された墳丘の写真撮影を行う。

6月17日（月）晴 昨日に引続いて第5号墳の測量を行う。午後墳丘測量を終了する。トレンチの設定。

6月19日（水）曇 第1号墳（円墳）の測量を行う。同時に一部残った墳丘の草刈りを行う。一方、現地にテントを設営し、博物館から器材を搬入する。

6月20日（木）晴 調査する各古墳の御靈の冥福を祈ると共に、調査団の安全を祈念して

## 序 章 調 査 經 過

仏式に依る鉢入れ式を行う。御導師は隆台寺住職大津頼順師である。参加者は、八匝教育委員会、光町役場関係者、地元整地組合、地元関係者、調査団等約40名であった。

午後、調査員で第1号墳の測量及びトレンチの設定を行う。

6月21日（金）くもり～小雨 本日を期して発掘調査に入る。第5号墳後円部東トレンチから始める。調査員、地元作業員合せて30名。

午後早くも後円部墳頂近くから鉄片が発見される。一同大いに意氣上がる。明日はこの地点の拡張を予定し、グリッドを設定する。

6月23日（日）くもり 一昨日に引き続き後円部の掘り下げを行う。鉄片出土地点より墳麓部より、円筒埴輪片の出土を見る。発掘調査前のボーリング探査では、埴輪の存在は確認されなかったので、本墳にともなう埴輪片であるかどうか、一同半信半疑であった。午後、長軸トレンチの前方部を掘り始める。作業員の声に飛んで行くと、また埴輪片の出土である。よく観察すると形象埴輪の破片も含まれているようである。ここに至り本墳に埴輪列の樹てられていた可能性が濃厚になり、掘り下げにも熱が加わる。

6月25日（火）晴 墓輪列の確信を得たので、探索はひとまずおき、第5号墳の主体部と周溝の確認を集中的に行うこととする。

前方部で周溝の落込みを検出した。出土する埴輪片の中には形象埴輪片が多くなる。特に墳丘北側の裾部に多い。また前方部北側の中腹より、原位置を保つと思われる形象台部が出土した。

一方、後円墳頂部を拡張したところ、僅ではあるが粘土を検出し、主部体の発見も間近いことと思われた。

発掘を開始して3日目ではあるが、調査も順調に進み、町当局の助役、職員等見学にくる。

6月26日  
(水) 晴 前方部北西隅から動物埴輪が出土した。連日の如く視察にこられる



慰靈供養

八匝教育委員会の飯田課長も、我々調査員共々喜一臺のていである。

早くもトレンチの断面の実測が開始され、調査は順調である。地元関係の作業員の出面が増えてきたので、二手に分けて調査を始める。第4号墳のトレンチ掘り下げにかかる。

6月27日（木）くもり～雨 天候が悪く、午前中で作業を中止する。

我々調査員にとって、天候が一番気にかかる。雨の3日も降りや何んとやらではないけれど気持もイライラしてくる。そんな時、地元作業員の会話や、自慢の声で大いに慰さめられる。特に大木の根掘り作業の時などは、和気藹々と作業を進める。それでいて何時の間にか終ってしまう。とても我々には真似のできぬ芸当である。

土と共に生きる農民の偉しさを感じられる。

6月29日（土）くもり～晴 前方部北西隅から動物埴輪が出土。原形を保つ埴輪では初めてである。発見者及び周辺の作業員が集まってしまい、作業は一時中断せざるを得なかった。

大木の根を小さざみに除きながら、埴輪の全容を明らかにすると、見るからに可憐な小形の鹿の顔であった。

一方、測量班を編成し、第2・3号墳の測量とトレンチの設定を完了する。

6月30日（日）くもり～小雨 第4号墳南側埴輪の農道に接して、石室の一部と思われる砂岩製の石が発見され、周辺を拡張する。本日より3班に分けて第5・4号、2号、3号を同時に掘り下げる。第2号墳の東側で検出された粘土の層は、拡張するうちになくなってしまった。

午後、この山深い現地にはそぐわぬ外人見学者が現われる。浜名副團長の案内で、アメリカ

・サイプレス大学、A・D・マックロード氏の一行である。氏は大学にて歴史考古の教授をしておられるとのことである。タイミングよく埴輪列及び石室の掘り方の一部が見られたので、神山が説明して



第5号墳の埴輪発掘

## 序 章 調 査 経 過

廻った。

7月1日（月）雨 雨で発掘作業が中止となる。芝山はにわ博物館にて、先に出土した埴輪の水洗いを行う。

7月3日（水）くもり 新たに第1号墳のトレンチ掘り下げを行う。南側墳丘で鉄片が出土し、さらに周辺を掘り下げたところ、石製模造品1点（有孔円板）を発見した。

第4号、第5号墳は、主体部の調査を行う。

7月4日（木）くもり～小雨 第4号の石室を集中的に追う。先に確認した石材は、周溝内に落込んだものと判明し、追跡した結果、本墳の石室は盜掘にあい、完全に破壊されてしまったものと判明した。よって、出土品の鉄刀、鏃、須恵器の破片などをとり上げる。

第1号墳の調査は、昨日に続いて石製模造品が発見され、本墳の主体部は直葬であることを確認する。

7月7日（日）小雨～くもり 小雨のため作業中止の連絡があったが、少人数の編成で調査を強行した。本日は第4号墳を中心に調査した。主体部平面図、各遺構の図面をとり、第4号墳の調査を一応終了した。

7月9日（火）くもり 第5号墳の東西断面図及び周溝の実測を行う。一方後内部墳頂の主体部を精査する。直刀、勾玉、ガラス玉等が出土した。第1号墳の東西に於いて周溝を確認する。また、南周溝内より古式の土師式土器が発見された。

7月10日（水）くもり 第2号、第3号墳の断面図取りを終了する。第3号墳に於いて、砂岩のブロック片が検出され、一同主体部の検出を急ぐ。

第1号墳では  
先に出土した模  
造品近くから、  
さらに数点の出  
土があり、合計  
10枚の有孔円板  
を検出した。

7月11日  
(木) 小雨 午  
前中は雨のため  
作業を中止す  
る。午後、小降  
りになったの



地城の人々に説明する浜名副團長

で、博物館関係の少人数で現地へ行く。第5号墳主体部及び周溝の精査を行う。

7月12日（金）くもり 第5号墳前方北トレンチを掘り下げ中、水鳥埴輪の出土を見る。明日よりお盆に入る所以、作業員の意向もあり、3日間の休暇をとる。器材の手入れをする。

7月16日（火）くもり 3日間の休みで、気力充分であるが、悪天候のせいか何かすっきりしない1日である。

第1号墳北側トレンチの掘り下げを行う。第3号墳の砂岩片は土留用に使用したものと判明し、一同をがっかりさせる。第5号墳主体部の遺物を全面的に現わす。特に本主体部は直葬のため、遺構の輪郭が分りにくく苦労させられた。またガラス玉の検出には相山調査委員自から立ち合ってこれを行った。

7月17日（水）くもり 第2号墳の周溝を確認し、残りの断面図をとり、本墳の調査を終了する。第1号墳南面の出土遺物によって、主体部と確認。その遺構の位置からみて、第2、第3の主体部の存在も予測され、調査は難行するのではないかと思われた。

7月18日（木）くもり～小雨 第5号墳主体部の遺物を取り上げる。時々降り出す小雨の為に思うように運ばない。鉄製品はいずれも腐蝕がはげしく取り上げに苦労する。

本日より北側埴丘から周溝にかけて、埴輪列の調査に入る。前方部から順次グリッドを設定し、掘り下げに入る。早くもくびれ部中腹より武人の胴部など続々発見される。先に発見された鹿の埴輪に接合する2本の角も出土した。

7月19日（金）くもり 第5号墳主体部の掘方確認及び断面実測を行う。埴輪列の調査。

古墳調査に於いて、もっとも興味を引くのは主体部の遺物の発見であろう。埴輪もまたしかりで、調査員も作業員もその点に変わりはない。日毎に現われる出土埴輪にしばしば作業が中断する。見学者の中には立入禁止



県教育庁文化課をはじめ関係者の観察

## 序 章 調 査 経 過

橋をかいくぐり、入り込む者さえ出てくる。それを静止する飯田課長は、木株にどっかりと腰を下し、連日クギ付けと云ったところである。

7月20日（土）雨 本日は雨の為作業は中止となる。博物館にて出土遺物の水洗いを行う。第5号墳主体部内の充填土を水洗いしたところ、新たにビーズ玉30個を検出した。

我々が水洗い作業中、地元小川台部落の鈴木玉枝さん他4名が博物館を見学に見える。話を聞くと、毎日発掘作業に出ているのに、何も知らないのでは困るから、少しでも多く実物に接して、今回の発掘参加を意義あるものにしたいとの事であった。この雨の中をわざわざ見学に来られる熱意に、我々一同頭の下がる想いであった。とかく忘れ去られがちな古い文化、特に埋蔵文化財に就いては、全く無関心な農家の人が多い中にあっても関心を示し、その意義を理解しようとする努力は誠に尊い事である。

7月22日（月）くもり～小雨 第5号墳の埴輪列を追う。馬、水鳥、人物など新たに発見される。第1号墳主体部の充填土を取り除き、遺物を明らかにする。

7月23日（火）くもり 第1号墳主体部より鉄鎌、鉄鉢が出土した。当地域に於いては類例のない埋葬施設なので、慎重に行う。

第5号墳の出土埴輪列の追跡及び実測を並行して行う。

7月25日（木）くもり～小雨 第1号墳主体部の平・断面実測を行う。一方墳頂部北寄りに鉄劍の出土をみて、慎重に精査したところ第2の主体部が発見された。第1主体部と同じく埋葬状態は直葬のようである。

7月26日（金）晴 第1号墳第2主体部の輪郭を現わし、新たに鉄鎌2点の発見を見る。

第5号墳の埴輪配列の全容がほぼ現われる。全面写真撮影の後、細部に亘って実測を行う。

7月27日  
(土) 晴 第1号墳第2主体部の遺物を取り上げ、平、断面の実測を行う。さらに第3主体部



ガラス玉の洗い出し作業

の存在の可能性も考えられるので、墳頂面を拡張する。

第3号墳の調査を終了する。

7月28日（日）晴 長い梅雨も明け、このところ晴天続きで調査も順調に進む。第5号墳の北側の墳丘及び周溝部を全面的にはぐ。埴輪列はもちろんのこと、周溝部分も完全に現われ、古墳の形状が明瞭に現われる。

調査も後半に入り、毎日見学者も多くなる。埴輪列も明らかになったところで、報道関係者に発表をしようと言う話しもちらほら出る。

7月29日（月）くもり 第1号墳墳頂面を拡張したところ、新たに鉄劍、鐵鎌、鐵斧が出土し、第3の主体部ありと、さらに遺構確認を急ぐ。

第5墳々丘の大木の根を取り除く。我々の調査の進行を最後までさまたげた大根である。またこのような難所にかぎって、遺物の出土も多い。全く皮肉なものだ。根をとり除くと、ミズラ、人物、堅魚木などが出土した。報道関係者への発表は31日に決定する。

7月30日（火）晴～くもり 第1号墳の主体部を追跡するも遺構の痕跡はなく、一応祭儀的な埋葬遺物として取り上げる。

第5号墳の墳丘中腹よりほぼ原位置を保つ人物埴輪の配列を確認する。

明日、今回の調査結果を発表するため、団長滝口教授の記者会見の参考に供するための資料をそろえると共に、浜名が中心となって簡単な説明リーフレットを作製する。また、県文化課関係者及び報道関係者の受け入れを準備する。現地案内標示や駐車場の設定やらで、一同テンヤワンヤである。



滝口団長の現地発表

7月31日

（水）晴 本日は、滝口教授による現地説明会のため、作業は清掃程度にして、作業員にも教授の説明を聞いてもらう事にする。昼近く八日市場駅に滝口教授を出迎える。現地では報道関係者

## 序 章 調 査 経 過

の受付を行う。平素は静閑とした小川台部落も、時ならぬ喧騒さにつつまれる。ウワサを聞いて近郷近在から見学者が集う。その数ざっと150名。

報道関係はNHKを始め、TV、新聞社を合わせ14、5社が来る。滝口教授を中心におよそ1時間に亘って説明が行われた。

8月1日（木）晴～くもり 小川台の発掘調査の成果がTV、新聞紙上に報道された為に、見学者の数が多く、説明時間を設ける。午前中浜名副団長が2回に亘って説明し、午後調査員が随時説明を行った。本日の見学者は約300名であった。

第5号墳の埴輪列の実測を行う。一方第1号墳では第1主体部、第2主体部の全調査を終了する。

8月2日（金）晴～俄雨 本日も報道の余波を受け、遠方からの見学者も含め100名ぐらいがみえる。その都度説明を行う。第1号墳及び第5号墳の細部に亘る実測、写真撮影を行う。

8月3日（土）晴 第5号墳埴輪の取り上げに入る。調査員の指示にしたがい作業員の手によって、小さな破片も注意深く取り上げられる。遺物は木箱、紙袋に納められ博物館に運ばれる。

8月5日（月）くもり 昨日に引続き埴輪の取り上げを行う。本日を以て第5号墳の調査を終了する。一部器材を整理し、運搬する。

8月6日（火）晴 第1号墳の全調査を終了する。現場を清掃し器材を運搬する。一方では、地元山崎、林岡氏の案内で小川台古墳群の分布調査を行う。山崎・柳田・堀越調査員が随行する。

本調査に依つて、前方後円墳3基、円墳10基、供養塚1基、貝塚1ヶ所が確認された。

8月7日  
(水) 晴 本日を以て延41日間の調査を終了する。古墳5基（うち2基は全壇に均しかった



芝山はにわ博物館での復元作業

が) の調査に對しては、あまりにも強行日程であった。特に第5号墳から埴輪列が発見された為全く予定が狂ってしまった。調査員は勿論であるが地元作業員の全面的な協力なくしては、とうてい出来うる調査ではなかった。特に前半は天候が悪く、小雨の中を強行したこともしばしばあった。調査を終って、それぞれに感概を込めながら、地元関係者に御礼の挨拶をのべ、残り器材を運搬し現地を引揚げる。

- |            |                |
|------------|----------------|
| 8月18～25日   | 埴輪の水洗い及び注記。    |
| 8月26日～9月5日 | 遺物の実測、一部埴輪の復原。 |
| 9月5～30日    | 埴輪の復原整理。       |
| 10月1日～12月  | 原稿整理及び図面類の整理。  |
| 1月～3月      | 報告書作製。         |

# 第一章 遺 跡

## 第1節 遺跡の立地（図版第1、挿図第1図）

小川台古墳群は栗山川流域の匝瑳郡光町小川台の台地上に存在する。栗山川は、川口近くに於ては山武郡と匝瑳郡を分ける郡境をなすが、上流に於ては、高谷川と栗山本流とに分岐する。高谷川は合流地点よりやや左折して北上し、水源は芝山町千代田の谷間に達する。栗山本流は多古町を通り、栗源町高萩附近にその源流がもとめられる。小川台はこの分岐点より栗山本流をやや上流に遡った東岸に位置している。この台地の北東約1kmには宝米の台地があり、宝米古墳群<sup>(1)</sup>の存在が知られ、さらに南に下る事約1kmのところに芝崎古墳群<sup>(2)</sup>がある。そのほか小川台よりさらに遡る事約1kmの多古町から栗源町に至る台地上にも古墳の分布がみられる<sup>(3)</sup>。栗山川の東岸に位置する小川台の古墳群は下海上の国造の影響下に置かれたものと見られるが、武射の国の古墳群と見られるものの内、最も小川台に近いものに横芝町取立古墳群<sup>(4)</sup>があげられる。また高谷川東岸の芝山町殿部田には殿部田古墳群<sup>(5)</sup>が存在し、互に影響し合っていたものと見られる。栗山川は当地方最大の河川であるが、それだけに流域の幅は広く、川口に近い台地は起伏に富み、境川や木戸川に比して独立丘陵的な台地が東岸につらなる一つの特徴をみせている。それだけに流域には広大な、しかも肥沃な耕地が広がり、九十九里台地に開拓する他の河川の流域に比して、経済性の優位を持ち得たと見られる。

小川台古墳群は、海拔35m～40mを示す台地上に存在するが、その台地の広さは東西約1km、南北約350mである。古墳はこの台地の周辺部特に北側に集中しており、中央部には見当らない。その数は図に示す通り、前方後円墳5、円墳12（この内2基は明確でない）方墳1である。この内第3・5・6号の三基の前方後円墳は主軸の方向をほぼ同一方向にとっている。またこの3基の前方後円墳は墳丘の形が極めて類似している事も一つの特徴としてとらえる事が出来る。同様に第14号墳、第15号墳の両墳はやや長めの前方部を持つ古墳であって、その規模を別とすれば墳形は全く規を一にするものと言う事が出来よう。5基の前方後円墳の内最大の規模を誇るものは第6号で、全長42m、高さは前方部後円部共約3mを持つ中形の古墳であると言える。12基の円墳の内最大のものは第18号墳であり、径25mを測り、高さは4mである。

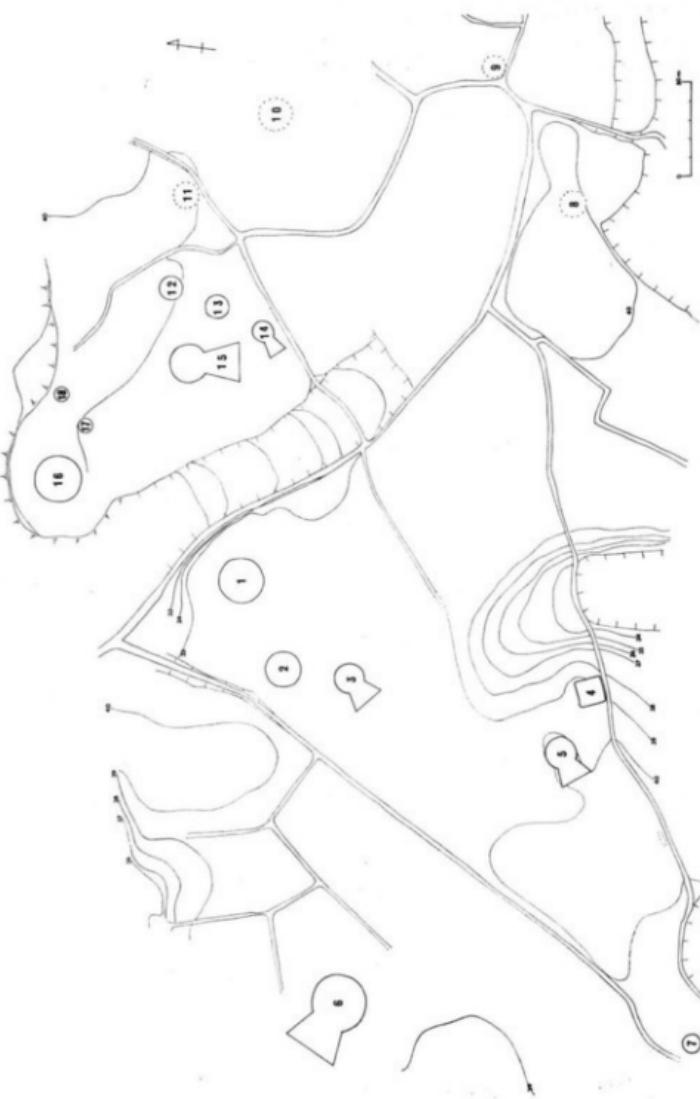
### 註

(1) 光町大字宝米所在。前方後円墳を含む20基に近い古墳が存在したが、昭和30年代の耕地整備に依り失われた。



第1図 小川台古墳群地形図

第1章 遺 跡



第2図 小川台古墳群位置図

- (2) 光町大字芝崎所在。前方後円墳1（全長37m, 後円墳頂高3.5m, 前方幅16m), 円墳3が現存する（14m×1.5m, 16m×3.5m, 15m×3.5m）。
- (3) 多古町の古墳群、昭和33年県立多古高校社会クラブ、等参照
- (4) 山武郡横芝町大字取立所在。前方後円墳3, 円墳23, 川戸 彰「再び山武郡の古墳について（その1）」に依る。但し本古墳群は昭和20～30年代にかけて土木工事で破壊され、失われた。
- (5) 芝山町殿部田所在、前方後円墳3, 円墳14, 詳細は近く刊行予定殿部田1号墳調査概報に譲る。

## 第2節 歴史的環境

シカツカタガシ  
下海上の国造<sup>(1)</sup>は、南は武射、北は茨城、西は印波の各國に隣接するが、その区域は後の海上、匝瑳、香取の三郡の地と常陸の鹿島郡の南部を包括する広大な地区であったと見られている。小川台の古墳群は下海上の国の中では最も西側に近く、栗山川を挟んで武射の国に接する位置にあり、後の下總国匝瑳郡<sup>(2)</sup>の置かれたところである。下海上の国造の居処がどこであったかは諸説があって判然としないが、匝瑳郡の郡家は多古町中村附近にあったと見られており<sup>(3)</sup>、一つの勢力拠点が栗山川流域に存在したと思われる。小川台の古墳群はこの勢力と極めて深いかかわりをもつていていたと考えなければならない。和名抄に依れば匝瑳郡には当時18個の郷があったと記されており<sup>(4)</sup>、この内小川台は石室郷と呼ばれていたと見られている。また將門記に、永平6年（A.D.936）下總介平良兼が上總国武射郡の小道より下總国香取郡の神前に至ると言う一節がある。この小道については、良兼が上堺村屋形に居り、芝山町千代田を経て香取に至る道を指したものと見られている。上堺の屋形に良兼の館があったという見方に對してはいささか疑問もあるが、いずれにしても少し広い意味で、この地方に居た事は疑う余地がない。下總国千田莊は平清盛の孫下總守平季衡の知行するところであり、平忠盛の婿判官代平親政がいた事で知られている。千田莊は、今の多古町から匝瑳郡の北部を含む広大な地域を指したと考えられるが、現在でも多古町に大字として千田の地名が残っている。千葉常胤の孫、堺の平常秀が一時期館を構えたと伝えられる堺もこの千田に近く、その隣地が殿部田で、ここには今日でも館跡の一部がわずかではあるが残っている。成田市大竹の円光寺に祀られる善光寺式弥陀三尊の本尊背銘には、「上總国北郡堺郷手取六郎四郎入道、延慶式年<sup>大治</sup>六月十日」（A.D.1309）と刻まれている<sup>(5)</sup>。この人物が如何なる人であったのか、またどの様な因縁によってこの御本尊が円光寺に祀られるようになったのか全く不明であるが、この頃の郷に、これだけの仏像を寄進する財力を持った地方豪族（恐らく千葉氏の一支族であろう）が居住していた事実は動かない。因にこの地方の仏像に眼を転ずると、光町宮川の福秀寺には鎌倉時代初期と見られる木造の薬師如来立像一軀があり、同木戸の觀音院にも藤原末か鎌倉時代初期と見られる木造の阿弥陀如来の坐像が残されており、小川台の隆台寺には室町時代の作と思われ

る銅造の善光寺式三尊仏が祀られている。以上三軸はいずれも県指定の文化財<sup>(6)</sup>であるが、さて広くない光町のしかも栗山川の川口に近く、鎌倉初期の仏像2軸と室町時代の仏像1軸が残されている事実に依っても、いかにこの地方が往時繁栄した土地であったかを知る事が出来る。今日ですら栗山川を無視しては当地方の稻作は存在し得ないが、古老の語るところに寄ると、今のように農村に車が普及するまでの栗山川の果した役割は、我々の想像をはるかに越えたものであったと見られる。結局当地方の人々は古墳時代より今日まで、栗山川と共に生きて来たと言っても過言ではないのである。

尚、匝瑳郡誌に嘉永2年香取郡吉田（現在八日市場市）の古窟より発見せる瓶子の識に、天平勝宝6年9月14日下総国栗原郡とあり云々の記事がある。事実とすれば極めて貴重な資料であるが、現在の所在は不明である。従って器形その他全く明らかでない。ただ古窟と言うのは恐らく横穴墓であろう。識者の注意を喚起する意味で付記しておく。

## 註

- (1) 下海上の国造、下海上は下荒上とも書き、国造本紀に、輕島豊明朝（応神）御世 上海上國造祖 孫久都伎直定賜国造とある。
- (2) 続日本後紀卷4、仁明天皇の承和二年三月十六日の項に、「下總国人、陸奥鎮守將軍、外從五位下勲六等物部匝瑳連熊指、改進賜宿禰。（中略）昔物部小事大連。銀鏡天朝。出征坂東。凱歌帰報。藉此功勳。令得於下總國始建頭匝瑳郡。仍以為氏。是則熊指等祖也」とある。これが匝瑳の地名が国史に現われる初めである。匝瑳郡誌（大正10年刊）には物部の小事は仁賢朝の人とする。旧事紀に依ったと見られる。
- (3) 匝瑳郡誌による。
- (4) 小川台字堂面にある隆台寺は、八日市場市米倉在の西光寺の末寺で、元岩室山新善光寺光明院と号しその昔岩室郷主の祈願所として榮えたが、明治19年に至り、本寺の外に東照院、宝藏寺、医王寺の3ヶ寺を合併し、新たに隆台寺と称するようになったと言う。石は岩に通じ、山号に郷名を冠したものと見られる。
- (5) 稲崎四郎「金石文の読み方」。『古文書入門』高橋頼一編河出書房  
尚、拓本に依れば手としか読みようがないが、刻者は香のつもりでなかったかと思考している。
- (6) 千葉県文化財総覧参照。

## 第3節 調査古墳1 第1号墳

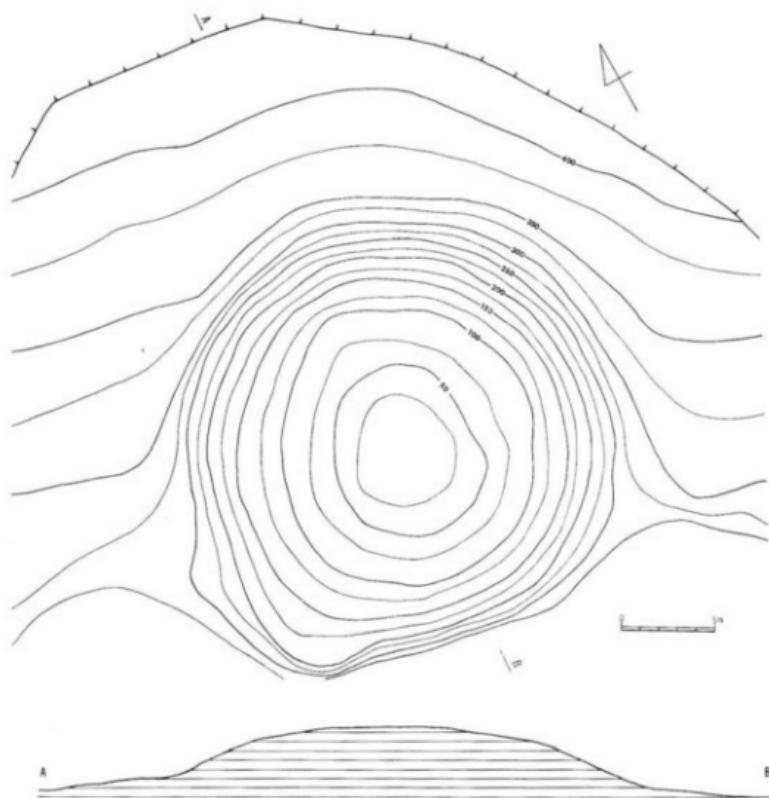
## 墳丘（図版第3、挿図第3図）

本墳は、現在山林であって小川台々地の北端部に位置するが、南西部の埴籠に周溝の痕跡は全く認められず、そのまま平坦な耕作地につながっている。この平坦な台地上には第2号、第3号墳が隣接して眺見される。本墳の北側凡そ半分程は、埴籠最終等高線附近に於て二段築造と見まがう明瞭な段部を形成した後、急斜面に接続している。この段部は古墳築造における

地山整地によって生じたものではないかと推定された。

平坦部に接する南西面では、耕作地が填薦部まで入り込み、墳形を著しく変化させていた。測量の結果、南西面は長さ約20m×幅約3mに亘って削られていることが判明したが、その他のところでは、築造当時の填丘を比較的良好に保っていると認められた。

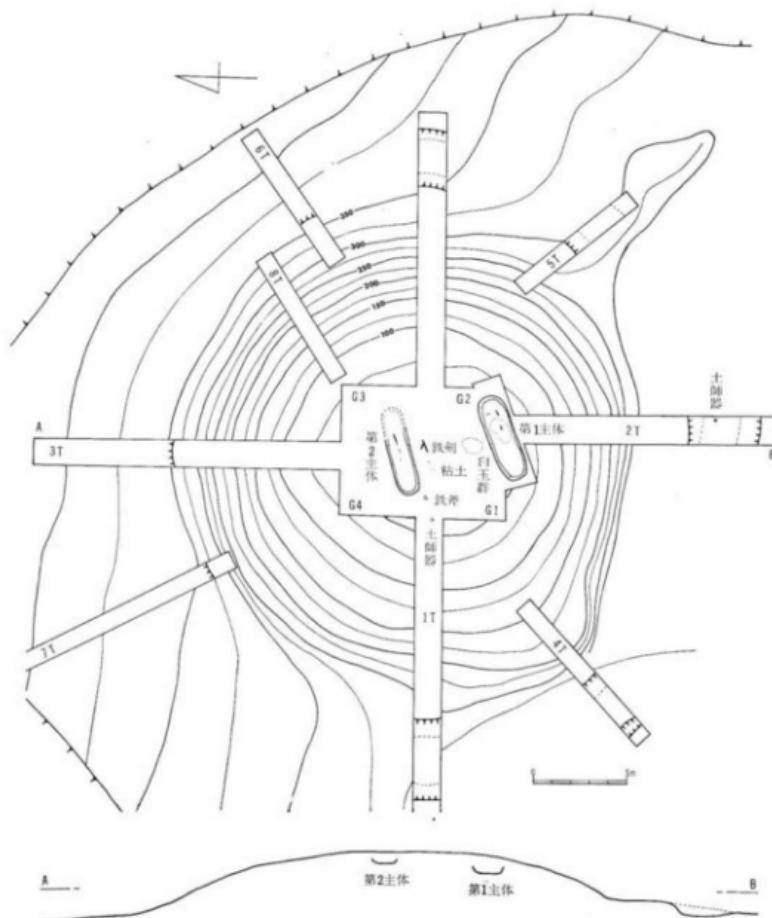
本墳の規模は東西で27m、南北で25mのほぼ円形を呈するものであった。填薦から填頂までの高さは、南北では一様でなく、南填薦からでは約2.9mを計り、北側では約3.7mと、0.8mの差が確認された。現填頂部の標高は41.34mであった。



第3図 第1号填 墳丘実測図(1:300)

## 周溝と封土（挿図第6図1・2）

レンチの掘り下げによって、周溝を確認したが、本墳の周溝は全周していない。即ち東側から南西方向にかけては、周溝の落込み及び溝内の堆積土も明瞭に確認出来たが、北半部の周溝は認められず、整形時の起ち上り跡のみ確認された。



第4図 第1号墳遺構図(1:300)

周溝は南側（T2）でもっとも明瞭で、上端幅が約3.7m、深さは約0.3mあり、起ち上りは両面とも等しく、緩やかな弧状を呈していた。この周溝内底面より、古式の短頭壺形土器式土器（ほぼ完形）が出土した。明らかに本墳に伴なう遺物と思われる。

南西（T4）ではT2と同様の周溝を確認した。溝内にピット状の遺構が検出されたが、これは農耕による攪乱の跡と判明した。

東西の周溝は、東側（T1）で上端幅約3m、深さが0.3mと比較的浅く、起ち上りは緩やかであった。西側は全体的に幅広く、上端幅4.3m、内幅2.7m、深さが0.4mともっとも深かった。堆積土はいづれも表土下に、黒色土層が含まれ、2層から3層に堆積していた。

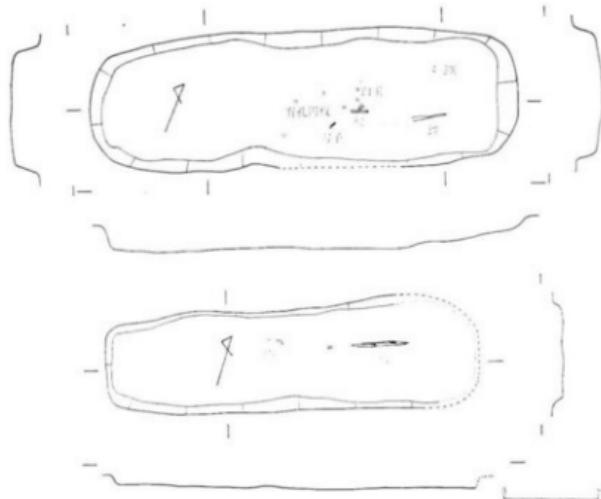
周溝確認によって、本墳の規模を計測すると、東西で29m、南北で28mを測る。当古墳群における円墳形態としては、比較的大形の部類に属する古墳と判断した。

墳丘の築造にかかる盛土及び整形は、各トレンチの断面から推定して、当初地山を整形し、その上にローム混りの暗褐色土を約60cm程均一に盛り固め、さらにその上にロームブロック混りの褐色土を平均70cm程盛り上げている。周溝などの掘り上げたローム混りの暗褐色土及び北側傾斜面、あるいは西側の段差のある部分からの土を積土に利用したものと考えられる。周溝起ち上り部と北側に於ける整地起ち上り部は一線上に整えられている。

これらの盛土は、全体的にローム系の同質土をもって盛られ、他で見られる有機質系の黒色土の混入する、複雑な互層は全く見られない、極めて単純層である。

しかし、褐色土層中に於いて、墳丘の傾斜部分に若干黒色土の混入がみられた。

表土層は、比較的平坦な墳頂面で約40cm、傾斜部の墳丘面に於



第5図 第1号墳 第1主体部(上), 第2主体部(下)

ては、平均して 60cm の堆積がみられた。

### 第1主体部（図版第 5・6、挿図第 5 図上）

本墳の墳頂面は極めて平坦部が広く、これが後世の崩壊あるいは盗掘等による変形ではなく、築造時と大差ないことが看取されたので、墳頂部に於ける複数の主体部を考慮して、墳頂平坦面にグリッドを設定、南北トレンチと同時に掘り下げを行った。掘り下げは当初から慎重に行い約 50cm 程掘り下げたが、何ら土層土質の変化は認められなかった。

しかし、G1 に於てわずかな砂質粘土を認め、さらに、10cm 程掘り下げ、直径 25cm 程の粘土塊を認めたが、この時点では変化はなかった。

他方南北トレンチの掘り下げ中、南墳頂部に近く、G1・2 の外側傾斜部で鉄器の小片を発見した。鉄器の発見によって、周辺を拡張したところ、鉄器の先端部より西 5cm の位置で、石製模造品（双孔円板）一個を発見した。これは明らかに主体部内に副葬された遺物であるとの確信を得たが、層位の変化を認めることは困難で、土層の変化を持って土壌の輪郭を捉えることは不可能に近かった。この時点での土層は、ロームブロックの混入した褐色土で、比較的固めに積まれていた。土層の変化による土壌の確認が困難なところから、土壌の探索は発見された鉄器及び石製模造品の深度を計測し、平均した掘り下げを行い拡張していった。

出土遺物の深度は墳頂部より 90~95cm である。出土遺物を中心に長軸を略東西に 6.5m 拡げ、平均 10cm 程掘り下げた時点で、わずかな土層の変化を認めた。つまり、幾分濃褐色土及び湿った感じのする部分の輪郭に沿って、長径 4.8m、中心幅 1.4m の長楕円形を主体部と確認した。

土壌内充填土は、周辺の封土とほとんど同質のもので、土壌底に於てわずかに、ロームブロックが多く敷かれていた程度である。

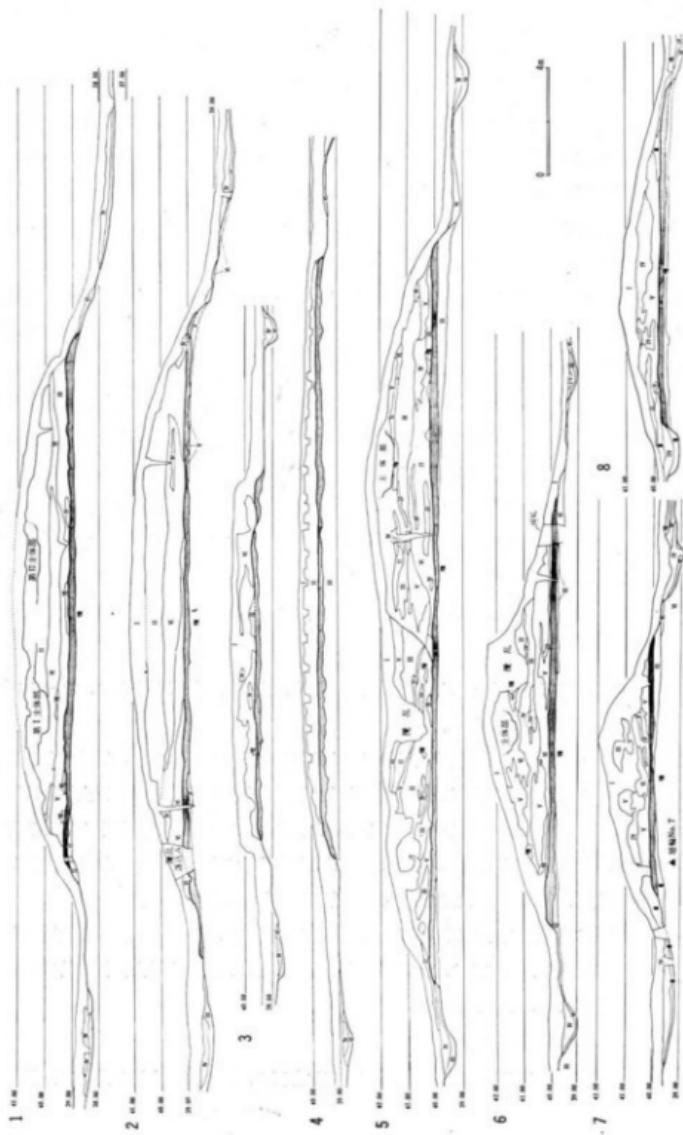
発見された遺物は、鉄器、石製模造品 10 枚（出土範囲は鉄器の周辺に 7 枚、単独で各 3 枚）さらに円板と重複して滑石製の白玉が計 32 個（水洗い発見 7 個）発見された。出土範囲は円板とほぼ同一で、直径 30cm 四方に亘って散在していた。さらに東 50cm に長軸中心線より南に 13cm の地点で、炭化物を認め、その先端に柄部が袋状を呈する細形（身）の鉄鉗を発見した。刃先端部は東を向き、刃部を縱にした状態で、保存状態は極めて悪かった。

墳頂からの深度は鉗刃部上で 1.27m を計った。さらに鉗より北に 45cm 離れて 鉄鏃 2 点が発見された。鉗に接続した炭化物は、鉗の柄であると推定されたが、土壌内西側に於ける排土では、石突の発見はできなかった。

### 第2主体部（挿図第 5 図下）

墳頂グリッド区内で、わずかではあるが土層の変化を認め、第1主体土壌と並行に長軸をとり、平均に掘り下げを行った。その結果、長軸線上のほぼ中心部で鉄劍 1 口を発見した。出土

第6圖 橋丘断面図



状態は刃先を東に刃部を横にして発見された。さらに剣より西に約90cm離れて平根式鉄鎌2点が重なって発見された。いづれも保存状態は悪く、酸化が極度に進んでいた。

本主体部の遺構は、第1主体部と同種のものと思われ壙内の充填土の排除及び壙壁の検出は、困難をきわめた。

土壙の全長は約4m(東側で一部切断されているので)前後と推定され、壙底部で80cm、外径が約1.1mと推定された。深さは、壙壁をわずかに15cm程残すのみで、正確な掘方遺構は把握できなかった。

第1主体との比高は、幾分第2主体の方が上面に設置され、両者の高低差は32cmである。

また、先の粘土塊検出あるいは、東西トレンチ墳頂西側よりの土師式土器の発見は、この主体部の埋葬と何んらかの関連性があるものと思われるが、明確なるきめてはない。

#### その他の遺構(図版第4、挿図第4図)

墳頂グリッドを全面的に掘り下げたところ、第2主体部壙壁より南に約70cmの地点で、鉄剣2口と大形鉄鎌を発見した。鉄剣の発見によって、第3の主体部とも思われたが、これら遺物には遺構は伴わず、一応棺外遺物として取り上げた。

剣の出土深度は第2主体部壙底より15cm上で、1口は切先を南西方向に、他の1口は西北方向を向いていた。いづれも刃部を横に、また大形鎌は刃部を東南に向けていた。さらに、剣の中心部より西に60cm離れて鉄鎌2点が発見され、鎌より西に1.9mの地点では、刃部を西に向けた鉄斧が発見された。この斧の位置から第2主体部壙壁までは約50cmの位置にある。これら出土遺物の深度は、ほぼ同一である。

この一連の中心線に出土した鉄製品の出土は、第3の主体として捉えることも可能かと思われるが、小結の項で論ぜられると思う。

同じくグリッド内であるが、第1主体部より北に2mの地点で、一群の滑石製白玉を発見した。やはり遺構を認めず、出土範囲は約70cm四方に散在し、深度は第1発見の玉から15~20cmに亘って発見された。この玉類は極めて小形のものであったので、検出は困難を極めた。従って、周辺の土砂はすべて持ち帰り、水洗いを行った。その結果合計151個を発見するに至

	層位	表
1. 第1号墳南北断面積	I : 表 土	VII : ローム塊を
2. 第1号墳西東断面図	II : 褐色土	含む暗褐色土
3. 第2号墳南北断面図	III : 暗褐色土	VII : ローム塊を
4. 第3号墳東西断面図	VI : 黒色土	含む黒色土
5. 第5号墳主軸東西断面図	V : ローム塊を	VII : 黄褐色ソフ
6. 第5号墳後円部南北断面図		トローム
7. 第5号墳前方部南北断面図		
8. 第4号墳西東断面図	含む褐色土	

第6図 凡 例

った。また、この玉群の出土深度は、先の鉄製品と同一レベル上であった。

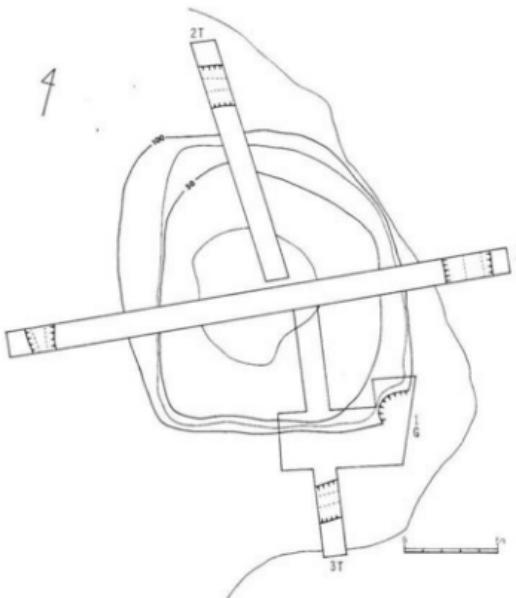
#### 第4節 調査古墳2 第2号墳

本墳は第1号墳より南に約30m離れた地点にあるが、墳頂及び周辺は耕作地となっており、墳形は著しく変形している。墳麓からの高さは約1mで、墳頂面は平坦でわずかに中心部で盛り上りを見せる程度であった。従って、墳丘面も変形しており北東側でわずかにその名残りを見せるが、南西面では墳丘裾が削り採られ、急激な断面となっている。現状の形態は南北16m、東西17m、高さ1m強であり、円形と言うよりは、むしろ方形に近い形状をしている。しかし、当方にしばしば見られる小円墳の残存形態と良く類似していて、古墳と識別することはできる。(図版第12、挿図第7図)

各トレンチによって周溝を確認した。それによると、周溝外端東西では25mを計り、南北で約25.5mを計った。従って、本墳の築造形態及び大きさは、直径約21m前後の円墳である

ことが推測された。周溝幅は均一でなく、T1東北側で最も幅広く、外幅が2.6m、内幅が約1mあり、立ち上りは内側で緩く、外側で幾分急傾斜を呈している。表土からの深さは西側で約80cm、他はほぼ同じような掘り方であった。

主体部グリッド設定区を、全域に涉ってハードロームまで下げて見たが、埋葬施設の発見には至らなかった。ただ、耕作土に混って、砂質粘土と見られる土砂が一部見うけられ、主体部の発見を期待したが、すでに農耕に



第7図 第2号墳 墳丘実測図

より攪乱がローム層まで達しており、主体部と思われる石材及び掘り方すら判然としなかった。従って、本墳に於ける主体部は、すでに度重なる農耕のため失われてしまったものと推測された。

## 層序

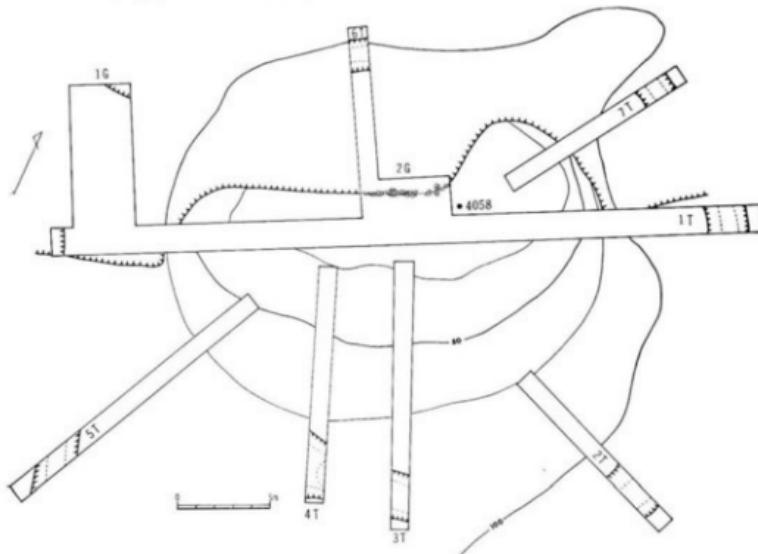
T1断面によると、旧地表黒色土から現地表までは、中心部で約90cmあり、中間に変則的ではあるが、墳丘盛土と推定されるロームブロック混りの暗褐色土が平均30~40cmある。

## 第5節 調査古墳3 第3号墳

本墳は2号墳裾より南に約20mの地点に位置し、2号墳同様耕作によって著しく変形していた。(図版第12、挿図第8・9図)

墳丘形態は一見して前方後円墳のようだが、その形状をとどめるのは東面の後円部と推定される部分のみで、他は形態として捉えることは困難であった。

本墳の規模は長軸が約24m、後円部の推定径が約14mで、耕作面の最も高いところで、約1mであった。標高は40.58mである。

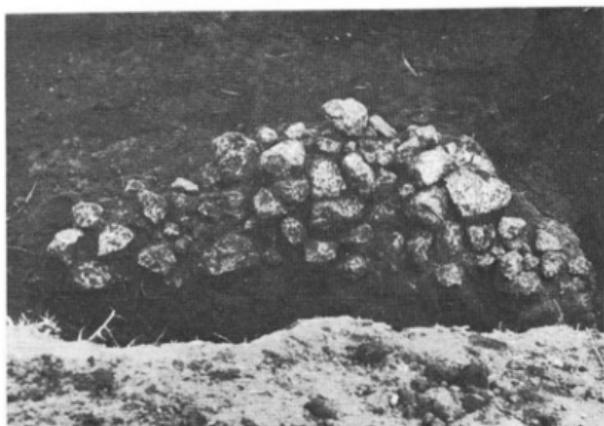


第8図 第3号墳 墳丘実測図

調査は、長軸に添って幅 2m のトレンチを 36m にわたって掘り下げた。その結果、東後円部と推定される部分で明瞭な周溝を確認し、西側でも落込みを検出した。そこで、長軸中心から東南面にかけて、4 本のトレンチを入れ、また北面にも 2 本のトレンチを設定し、主体部の確認及び周溝の探索を行った。しかし、各トレンチによって周溝は検出されたが、主体部の確認には至らなかった。周溝幅は T4 をのぞきほぼ一致しており、平均幅は 2m~3m で深さは平均 35cm である。T4 周溝内に於いて焼土の検出をみたが、本墳に伴なうものではなく、本墳築造前のものと推定され、それを追跡したが、農耕による搅乱が甚しく確認は困難であった。各周溝の検出によって、本墳の築造形態が判明した。その規模は長軸 34.5m、後円部径 23.5m、前方部幅 21m で前方部を南西に向けていた。

#### 封土築成と主体部

旧地表面（黒色土）を整形し基底部となし、その上に 50~60cm の褐色土（一部ロームブロ



第9図 第3号墳の砂岩塊

ック混り）を積んでいる。全体的にローム系褐色土であるが、一部では黄褐色土層や黒色土層の混入も見られ、表土（耕作土）は平均 20~30cm で、永年の耕作で搅乱が著しい。断面にロークリー痕が明瞭に表

われている。

主体部は確認されなかつたが、T1 のほぼ中心部、若干北寄りのところから主体部に使用されたものかとも見られる砂岩の破片を多数発見した。この石材は全てこまかくくだかれ、縫の段差の崩れを防ぐために、使用されたもので、明らかに土留めとして用いたものである。一応周辺を拡張したが、遺構の痕跡は不明であった。従って、これが本墳に伴なうものであるかどうか判然としない。ただこの砂岩は古墳の石室に使用されたものと見られるので、小川台のいづれかの古墳に使用されていたものを掘り出して土留めに用いたものと思われる。

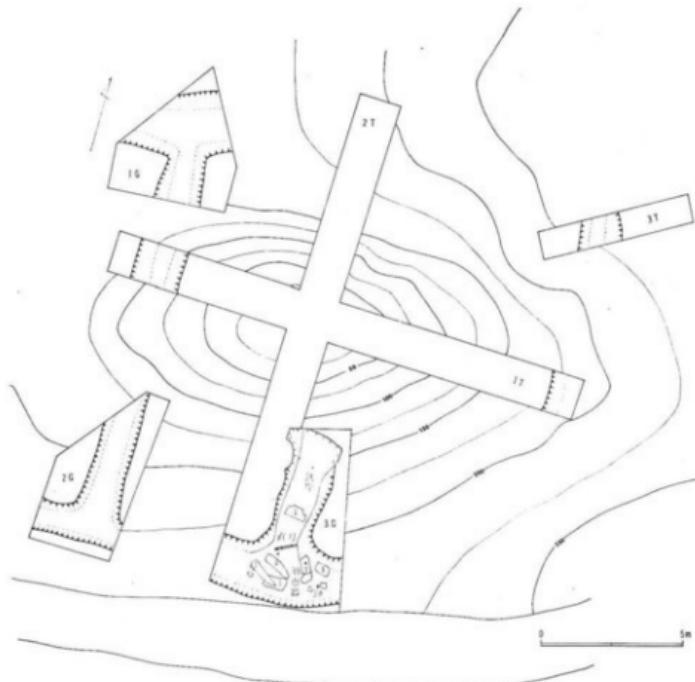
## 第6節 調査古墳4 第4号墳

## 墳丘（図版第13・14、挿図第10図、第6図8）

本墳は、台地南端部に位置し、第5号墳後円部墳麓に近接した状態にある。

墳丘の形状は東西25m、南北で14mの橢円形を呈し、鵝卵形をした古墳であった。墳頂部の標高は41.31mで、墳丘の傾斜度は北側に強く、南側では緩く、北側墳麓から墳頂部の高さは約1.7mで、南面では2m強であった。

古墳形態としては、かなり変則的なもので、土砂の流出および盗掘などで変形したものであろう。本墳の設置された位置は、台地先端部に当り、東から南側にかけて傾斜をなし、南側裾



第10図 第4号墳 墳丘実測図

に接して農道が走っている。この為土砂の流出も起りやすかったものと推定された。

### 周溝と築成

東西及北側で周溝が検出され、なお一層明確なる周溝状態を知るために、それぞれトレントを設定し掘り下げを行った結果、北西隅と南西隅に於いてほぼ直角に曲る溝を検出した。そこで更に明確さを得るため、トレントを拡張した。この溝は本墳を囲繞する方形の周溝と想定されるが、東側に於いては明確さを欠き、落込みも浅かった。一方直角に曲る溝はそれぞれ西側に延びているもようであった。周溝幅は広いところで2.3mあり、狭い箇所でも1.5mある。起ち上りは墳丘側でやや急で、外側では幾分緩かである。溝は全体に弧状を呈し、落込みの堆積土は黒色系の土層が主であった。周溝確認によって本古墳のプランが明確にされた。即ち本墳は、周溝起ち上り部の東西径が13.7m、南北径が13.8mとほぼ正方形を呈する方墳である。

南北トレントの南西を掘り下げ中、周溝内の落込みから砂岩質の石材を発見し、周辺を墳頂に向けて拡張した。

東西をつらぬく断面によって、本古墳の築成を知ることが出来た。それによると、基底部となる地山を整形し、その上に暗褐色の土をほぼ水平に積土し、その上に、ロームブロック混りの褐色土を40cmほど積んでいる。また、東側墳丘肩部では約50cmとその厚さをまし、西側でも幾分厚さをましている。

### 主体部

南面周溝内の石材発見によって、主体部の探査を行ったが、拡張するにしたがって、この石材は盜掘に依って、引きぬかれ周溝内に捨てられたものと判明した。周溝内から検出された石材は、大小合せて10枚で、材質は当地方特有の軟質砂岩である。検出された石材の配置を確認するため、周溝内を精査したところ、周溝内壁から墳頂部に向けて主体部の跡と思われる掘方が検出された。掘方は全体的に不明瞭な点が多く、周溝内側から奥壁までが約4mあり、幅は1.5mを計った。従ってこの主体部は墳丘麓に設置された小形の横穴式石室と想定された。鉄片が2点出土した他は、遺物は皆無であった。ただ水平に石材が一枚置かれていて、石下には粘土も敷かれていた。恐らくこの石材は原位置を保っていると見られるので、この高さが石室の床面であったと見られる。また床面の石は北側両端が抉られているので、ここに門柱石が立てられていたのではないかと推測されたが明確ではない。また発見された石材だけでは石室を形成するにはたりないので他にも捨てられたと見られる。

周溝内石材を取り除くと、石室澳道部と想定される部分から直刀1口が発見され、周辺部から多數の須恵器の小片が発見された。また、向って右側の石材下から長頭瓶の頸部と胴部の一部が発見され、それより南に50cm離れて、有窓倒卵形の鉄製鐸が発見された。その他、鉄片が数片発見されている。

## 第7節 調査古墳5 第5号墳

## 1. 遺構(図版第15~31, 挿図第11図~16図, 第6図5~7)

本墳は4号墳に近い台地南端部に位置し、調査前の現状は山林であった。隣接する古墳は4号墳のみであるが、本墳の南西側に隣接して、数基の古墳が存在したものと思われる。現在平坦な耕作地を形成しているが、耕作土色の変化や主体部岩材の一部と推定される砂岩片を認めることができ、また地元の人々の話しても、湮滅古墳のあることを推測することができた。

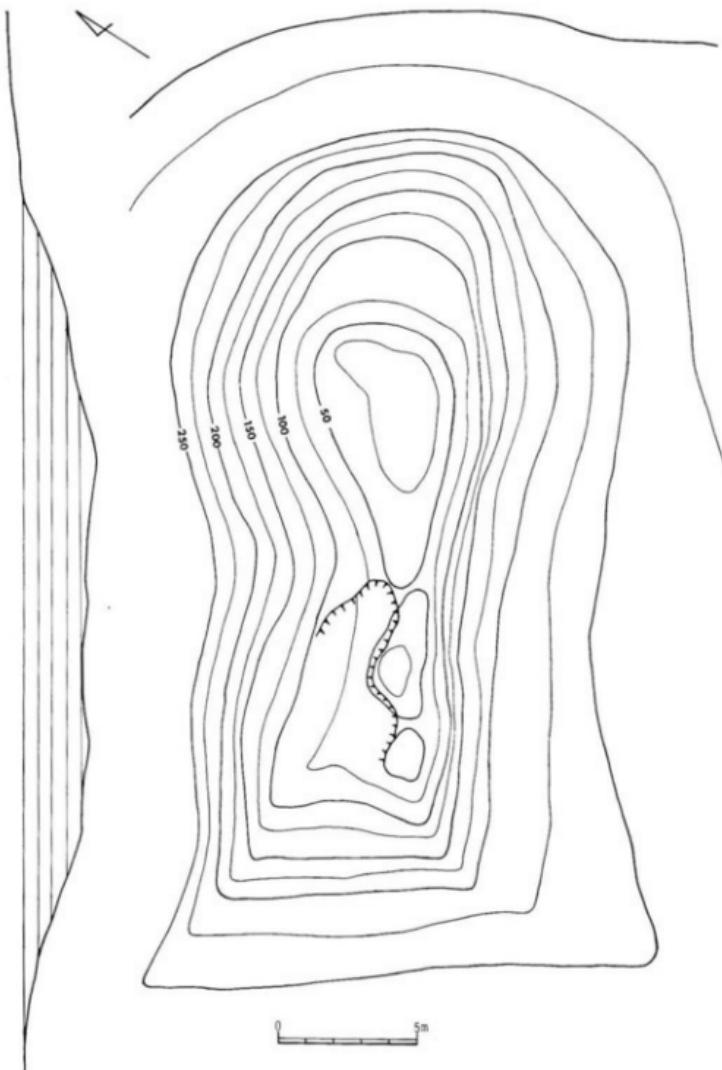
墳丘形態は比較的良好に保たれていたが、測量の結果墳丘東南面にかけて崩壊が大きく、特に括れ部から前方部にかけては、数箇所の盗掘穴も含めて、墳丘が著しく変形されていた。しかし、後円部では中腹部を除き丸味を帯びた墳麓の稜線も、一見して認めることができた。

墳丘北側では、前方部で幾分崩れが認められたが、後円部から括れ部をへて前方部に至る墳麓線も、比較的良好のこり前方後円墳の形態を窺い知ることができた。しかし、前方部前面に於ける隅角は、土砂の流出がひどく両角とも明瞭ではなかった。

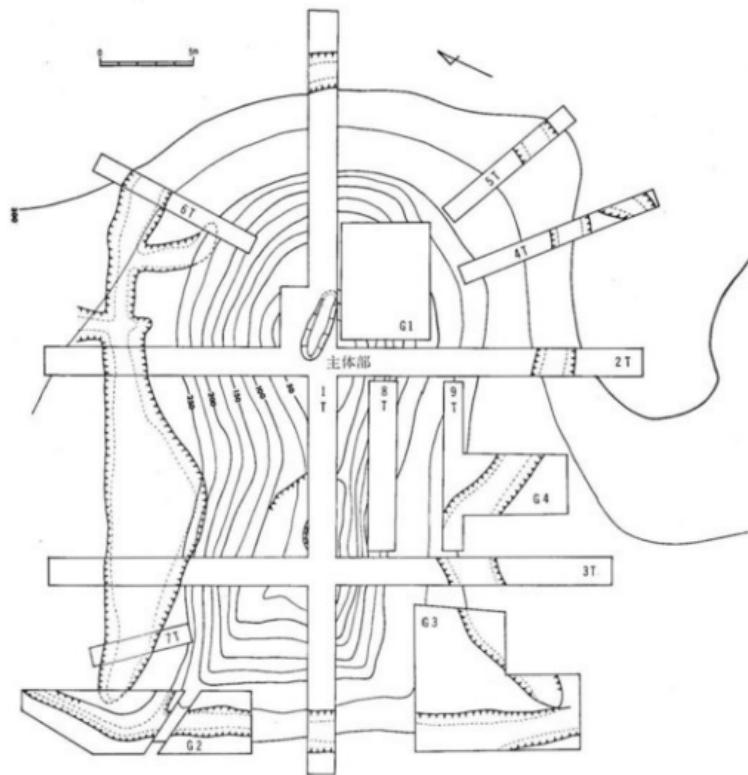
墳丘方向は南西に前方部を向け、長軸30m、後円部径21.3m、前方部幅18mで、墳丘形態としては、前幅の広い、前方部の短いぎんぐりした形態である。後円部墳麓の稜線から墳頂までは約2.65mあり、前方部の墳頂より約50cm高くなっている。標高は後円部墳頂で42.60mを計測した。尚前方部墳頂南東側には、盗掘時に、中腹の土砂が盛られている。

調査は長軸を綫断するトレンチと、後円部及び前方部にそれぞれ主要トレンチを設定して行われた。

後円部トレンチ断面では、平坦な黒色土(旧表土)面上に盛土が行われている。積土は大別して褐色土と暗褐色土に大別されるが、両層ともローム土が含まれ、一部には黒色土や黄褐色のローム塊も含まれている。旧表土は兩埴麓部分まで残り、埴麓から周溝にかけては、地山を削ってなだらかに下り、ローム面を掘り込んだ溝底では、ハードローム上面まで至っている。そして、周溝外側起上り部から外部にかけては、旧表土面を削りとり、ソフトローム面上まで削られていたものと推定される。従って、それらの墓域内の土は、築造に一部使用されたものと思われる。旧表土面上の標高は各トレンチ断面に於いても、平均して40mを計測している。周溝幅は、東側で上端幅4.20m、起上りは両者とも緩く、深さは約35cmと浅く溝底は弧状を呈している。周溝内の堆積土は暗褐色土か黄色土で、複雑さはなく墳丘盛土の流出と自然な埋土によるものと思われる。両側周溝でもほぼ同様な状態である。一方前方部でもほぼ同様な盛土状態を示すが、あまりにも盗掘による攢乱部分が多く明瞭な積土状態は不明であった。



第11図 第5号填填丘実測図



第12図 第5号墳 遺構図

ただ東西に於ける周溝で、後円部とは違った掘方であることが判明した。旧表土の整形は後円部とほぼ一致するが、周溝底に於ける深度が東西では約30cm異なる。東側周溝では溝底海拔が39mラインを割っているが、西側では溝底が39mライン以上であることでも明瞭である。また、東側では上端幅が約3mあり、外側では緩く、内側では急な傾斜を呈しているのに対して、西側では旧表土表面整形部から緩く下って、大きく弧状を呈して、また起ち上るのであるが、起ち上りがありにも緩く周溝幅を把へるのに困難である。一応現墳麓稜線上から把えたとしても、5m弱の幅広い溝である。

長軸断面に於いても盛土状態は大差ないが、括れ部に於いて前方部と後円部の積土の時間差

を現わす土層の変化が認められた。長軸断面に於ける旧地表は、水平に整えられているが、後円部後方の周溝起ち上りまでは、約4m手前で旧地表の黒色土層が切れ、一段下って水平になり周溝起ち上り部に至る。周溝上端幅は2.50mで起ち上りは緩く、溝底は弧状を呈している。溝の深さは約50cmで堆積土は他の溝と同様である。

括れ部に於ける層位の変化は、明らかに時間的差異を示すもので、後円部築造と前方部築造が、同時に行われたものでないことが窺い知られる。

一方、本墳をめぐる周溝は、かなり変則的なもので、各トレンチ及び前方部隅角の調査を総合すると、後円部から括れ部に於いては明瞭に把えられるが、前方部に於いては、把え難い点が多い。つまり前方部隅角附近では溝が浅くなる。この浅く起ち上った隅角部はいわゆるブリッジ状を呈している。また前方部前面の周溝は側面の溝に接続しないで、外側に延びている。

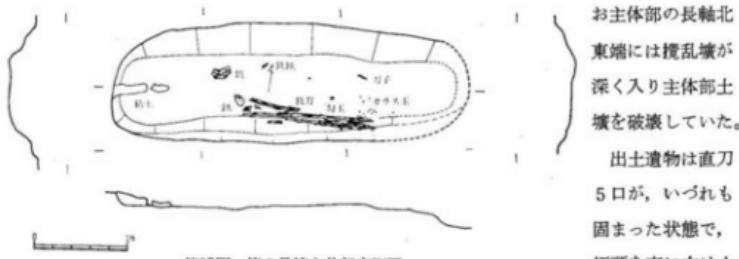
この前方部前面の周溝は、中央付近でやや幅広くなっているほか、西側の前方部隅角に細く立ちあがる枝溝があったり、両端はやや後円部側に折れ曲りながら延びているなど、特異な状況が観察された。

埴輪列を走った墳丘西側及び周溝の全掘によって、明瞭な周溝掘り方が現われ、北西部は、所謂一種の楯形周溝を示すものと判明した。

主体部は後円部のトレンチ掘りによって、鉄器及び僅かな砂質粘土の出土したことによって注意され、墳頂部に設置された埋葬施設を想定して、後円部墳頂にグリットを設定し、表土面から慎重に掘り下げを行った。盛土による層位的な変化は把え難く、土壤の範囲も明確さを欠き、遺構検出には困難をきたした。

僅かな土色の変化を追って、土壤の輪郭を求めて掘り下げると、先のトレンチによって検出された鉄器の位置から約30cm西に、数口の直刀を発見した。出土状態は極めて悪く、鉄刀の腐蝕が進み一種の塊状を呈していた。

これによって直葬主体部と判明し、遺構のおおよその輪郭を把えることができた。土壤は長軸をほぼ東西にとり推定3.8~4mあり、幅は0.8~1.0mの長椭円形のものと推定された。な



第13図 第5号墳主体部実測図

墳南壁寄りに埋納されていた。柄部には鉗の一部がかろうじて原形をとどめていた。

直刀には、鞘部の木目が一部明瞭に残り、直刀周辺からガラス製玉が51個発見された。また、直刀埋納レベルは、現墳頂部より約110cm下で、切先部で約90cmと傾斜を呈していた。玉群より30cm西に離れて勾玉1個が発見され、北寄り15cm離れて刀子1点が発見された。更に直刀切先部より北寄り35cmで鐵鐵1点が発見され、また、直刀切先部先端及び斜め北寄りに、直径20cmほどの鐵塊が発見された。この鐵塊は矢柄の一部が他の鐵製品と混同し、塊状になったと推定され、明瞭な矢柄痕が一部で観察された。一方、土壤西側に於いて粘土塊が検出されている。

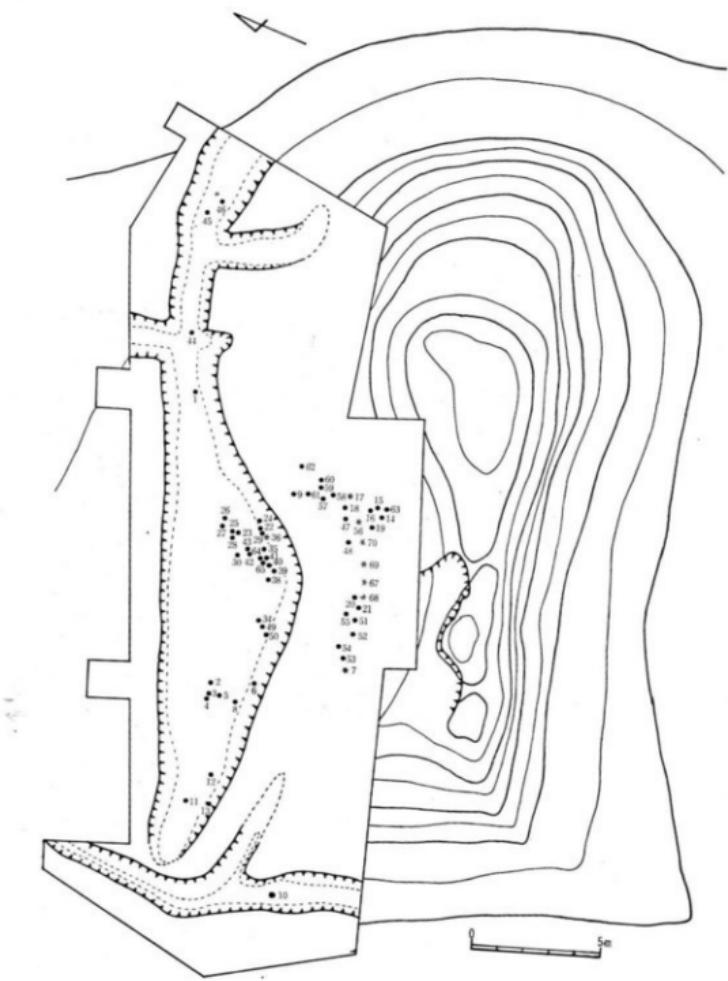
主体部土壤の位置は、褐色の盛土中で、墳頂部より約1.2mぐらいのところに設けられ、土壤の深さは約50cmぐらいであった。また、遺構の掘り方は明確さを欠き、粘土などの敷かれた痕跡は皆無であった。しかし、墳底には黄褐色系のローム塊が多目に置かれ、主体部設置の為に意図的に積土されたものと窺われる。また主体部は後円部ほぼ中央に位置し、主体部下の盛土は墳丘基底に至るまでローム土の割りあいに多い褐色土によって固められ、その周間に黒褐色土が多いとの対照的である。また、これらをとり囲むように封土下半部にドーナツ状の黄褐色土が各トレチ内に観察されているので、後円部の墳丘は、中心を意識し、かなり計画的に円形に盛られたものといえよう。



第14図 第5号墳後円部北側周溝内土師器出土状況

## 2. 墳輪の配置

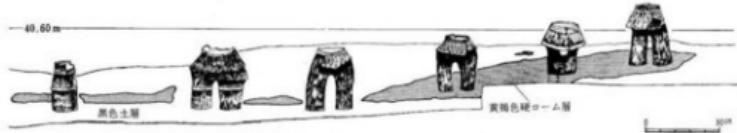
本墳の埴輪列は形象列と円筒列とに分けられる。この内形象埴輪列は北側中段の前方部から後円部の前方部分までに樹てられていたと見られる。但し原位置を保っていたと見られるものは、No.7, No.67, No.68, No.69, No.56, No.70, No.17の7点にとどまり、その他は周



第15図 第5号墳 墓輪位置図

溝内に転落するか、転落をまぬがれても破損散乱している状態で発見された。従ってその配列を明確にする事は出来ない。只検出された埴輪片を整理検討して見るとその大要は知り得る。円筒列については、原位置を保っていると見られるものは一点もなく、従ってその配列も明確には把えられない。只 No. 14, No. 15, No. 19, No. 63 の位置から朝顔形と円筒の破片を検出しているので、北側斜面の形象列より上に、数箇の円筒と朝顔形円筒が樹てられていた事は間違いない。又後円部北側周溝内 No. 46 地点と、後円部背面中段からそれぞれ円筒の破片が出土しており、特に背面の円筒片は底部であって、或は原位置かとも思われる所以、後円部墳頂付近に円筒列が樹てられていた可能性は強いように思われるが、断定は出来ない。又 T3 南側の周溝内からも円筒片が少量ではあるが検出されており、前方部の墳頂付近にも円筒が樹てられていた可能性はあるが、後円部より更に明確さを欠く。

形象列の内最も前方部に近く原位置を保っていたのは No. 7 の人物の台部である。腰から上が失われているので明言は出来ないが、恐らく馬子であろう。次にこの人物より後方やや下った No. 52, No. 53, No. 54 地点から馬の耳が一点ずつ三点出土し、その附近に多少の馬の一部と見られる破片が残っていた。この馬の首は周溝内の No. 34 地点にあり、No. 52 と No. 53 の耳が接合した。従ってこの馬は No. 7 の次に樹てられていたと見てよい。ただし足などは全く発見出来なかった。残りの No. 54 の耳と対と見られるものは No. 49 の耳で、この位置の馬が

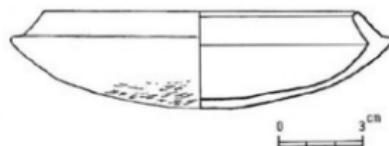


第16図 第5号墳人物埴輪配列状況図（左から No. 17, No. 56, No. 70, No. 69, No. 67, No. 68）

少くとも 2 頭であった事を示しているが、首は、No. 34 の他に周溝内 No. 38, No. 39, No. 65 地点と 3 箇発見されており、この附近に樹てられた馬は四頭であった事を知り得る。次の No. 21 は人物でほぼ原位置と見られるが破損が甚だしく、台部も失われている。人物の種別は不明であるが恐らく馬子であろう。次に 4 体の武人が No. 68, No. 67, No. 69, No. 70 と並んでいたがいずれも腰から上を失っている。ただ桂甲の着用が認められるので武人と判定出来る。整理の結果 No. 70 のみは No. 48 地点に胸の部分が、周溝内 No. 36 地点に首の部分が落込んでいる事がわかり、どうやら復原する事が出来た。又少くとも No. 40 地点及び No. 28 地点出土の綫付の衝角型兜を被った首は、残りの 3 体の武人のいずれかのものと想像されるが、胸の部分が失われているのでうまく接合しない。No. 56 は男子で腰から上が折れて墳麓に向ってうつむきに倒れていた。比較的保存良好であり復原に成功した。次は原位置よりやや下った地点 No. 47 の腕及び胴の一部分と、No. 18 地点の鈴である。おそらく No. 56 と No. 17 の中間に鈴を腰に

つけた女子が樹てられていたのであろうが、失われたものと見たい。次が No. 17 地点の女子で、これは No. 56 地点の男子と反対に腰から上が埴丘に仰向けに倒れていたが保存良好のため復原に成功した。ほぼ原位置を保ち発見されたものは以上であるが、No. 17 の直下約 40cm から No. 58 地点で女子の腰から下が発見された。ただしこの女子は原位置ではなく、埴丘からずれ落ちたものと見られる。整理の結果周溝内 No. 64 地点に転落していた顔がこの胸部に接合した。この女子の原位置は No. 17 の後円部よりにあったと見られる。この附近から後円部が北側にせり出しているため、埴形に沿って斜めにずり落ちると現位置に台部が残る事になる。そのずり落ちた方向を延して行くと丁度首が発見された No. 64 地点に至るので、この推定はまず間違いないものと思う。次の No. 59 は女子で胸より上だけを残す。その脇の No. 60 の女子台とはつながりそうでつながらない。従って No. 59, No. 60 は 2 体である。この 2 体の原位置も後円部の埴丘に沿いほぼ同じ高さに樹てられていたものと思われるが、斜め前方に次第にずり落ちたものであろう。No. 22~24 の首部は No. 60 のものと考えられる。更に No. 62 地点から美津良が一点発見されているので No. 60 の後に男子が樹てられていたと推定されるが、全くと言って良い程破片は失われている。更に No. 26, No. 1 は家形の破片なので、埴輪列の最後尾に近く家形が樹てられていた事は間違いない。それが男子の前なのか後なのかは正確には判らないが、No. 1 地点からもかなりまとまって破片が出土しているので一応後と見たい。いずれにしても No. 60 以後埴丘中段からは、埴輪片は一点も発見出来ず、全部周溝内からであり、しかもその数は極めて少くなる。従って形象埴輪列は No. 1 が置かれた原位置で終っていたものと考えている。No. 44 から人物の顔の一部が出土しているが、これは原位置からの自然転落ではなく、人工的な移動と見たい。次に No. 7 より先についてみると、埴丘中段からは埴輪片はほとんど出土していない。ただし埴輪が樹てられていなかったのかと言うとそうではなく、周溝内から、埴輪片が発見されているところを見ると、その数は少ないが樹てられていた事は間違いない。ではその樹てられていた位置はどこかという事になるが、残念ながら原位置と見られるところから発見されたものが一点も存在しないので、明確にその位置を把握する事は出来ない。そこでやや大胆ではあるが転落位置からその原位置を想定してみると、先づ No. 31 は馬の顔の破片であり、No. 37 は顔の下半分であるが、この二点の出土地点から埴丘上に直線を延ばすと、No. 7 の地点と極めて近い地点に達する。従って No. 37 の人物は恐らく馬子で、本埴輪が埴輪列の先頭に樹てられていたものと想定しても、先づ大過はないものと思っている。次が周溝内に転落している No. 31 の馬、次が No. 7 の馬子、No. 34 の馬と並べられていたと思われる。次に No. 33 の 2 地点発見の鶴首、同 No. 33, No. 32 地点発見の水鳥の埴輪であるが、これは、埴輪列の中に加へられていたと見るよりも、出土地点から考えて埴丘中段よりは埴籠に近く樹てられていたか、又は外堤上に樹てられていたものと考える方が良

いように思う。又 No.10 地点より鹿の埴輪が出土しているが、これは前方部の墳丘中段あたりに樹てられていたと見るべきであろう。次に周溝内転落の埴輪の内記載したものの他はほとんど円筒片であり、その量は形象片の数倍に達する。これ等の円筒埴輪が何處に樹てられていたかが又問題となるが、形象列の上から転落して来たとはどうも考えにくいので（上から転落したとすれば、一点ぐらい形象列のところに止まっているものがあって良いように思う）、形象列の下、埴籠に近いところに円筒列が樹てられていたものと推定しているが確言は出来ない。



第5号墳後円部北側周溝内出土土器実測図

## 第二章 遺物

### 第1節 第1号墳出土遺物

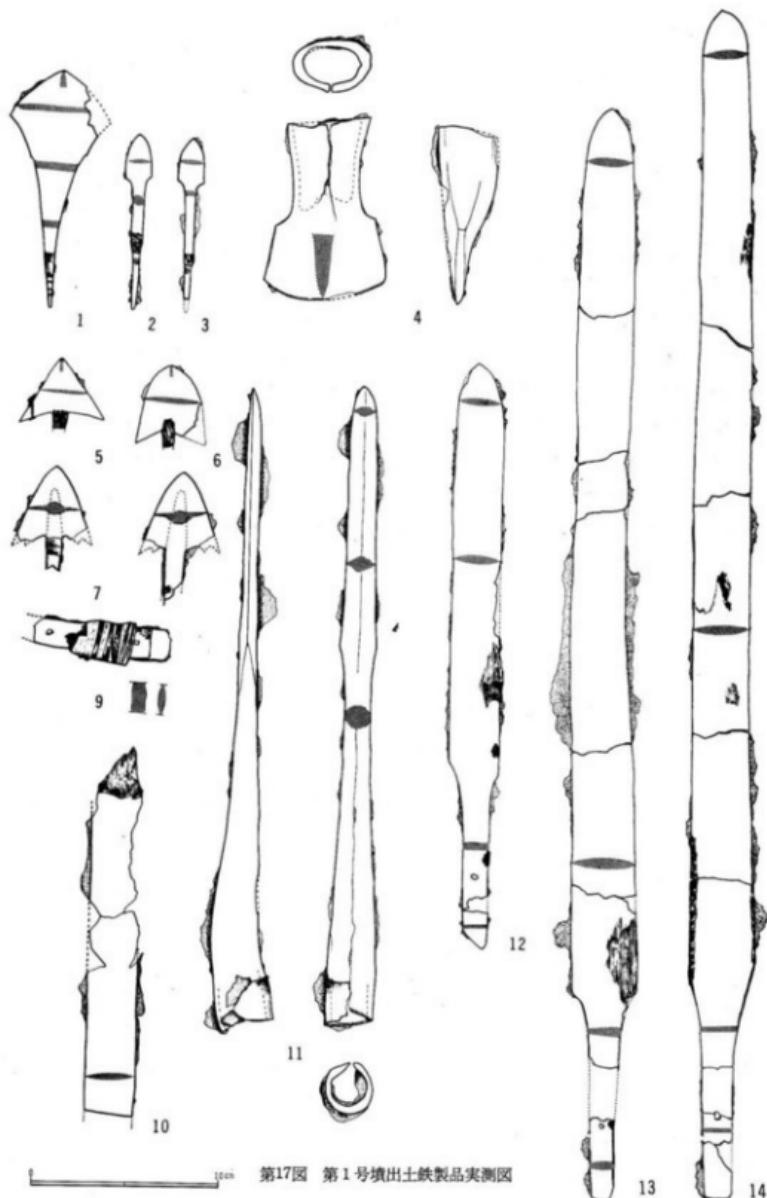
第1号墳出土遺物は、第1主体部、第2主体部、第3主体部？ 第1主体部北側遺構、その他からの出土遺物となる。第1主体部は、墳丘中央より南に偏って存在する土壇で、南北トレンチ発掘中、その中央部から遺物を発見したもので、最初の発見遺構として確認された。この土壇内出土遺物は、鉄器と石製模造品であり、別表の通りである。第2主体部は墳頂中央部よりやや北側に発見された土壇で、鉄器のみ、第3主体部と思われる一群は、墳頂中央に位置して発見されているが、土壇はついに検出しえなかった。これも鉄器のみによって構成され、詳しくは、剣2口と大形鐵1、鐵2、鉄斧1の3グループに分かれて検出されている。墳頂発見の土師器壺はこの延長線上にほぼ位置している。第1主体部北側遺構は土壇が検出されなかつたが、その後の検討により、第1主体部の上部から切り込まれた土壇のあった可能性が大となり、小規模の土壇が存在したように考えている。ここからの遺物は一塊の白玉群であった。南側の周溝内出土の盃は、他に伴出物を持たないが、トレンチ内発掘で、周溝全てを発掘していないので他にも発見の可能性を持つものである。特別な遺構をともなわず、直接関係は不明であるが、墳頂部出土土器と略同一時期の土師器とみられ、この古墳に関する遺物とみられる。

第1号墳出土遺物を、遺構別に次に示し、個々に解説しておこう。

遺構	鉄製品	石製品	土製品
第1主体部	剣1、鉢1、鐵2、刀子1	有孔円板10、白玉39	
第2主体部	剣1、鐵2		
第3主体部？	剣2、鐵3、斧1		
第1主体部		白玉151以上	
墳頂部西側			土師器壺
周溝南トレンチ内			土師器盃

剣（図版第8—5、挿図第17図10）

身部の破片で、第1号墳第1主体部出土品、残念なことに前後を失い現存長19.5cm、身幅2.6cm、厚さ3.5mm 鎏はあまり明瞭でない。銹化はげしく一端は着色し、折曲り、割れてい。鞘の木質がごく少量付着している。



第17図 第1号墳出土鉄製品実測図

#### 鉢（図版第8—3、挿図第17図11）

細身の袋鉢で、全長33.7cm、第1号墳第1主体部出土、身部長14cm、身は柳葉形、関部分で幅20mm、厚さ9mm、尖端近くで幅11mm、厚さ5.5mm、鉗は明瞭で、尖端まで通している。関の削りはゆるやかであるが断面は角張り、鉗線の延長とで平たい六角形を呈するが、まもなく円形となり袋部となる。現在袋部の基部近く鋸化が甚しいため折れ曲がっていたり、小口が明瞭でなく、釘孔等判明しない。小口の径は約25mmで、小口より15.5cmまで合せ目の線が見られる。小口より16cmのところで外径1.4cmを測る。

#### 刀子（図版第8—4、挿図第17図9）

柄部のみの残片品、関の状況も不明、この付近で身幅1.6cm、背の厚さ約4mm（背が明瞭でない）、柄部の長5.5cm、幅約1.4cm、端近くに目釘孔1個があり、径2mm、現在木装の柄の一部が残っている。一本の木にみえるが、あるいは二枚の板を合せてているかもしれない。外形は梢円で柄元がやや太く、端は上方に反っている。この外側をまばらに細皮か、繊維質の樹皮のようなもので巻き、漆を塗っているらしい。

この柄と同木で籠を作り出している。背幅0.7cm、側面の高さ1.6cm、左右（柄の小口から籠端まで）1.2cmの長方体をしたもの。

#### 籠（図版第8—1・2、挿図第17図7・8）

第1号墳第1主体部出土品2点、いずれも無柄の平根籠、ほぼ同形で籠身は平鉄板を切り抜いたように薄い板状である。逆刺がいずれも折損しているため明瞭でないが、切先から来る逆刺の内側に今一つ、小さい逆刺がついているようである。また竹製籠を籠身にかませ、糸で籠巻きした後、全面を黒漆（？）をかけて籠巻きの一部まで固めている。このため中央部の状態が明瞭でない。しかしながら切り込みが奥には入っているようである。1は現存長4cm、現存の幅3.7cm、厚さ1.5mm、中央部での籠身長約3.4cm。2は現存長4cm、同幅3.7cm、厚さ約1.5mm中央部の籠身長約2.75cm、籠の竹の太さ、径7.0mm。

#### 剣（図版第8—8、挿図第17図14）

第1号墳第2主体部出土品、数片に折れ、柄の一部を失っている。柳葉形の尖端、鉗角の明瞭でない薄手の身部で、現存長63cm、刃部長51.5cm、身幅関部で3.5cm徐々に細くなり、身部中央付近で3cm、尖端近くで2.4cm、厚さ各々0.6cm、0.5cm、0.4cm、関はゆるやかに抉られ、柄部の幅は徐々に減る。目釘孔が1個あり、関より7cmのところに径約3mm、柄幅はこの目釘孔の部分で1.5cm、厚さは極端に薄く2mm、柄部の厚さは全体に薄く、また柄端がかます切先状に一辺が長くなっている点やや特異な状況がみられる。この剣身は抜身で布に巻かれていたようで刃部等に锈着がみられる。また裏になっていた部分、身の中央付近に矢羽根かと思われるものがかなり付着している。

## 鐵（図版第8—6・7，挿図第17図5・6）

6は平根式の鐵で、平板を切り抜いたように一様の厚さで、主頭状を呈し、逆刺を抉り出している。柄は短く身部と同じ厚さでつくり出されている。全長4.4cm、幅最大は逆刺端にあって推定約3.8cm、厚さ3mm、柄部長9mm、幅5mm、端はやや狭くなる。範は柄端より1.5cmのところまで痕跡付着がある。

5は平三角形の鐵で、1と同様平板を切り抜いたようなつくり、長3.8cm、逆刺尖端の幅4.5cm、厚さ1.5mm、柄部長10mm、幅はほぼ一定で7mm、逆刺の抉りは刃部と同様直線的で、身部の長さ3.4cm、つまり柄の部分は逆刺端よりやや長くなっている。範痕は中央付近まであり、竹製であろう。柄部への装着は糸を巻いていたらしい。5・6ともに孔は見あたらぬ。

## 劍1（図版第8—14、挿図第17図13）

第1号墳第3主体部出土品、かなり錆化がはげしく、数片にわれている。薄手の劍身で、両面とも鎌を持つとはいいながらも稜角はあまり明瞭でない。両闘の抉りの状況もあまり明瞭でない。劍身部は先に行くに従いわずかに身幅をせばめているようである。闘近くで幅3.4cm、厚さ5mm、尖端近くで幅2.5cm、厚さ4mm、尖端は柳葉形。柄部の厚さ4mm、柄部幅は闘部で約17mm、端部で12mm、端より3.7cmの部分に径約2mmの目釘孔を1個穿っている。刃部長47cm、柄の一部を失ったため全長の詳細は不明であるが、柄部約11cmほどであろうか。

## 劍2（図版第8—13、挿図第17図12）

短剣で、第1号墳第3主体部出土品、柄端を欠損したが、現在長31.3cm、刃部長21.5、身幅はほぼ一定で、闘付近で2.7cm、尖端より7cmのところで2.6cm、厚さ4mm、鎌は明瞭でない。闘は直角に近く抉られている。柄部の幅もあまり変化なく、目釘孔付近で幅1.4cm、厚さ0.4cm、目釘孔は闘から6cmのところに径約2mmであけられている。身部に木鞘の一部、柄に布が少々付着している。

## 鐵斧（図版第8—12、挿図第17図4）

第1号墳第3主体部出土品、有肩袋柄の鐵斧、刃部の板状部分と柄の袋部からなり、全長9.5cm、刃部は円味を持ち幅約6.5cm、肩の部分で幅5.5cm、厚さは側面からでは一様で約5mm、肩部の抉りは直角まではいかず無論逆刺状も呈さない。袋部の作りは丁寧である。断面は梢円形となり、口の部分で外径4cm×3cm。合せは袋部のみ直線にしかみえず、錆化があるとはいえない手がこんでいる。

なお袋部、刃部の一部に布片の付着がある。

## 鐵1（図版第8—9、挿図第16図1）

第1号墳第3主体部出土品。全長12.6cm、正方形に近い身部を持ち柄部との境の明瞭でない平根式の鐵。有柄脇抉式ともいえる。逆刺を全く持たないが、先端刃部は外膨みに柄に向う部分は脇抉となっている。片側を欠損しているが推定最大幅5cm、厚さ刃部で0.3cm、全体の中央部で0.4cm、柄部0.4cm、柄部端は徐々に尖らせてある。かなり銹化しており、身部に穿孔等の存在は不明である。

寛の着装は柄部約3.2cm付近まで、横位の樹皮様（麻のようなものか）の付着がみられるので、やや短かいようでもあるが、これまでが何かで巻いた上、竹籠に着装されたのではないかろうか。いずれにしてもこの地方では類品の少ない大型鐵である。

#### 鐵2（図版第8-10・11、挿図第17図2・3）

第1号墳第3主体部出土品、2・3ともほとんど同じつくりである。

小形の有柄平根式の鐵で、現存長9.3cm、柄端をわずかに欠損している。刃部は柳葉形を呈し、片面中央にやや鎌があるように見える。脇抉はほぼ直角で刃部の最大幅もここにあり、約14mmを測る。厚さ約2mm、柄部は断面正方形、極く末端では円に近くなる。寛は刃端より5.8cmの部分以下に竹とその上の樹皮がわずかに残っている。この付近での断面は一辺約3mm、なお刃部に細かい織りの布の銹着が見える。3は現存長8.5cm柄部は2よりも欠損が多い。ほとんど同型だが、2の刃部長25mmに対し、3は23mmとやや小さい。刃幅最大は14mm、これも抉りはほぼ直角、寛は刃端より6.2cm以下に樹皮がみられる。柄部に2の刃部についていたと同じ布が付着している。

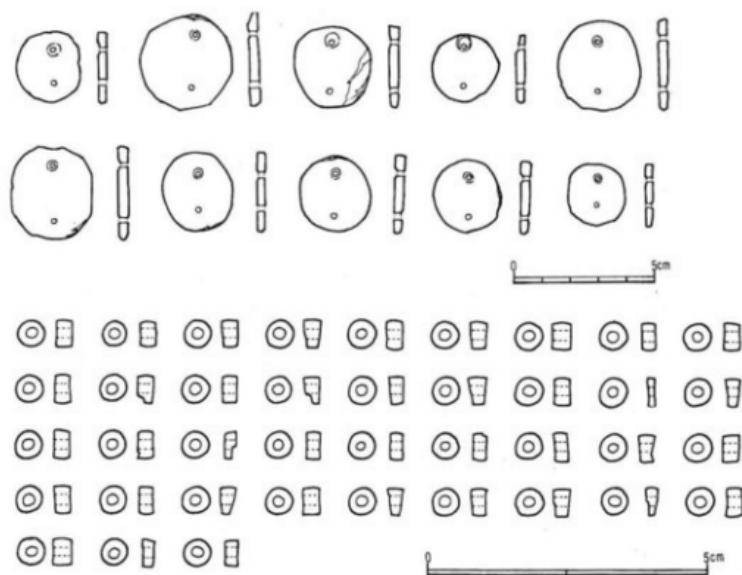
#### 白玉（図版第9、挿図第18図）

第1号墳第1主体部中央付近に有孔円板とともに散在していたもので39個が検出されている。白玉としては普通の大きさで、平均値高2.67mm、径4.84mm、孔径2.23mmを測る。形状は腹の稜線のみられるものが少なく、ほとんど円筒状をしている。上下面の研磨はやや粗く、多くの玉に横からのきずがみられる。いずれも滑石質であるが、中に雲母片岩なども含んでいいようだ。第1主体部北側から出土した白玉に比べると作りもやや雑である。第1主体部外の白玉の大きい方がやや類似する。

#### 有孔円板（図版第9、挿図第18図）

第1号墳第1主体部中央部から発見されたもの10個であるが、特殊な配列はみられなかったようである。いずれも双孔円板で、大小あるが丁寧なつくりである。計測値は別表のようであるが、最大が33.5×34.1mm、厚さ4.5mm、孔心心距離17.7mm、孔径1.9mm、最小は2.3×21.7×2.7mm、孔心心距離9mm、孔径1.7mm、滑石質材でつくられているが、ほとんど同じ岩質であり、同時に作られたものであろう。なお孔は両面から各1孔づつあけられている。

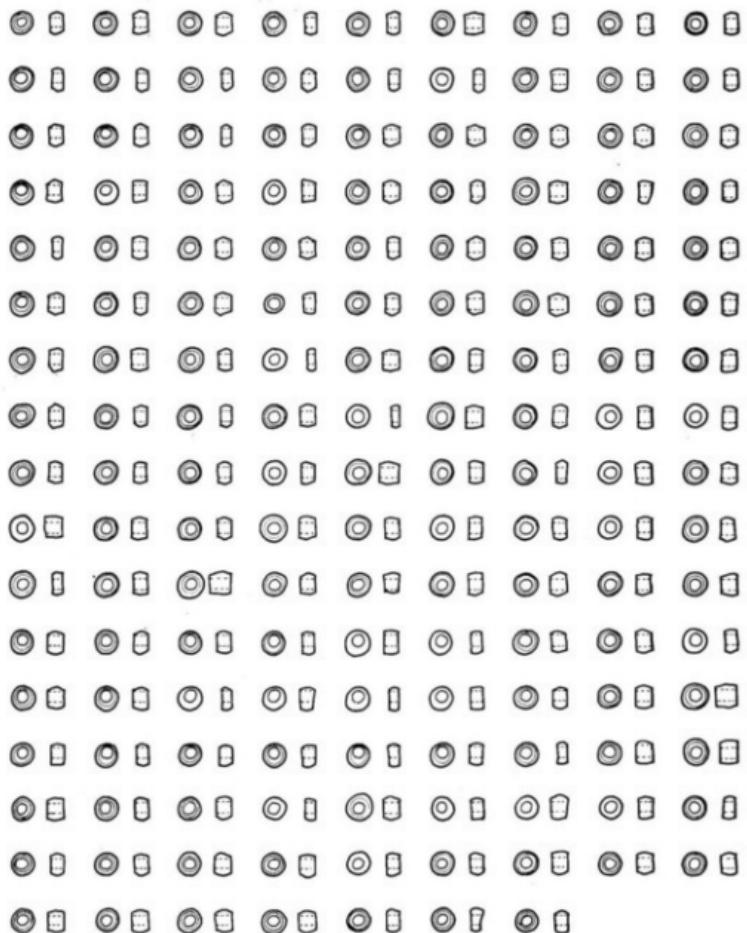
第2章 遺物



第18図 第1主体部出土有孔円板・白玉実測図

	厚さ	外径	孔径		厚さ	外径	孔径		厚さ	外径	孔径
1	2.95	4.95	2.40	14	2.65	4.90	2.10	27	3.05	5.10	2.30
2	3.10	4.40	2.20	15	2.80	4.90	2.15	28	2.90	4.60	2.25
3	2.55	4.70	2.45	16	2.90	4.95	2.50	29	2.50	4.70	2.20
4	3.00	4.80	2.60	17	1.05	5.00	2.10	30	2.60	5.05	2.00
5	3.10	4.95	2.15	18	2.40	4.90	2.20	31	2.85	4.90	2.25
6	3.00	4.90	2.40	19	2.80	4.90	2.40	32	2.25	4.55	2.20
7	3.30	5.10	2.55	20	2.80	4.70	2.30	33	2.90	4.85	2.40
8	2.50	5.00	2.30	21	2.20	4.70	2.25	34	2.80	5.00	2.40
9	3.00	5.00	2.05	22	2.60	4.70	2.05	35	2.10	4.75	2.45
10	2.90	4.90	2.30	23	2.40	4.70	1.80	36	2.75	5.00	2.45
11	3.10	4.80	2.15	24	2.35	4.80	1.85	37	3.30	4.85	2.30
12	2.80	5.20	2.20	25	2.30	4.80	2.05	38	2.30	4.65	2.20
13	2.75	4.50	2.15	26	2.35	4.80	2.00	39	2.25	4.90	2.20
平均											
2.67											
4.84											
2.23											

第1表 第1主体部出土白玉計測値一覧



第19圖 第1主体部北側出土白玉実測圖

## 第2章 遺物

白玉（図版第9、

挿図第19図）

第1号墳第1主体部の土壙中央付近の北側で発見された一群で151個が確認された。白玉としては小型であるが、いずれも丁寧なつくりで、腹に稜角を持ち、全て滑石質材による。平均高2.66mm、腹部径4.16mm、孔径2.26mmを測る。こまかく観察すると、この内14個はやや大形で石質もわずかに異なるようである。

土師器（図版第10

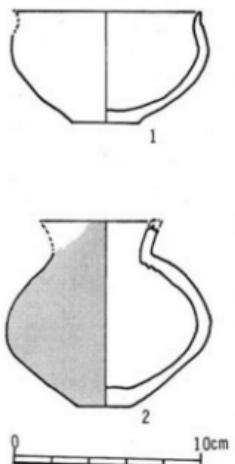
—1・2、挿図第20図）

2は第1号墳南側周溝底から発見されたもので、小形の壺形土器。口縁部を欠く、現存高9.1cm、胴部最大径12.1cm（底より4cmの高さ）、頸部外径5.4cm、同内径3.7cm、底部径3.6cmやや丸味を持

	厚さ	外径	孔径	厚さ	外径	孔径	厚さ	外径	孔径	厚さ	外径	孔径			
1	2.45	4.00	2.00	48	3.15	4.30	2.30	95	2.50	4.10	2.45	142	2.85	4.40	2.30
2	2.70	3.95	2.50	49	4.55	3.60	2.40	96	2.65	4.30	2.15	143	2.75	4.10	2.25
3	2.90	4.20	1.97	50	2.65	4.30	2.15	97	2.90	4.10	2.45	144	2.70	4.30	2.20
4	2.35	4.05	2.30	51	3.00	4.10	2.15	98	2.55	4.30	2.30	145	2.95	4.10	2.40
5	2.20	3.90	2.10	52	3.40	4.45	2.30	99	2.95	4.25	2.25	146	3.25	4.10	2.20
6	3.20	4.10	2.30	53	2.80	4.15	2.30	100	2.80	4.00	2.15	147	3.15	4.25	2.15
7	2.60	4.00	2.10	54	2.80	3.90	2.20	101	2.80	4.30	2.10	148	3.15	4.50	2.40
8	2.70	3.95	2.25	55	2.45	4.30	2.50	102	2.40	4.05	2.30	149	2.70	4.25	2.35
9	2.60	3.80	2.00	56	2.95	4.30	2.40	103	2.30	3.90	2.30	150	1.90	4.45	2.15
10	2.00	4.00	2.30	57	2.40	4.30	1.90	104	2.60	4.55	2.30	151	2.25	3.95	2.20
11	2.30	4.10	2.30	58	1.70	4.00	2.00	105	2.30	3.95	2.40				
12	2.20	4.05	2.45	59	3.00	4.15	2.40	106	2.85	4.50	2.55				
13	2.80	4.00	2.25	60	2.40	4.00	2.45	107	2.90	4.30	2.15				
14	2.20	4.00	2.25	61	2.60	4.00	2.05	108	2.15	4.25	2.45				
15	2.60	4.20	2.40	62	2.70	3.80	2.10	109	3.00	4.10	2.15				
16	2.80	4.30	2.30	63	2.80	4.20	2.15	110	2.75	4.20	2.30				
17	2.65	4.15	2.05	64	2.50	4.40	2.45	111	2.00	4.50	2.40				
18	2.50	4.25	2.20	65	2.45	3.90	2.35	112	2.50	4.20	2.30				
19	2.70	4.10	2.50	66	2.35	4.05	2.20	113	1.90	4.25	2.45				
20	2.50	4.20	2.30	67	2.80	4.20	2.30	114	2.45	4.50	2.40				
21	2.05	4.05	2.30	68	1.60	4.20	2.10	115	2.65	4.40	2.20				
22	2.50	4.00	2.30	69	3.00	4.70	2.10	116	3.00	4.05	2.30				
23	3.00	4.10	2.25	70	2.50	4.20	2.10	117	3.65	4.70	2.45				
24	3.30	4.05	2.30	71	2.45	4.30	2.10	118	2.50	4.30	2.10				
25	2.80	4.20	2.10	72	2.50	4.05	2.10	119	2.35	4.15	2.20				
26	3.30	4.10	2.55	73	2.30	4.20	2.40	120	2.65	3.95	2.30				
27	2.75	4.10	1.90	74	2.40	4.15	2.10	121	2.50	4.00	2.30				
28	2.50	4.10	2.15	75	2.75	3.90	2.35	122	2.30	4.10	2.40				
29	2.55	3.95	2.20	76	2.40	4.00	2.40	123	2.50	4.25	2.35				
30	3.00	4.10	2.15	77	3.50	4.50	2.40	124	1.90	4.30	2.40				
31	2.50	3.90	2.40	78	2.60	4.05	1.95	125	3.10	4.15	2.50				
32	3.15	4.20	2.30	79	1.90	4.00	2.40	126	3.40	4.30	2.45				
33	2.65	4.00	2.30	80	2.85	4.05	2.50	128	2.95	3.95	1.85				
34	3.45	4.60	2.30	81	2.70	4.15	2.20	128	2.50	4.15	2.20				
35	2.30	4.15	2.35	82	3.25	4.40	2.15	129	3.00	3.95	2.40				
36	2.65	4.30	2.30	83	2.70	4.10	2.30	130	2.10	4.15	2.40				
37	2.50	4.20	2.30	84	2.50	4.00	2.15	131	3.00	4.90	2.30				
38	2.65	3.95	2.10	85	3.10	4.80	2.50	132	2.30	4.10	2.00				
39	2.65	4.20	2.35	86	2.90	4.30	2.50	133	2.75	4.10	2.20				
40	2.70	4.10	2.85	87	2.50	4.15	2.20	134	2.40	4.00	2.45				
41	2.30	4.00	1.95	88	2.60	4.20	2.50	135	2.45	4.15	2.20				
42	3.05	4.05	2.10	89	2.50	4.00	2.20	136	2.50	4.00	2.50				
44	2.65	4.00	2.15	90	2.50	4.15	2.20	137	2.65	4.05	2.25				
45	2.75	4.15	2.30	91	2.10	4.50	2.20	138	3.15	4.15	2.25				
45	2.90	4.30	1.95	92	2.60	4.35	2.40	139	2.85	4.30	2.45				
46	2.70	4.20	2.30	93	3.95	4.75	2.30	140	2.50	4.25	2.20				
47	2.30	4.00	2.40	94	2.70	4.10	2.30	141	2.50	4.15	2.20				

平均 2.66 4.16 2.26

第2表 第1主体部北側出土臼玉計測値一覽



第20図 第1号墳出土土器実測図

つ平底、頸部までの高さ 8.4cm、くの字状にくびれた頸部、割り合いで稜の出た腹部、小さい平底の土器で、内部に至るまで丁寧につくられている。胎土は精製され、内外面ともになでられた口縁部及び、胴部中央まで塗朱されている。焼成もよくやや重い感じの土器である。

1は第1号墳頂部出土品で、壺、器高 6cm、復元口径 10cm、最大胴径 11cm（底より 3.7cm）、壺形土器の肩部に小さく立ちあがる口縁をつけたような形で、口縁部の立ちあがりは、外部では外反がみえるだけであるが、内面では約 6mm が横にナデ整形されて胴部とは別に扱かわれている。底部は平底で径約 3.6cm を測る。内外面とも丁寧にヘラ磨きされている。口縁付近は、口唇内側を除き斜めになでている。器外面上半に塗朱がみられるようでもあるが不詳。

## 第2節 第4号墳出土遺物

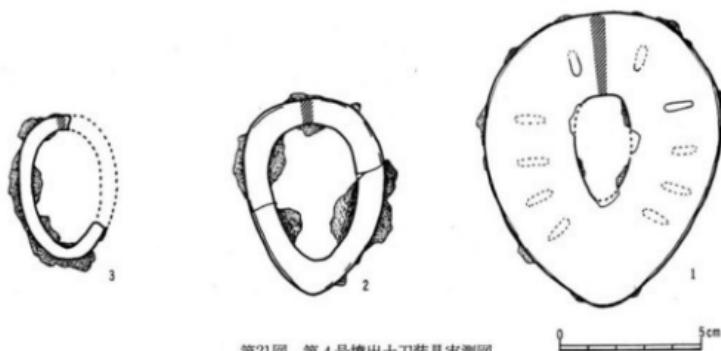
第4号墳は別記のように主体部が破壊されていたため副葬状態の明瞭な遺物は1点もない。主体部は小規模の横穴式石室とみられるが、このとり壊された部分より、前面の周溝にかけて散乱していた。石室の石材とともに直刀1口、鐸1、直刀金具2、銀先1、鐵、須恵器長頸瓶1が発見されている。

### 1 鉄 製 品

#### 直刀（図版第14、第32—11、挿図第24図、第21図）

第4号墳の南側櫻括された主体部の前面から発見されたもの、現存長 75cm 切先と柄の端を欠く、平造りの直刀で、平峰の厚さ約 7mm、刃幅 3.7cm、両闇で、ゆるい抉り、柄部は鐸の付近で幅 2.3cm、厚さ 7mm、徐々に幅狭になり厚さも 4mm 位になる。目釘孔は不明。

**鐸** 1 同所出土品、鉄製倒卵形の鐸（鍔）で、高さ 10cm、最大幅 8.5cm、厚さ 4.5mm、中央の孔  $3.8 \times 2.4$  cm。この周間に左右対照に長方形の窓があけられている。上部の 2 個はやや大きいようにもみえるが鋤のため不詳、割り合いで形のくずれていないもので、 $1.1 \text{cm} \times 0.4$  cm を測る。現状では左右 5 個づつあるが、この間隔でいくとあと 3 個ほど窓があるかもしれない。



第21図 第4号墳出土刀装具実測図

ない。4号墳の主体部は攘括されていたので残された直刀としては前記のものしかなく、あるいはこの直刀に着装されていたものかもしれない。

**金具 2** は同時に出土した倒卵形の環金具で、鉄製品。高さ  $7\text{cm} \times 5.2\text{cm}$  の外径、幅  $7\text{mm}$ 、厚さ  $4\text{mm}$  を測る。

**金具 3** はやや前者を小さくしたもので、やはり倒卵形の金具で外径高さ  $5.4\text{cm}$ 、幅  $4.8\text{cm}$ 、厚さ  $2.7\text{mm}$  を測る。鉄製。

### 鍔 先

第4号墳主体部付近の攪乱土中から出土したもので、図示しえない小破片がある。大形の鍔先と思われる。

### 鐵

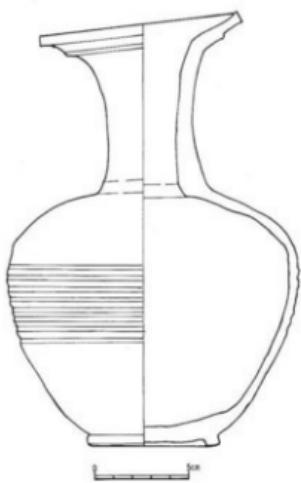
第4号墳主体部付近攪乱土中出土品で、断面やや長四角の鉄製品破片、数本分あるが、いずれも小破片、鐵の柄と思われる。

## 2 須 恵 器

今回の調査により検出した須恵器は4点あり、1点は古墳から、他の3点は表探によるものである。それぞれについて説明を加える。

### 台付長頸瓶（図版第10の3、挿図第22図）

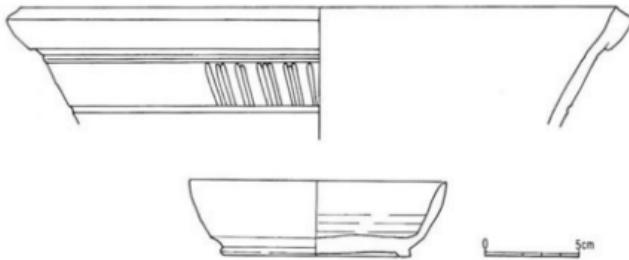
第4号墳（方墳）から出土した。口縁部が異常に発達した器形で、口径  $10\text{cm}$ 、底径  $7.1\text{cm}$ 、器高  $22.3\text{cm}$ 、胴部最大径  $15.5\text{cm}$  を計る。胴部の一部を欠損している。頸部は全体に傾斜しており、特に口縁部が歪曲しているために左右で高さが  $1.2\text{cm}$  程違う。器形の特徴について述べると次のようになる。



第22図 第4号墳出土須恵器実測図  
肩部から頸部へは曲線をもって移行し、途中から外反する。口縁部は2段構成をなし、端部は外側へ斜目に折り返して終る。この2段構成は、口径を異常に大きくする効果をもたらしている。肩部から胴部へはなだらかに移行しており、胴部には幾条もの回線が走る。底部は丸く作り、これをヘラで起して平底となしている。高台は断面梯形をなし、その取付は丁寧である。肩部から胴部にかけてはろくろ整形を行ない、底部のみヘラで整形している。口頭部もろくろ整形が行なわれているが、凹凸がみられる。肩部と頸部の取り付けは粗雑で、一般的には肩から直線的に頸部に移行するのに対し、本例では一旦内彎してから延びている。これはヘラで切った取付部の径と、頸部の径がくい違つたために起きた現象であろう。胎土はよく、焼成も良好で、灰色を呈する。自然釉は肩部全面にかかるており、一部分緑色を呈するが、殆んどが温度上昇により、沸騰して剥落気味である。しかも、火表の部分には小縫あるいは窓壁の剥落した小片が付着してザラザラである。こうした須恵器に遭遇するとやはり副葬を目的としたものと、日常に用いるものとが、自ら入手過程で選択されたのではないかと考えさせられるのである。

#### 杯（挿図第23図下）

3分の1程を欠失している。口径 13.7cm、底径 9.1cm、高さ 4cm を計る。腰に張りがなく、体部は高台から稜を隔てて直線的に口縁部に至っており、端部は丸くおさめている。体部の中程は若干肥厚して厚く 5mm 程ある。底面はヘラ起しにより、同心円が著しく、高台は幅



第23図 第4号墳周辺出土須恵器実測図

広で安定し、台形をなす。高台の下側は中程に浅い凹帯がある。全体にろくろ整形を施し、ミコ部分は渦巻文が鮮やかである。これによるとロクロの回転は時計とは逆まわりであることわかる。焼成良好で、灰色を呈するが、所々に火袋と黒いシミがある。なお、底部は断面でみると若干の凹凸があり、底面は平底ではあっても直線的ではなく、中程が下がっているため、高台の接地面より1mm程高いにすぎない。

#### 甕（挿図第23図上）

口縁の一部ではあるが、灰黒色を呈する焼成良好な破片である。推定口径32cmあり、端部は折り返して重ねるいわゆる折り縁をなしている。折り縁の下端に凹帯が1本走り、2.3cm程の中で斜目に粗い櫛状工具による装飾を施している。

なお、以上その他に長頸瓶の肩部から胴部にかけての一部が残存している。焼成良好で自然釉がかかっており、先述のものより胴部径は一とまわり大きい。

以上が今回出土の須恵器である。次にこれら須恵器の編年的位置ならびに気付いた点を述べてみたい。

台付長頸瓶は、6世紀後半に出現した台付直口瓶に祖型をもつものである。台付直口瓶は、頸部が直線的に延びわずかに外反するもので、口縁部は何の装飾もない。胴部には簡単な装飾を施し、台は透しのつく高いものである。7世紀の末葉になると高台が、他の杯などにみられるそれと同一になり、底部も丸底から平底へと移っていく。ただ、口縁部が2段構成をとり大きく外反するのは、関東地方特有のようである。多くは7世紀後半から8世紀前半にかけて築造された古墳の副葬品として出土している。最近の出土例では、市原市西国古横穴群<sup>①</sup>から2例、市原市上総国分寺台の古墳群<sup>②</sup>から1例出土している。編年的には肩部と胴部の境に稜のつくものが古く、丸くなったものが新しいとみて大過ない。稜をもつ類例は陶邑古窯址群<sup>③</sup>MT-21にあり、その実年代は7世紀後半があてられている。東海地方では、7世紀末葉愛知県岩塚古墳<sup>④</sup>に類例を見出すことができる。長頸瓶が整った形をみせるのは、猿投窯鳴海32号窯<sup>⑤</sup>からであり、本例も含めて稜をもたない類は8世紀前半に実年代をおくのが妥当であると考える。

次に杯はどうであろうか、この器形もやはり7世紀後半に台付杯として出現する。古い器形の特徴は腰の張りが殆んどなく、高台から殆んど直線的に立ち上る傾向をもっている。さらに、これとセットをなす蓋のかえりが消滅する時期もある。

最後に甕について触れておく。口縁部を折り返し丸くおさめる傾向は早くから認められるが、これが完全に折り縁となるのは7世紀後半代、陶邑古窯址群でみるとMT-21期に該当する。MT-21期の甕の頸部の特徴ならびに折り縁の形状は本例に酷似しており、杯も含めてこの時

期の所産と考えられる。したがって、今回出土の器種の前後関係は台付長頸瓶が杯・甕より1時期あとにくると考えられる。ただし、杯と甕の関東地方における実年代を7世紀後半とすることには、その地域性を考慮すると多少問題があろう。7世紀末葉ないしは8世紀初とするのが穏当と考える。このようにみてくると台付長頸瓶の実年代とそれ程大きな開きを考える必要はなく、ともに8世紀前半という実年代を与えておきたい。

#### 註

- (1) 西国吉横穴群発掘調査団「千葉県市原市西国吉横穴群」1972年。
- (2) 須田勉氏の御教示による。
- (3) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」(平安学園創立九十周年記念論集)1966年。
- (4) 楢崎彰一「一宮市史、資料編三」(浅井古墳群)1963年。
- (5) 楢崎彰一「猿投窯」陶器全集31 1966年。

### 第3節 第5号墳出土遺物

第5号墳出土の遺物は、後円部墳頂に発見された主体部土壙中から出土した鉄製品と玉類、墳丘中出土の埴輪列、さらに周溝内に転落した埴輪、これに混じて少數の土師器、須恵器片が後円部北側から発見されている。

主体部の土壙は、盛土中に素掘りにされたもので、形態の不明な面もあるが、直刀5口が一括して中央部のやや南側によって出土し、これに接し鐵錐一括があり、中央部から勾玉1点、東端近くから、直刀柄頭にかけてガラス玉が散乱していた。また中央部西よりに鉄塊一個があり、後にこれが、鎖状をなす鉄製品で、鎧ではないかとみられている。

#### 1 鉄 製 品

##### 直刀 (図版第32-6~10, 摂図第24図1~5)

大小5口あり、いずれも平棟平造りである。最も短いNo.3は折損しているが、あとはいずれも目釘孔が2本ある。闊はほとんど両闊であるが、背はゆるやかに削られており、No.3などは片闊のようである。No.1は全長93.5cm、刃幅3.5cm、峰0.7cm、刃長81.5cm、切先から80cmの部分より柄にかけて木質が別となり、この部分に倒卵形の鐔が着装されていた。No.2は推定全長64cm、柄部長約12cm、刃幅3.2cm、峰幅約0.8cm。No.3は全長51.3cm、柄部長10.7cm、刃幅3.5cm、峰幅0.9cmこの鐔に有窓倒卵形の破片がみられる。No.4は現存長77cm、刃幅3.2cm、峰幅0.8cm、切先の部分はNo.5に付着している。No.5は全長98cm、刃幅3.6cm、峰幅0.8cm、柄長14.5cm、柄中央部で幅2cm、厚さ0.7cm、鍔の部分は木質が厚く、長さ約5cmが別製になっている。



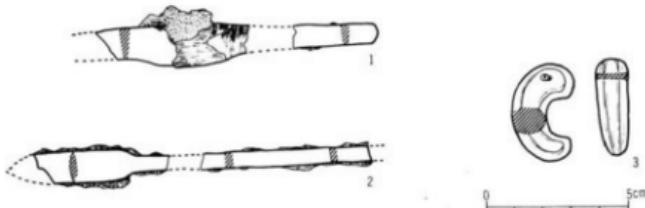
第24図 第4・5号墳出土直刀実測図  
1~5第5号墳、6第4号墳、7は1に着装されていた

### 刀子（図版第32—2, 挿図第25図1）

第5号墳主体部出土、刃先を欠いている。現存長8.2cm, 柄は途中で折れているが、約3.7cm, 幅、厚さとも徐々に減じ、端部で6.5mm×1.4mm, この部分に丹かと思われる赤色顔料の付着がみられる。刀幅は闇の部分で14.8mm, 峰幅3.8mm, 両闇、柄の木質の付着がみられる。

### 鎌（図版第32—1, 挿図第25図2）

第5号墳主体部直刀群の切先付近に一括して出土したもの、柄部は断面やや長方形でかなり長い。竹籠までの距離は不明、鎌先はわずか1点の例であるが、両闇、両刃の剣身状に細長いものである。折損のため長さ不明、幅約8mm、厚さ中央部で1.7mm、全体の数量も不明。



第25図 第5号墳出土遺物実測図 1. 刀子, 2. 鎌, 3. 勾玉

### 鎌（挿図第24図7）

第5号墳主体部出土の直刀群に付属したもので、二種ある。1はNo.1の直刀に付属し倒卵形、無文の平板で高さ7cm、短径約6.6cm、幅1.7cm、厚さ2mm、3分の1を欠き、一部に布の付着がみえる。

2はNo.3の直刀に付属していたと思われる破片で、長方形の窓がある。幅19mm、厚さ4mm弱で、倒卵形をしていたと思われる。窓の孔は1cm×6mmほど。

### 鎖

第5号墳主体部の中央西よりに、他のものと離れて鉄さびの塊があり、整理後、これが鉄製の鎖であることがわかり、推定復原を試みながら挿図を作成した。主となるのは、直径約7mmの鉄丸棒をまげて鎖状にしたもので、3連として、その一方に釦具をつけ、他方に鎖上部の鉄板状金具が一部残存している。鎖の細部についても銹化の甚しいことから明瞭でない点もあるが、鉄板は幅12mm、厚さ2mmで鎖との接続部ではやや幅が狭くなり、厚さを増している。この部分は丸味をもっているが一方は失なわれている。環状の頭端部から約4cmの部分とこれから3.5cmほどのところに釘孔がある。この釘孔から1cmほどが残り、その先は現存しない。鎖は1連の大きさが6.5cm前後で兵庫鎖となり、いずれもほぼ同大である。3連目のもの

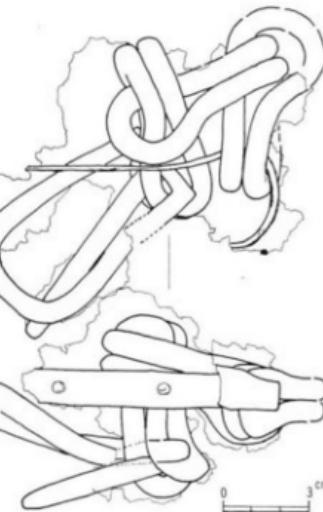
には鎖輪を受ける鉗具であると思われる鉗具がかんでいる。鉗具は現在やや変形されているが長7.5cm、端部外径4.5cm、基部外径3.5cm、刺金は同様の太さの鉄棒を長さ約9cm、一方をやや薄くして基部直線部分に巻きつけるようにしている。これと対となる破片が一部あり、鉗具の部分と鎖3連がようやく発見されるものであるが、図示しなかった。これらは1対の木心鉄張壺蓋の部分ではないかと思われる。なお、轡などの破片はみられなかった。馬具としては唯一の遺物である。

#### 勾玉（図版第32—3、挿図第25図3）

第5号墳主体部中央付近出土。赤瑪瑙製、高さ34.2mm、幅21.35mm、厚さ10.7mm、腹中央部12.0×10.0mm。一方穿孔、孔径2.4mm、やや「コ」の字形の勾玉である。穿孔は管錐によるもので、穿孔開始直後に位置をずらせたのか、孔の脇に凹みがある。この外径約1.6



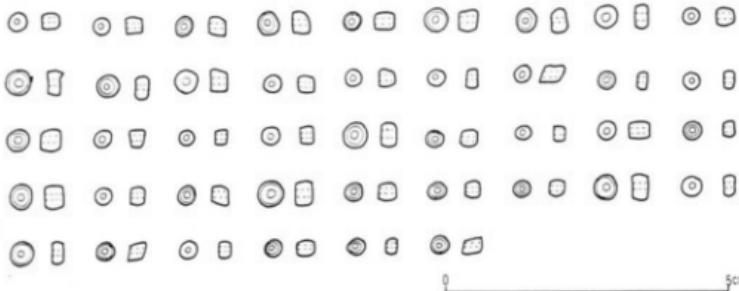
第26図 第5号墳出土ガラス丸玉実測図



#### 丸玉（図版第32—4、挿図第26図）

第5号墳主体部の端付近から出土した1

群で、現在9個ほどある。全てコバルトブルーのガラス玉、上下面平端で、形は整っ



第27図 第5号墳出土ガラス小玉実測図

ている。多少小さめのものもある。最大で高さ 6mm × 径 9.45mm, 孔径 2.1mm。丸玉としては全体的に小形である。

	厚さ	外径	孔径		厚さ	外径	孔径		厚さ	外径	孔径
1	3.50	4.50	1.40	1	2.90	3.60	1.40	15	2.10	3.85	1.20
2	3.10	4.50	1.30	2	3.05	3.20	1.15	16	3.90	3.10	1.30
3	3.00	4.70	2.00	3	3.15	3.15	1.25	17	2.70	3.50	1.25
4	3.00	4.60	2.00	4	2.00	2.90	1.15	18	3.20	3.95	1.40
5	3.20	4.10	1.20	5	3.70	3.30	1.30	19	3.60	4.00	1.70
6	3.10	4.20	1.30	6	3.20	4.20	1.30	20	2.60	3.20	1.25
7	3.20	4.30	1.45	7	1.80	3.20	1.35	21	2.20	2.75	1.35
8	2.90	3.70	1.30	8	2.40	4.00	1.75	22	2.45	3.20	1.30
9	2.20	2.80	1.10	9	3.20	3.00	1.40	23	2.90	4.30	1.70
平均			10	2.30	4.50	1.70	24	3.20	3.20	1.10	38
			11	2.10	3.40	1.25	25	1.95	3.00	1.10	39
			12	3.10	4.00	1.70	26	3.70	3.30	1.30	40
			13	3.00	3.30	1.50	27	2.20	3.30	1.45	41
			14	3.10	2.95	1.20	28	3.40	4.10	1.30	42
									平均		
									2.23	2.74	1.08

第3表 第5号墳出土ガラス玉計測値一覧

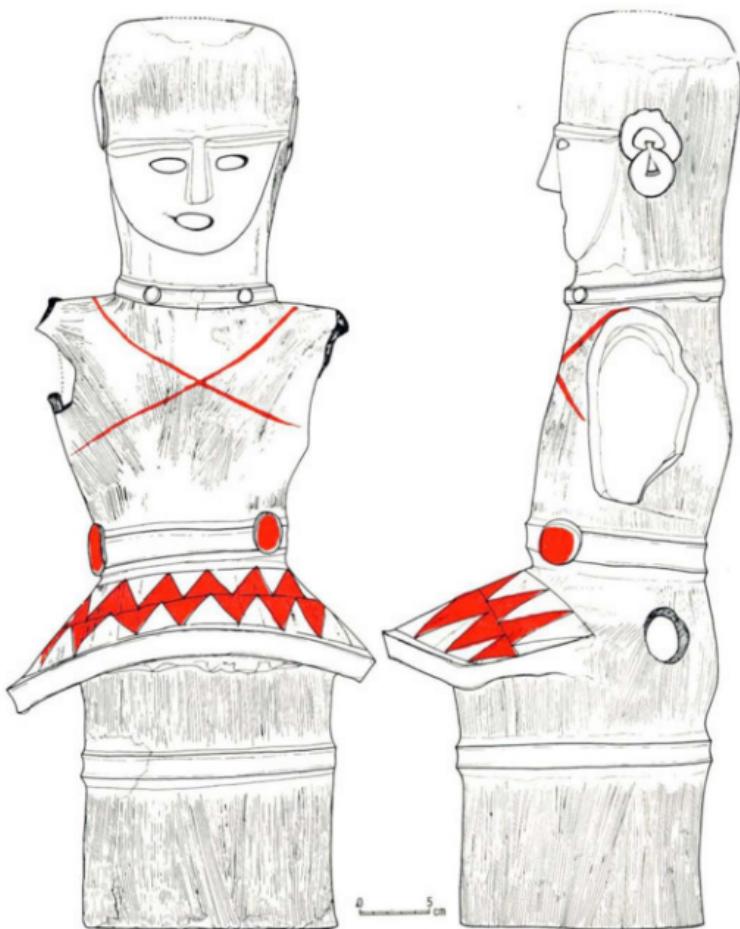
### 小玉（図版第35—5、挿図第27図）

丸玉より小形のものであるが、同一地点から出土した。採集し得たのは42個であるが、多少紛失があったかもしれない。平たいもの、細長いものがあり、形の整わないものもある。通常のコバルトブルー、やや濃んだ青味の強いコバルトブルー、やや青味のあるスカイブルーがある。最小のもので高さ 2mm、径 3mm、孔径 0.9mm。

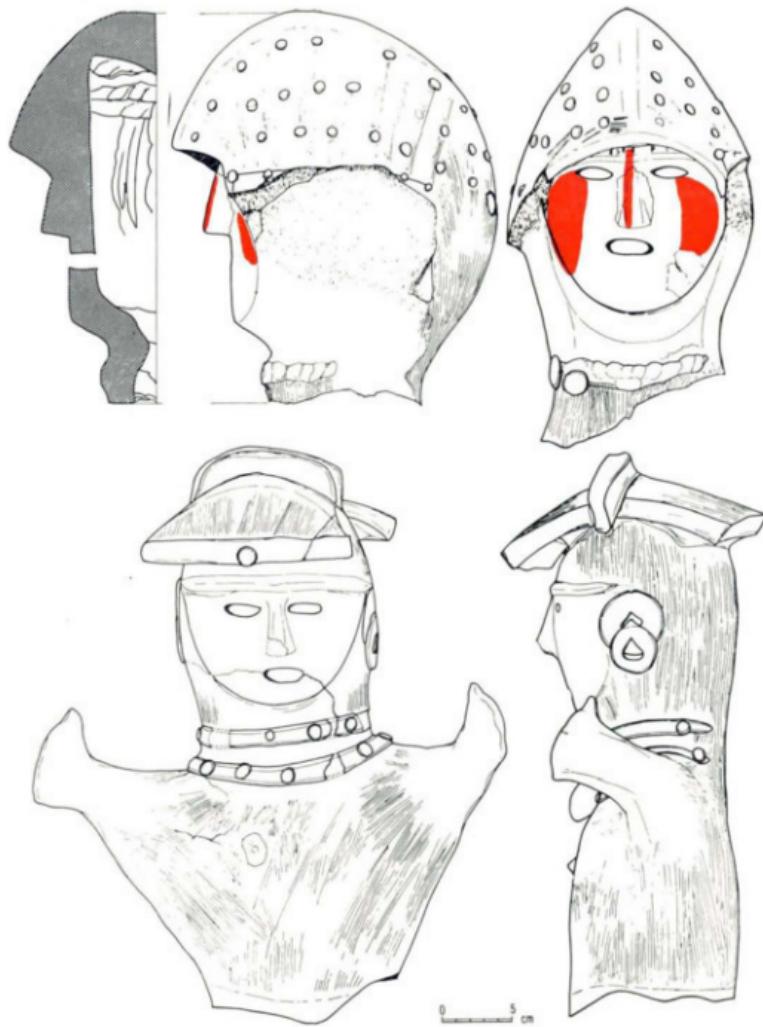
## 3 墳 輪

No. 7 (図版第41) 人物埴輪の台の部分である事は先づ間違いないが、腰から上の部分を失っているので、性別その他精しい事は不明である。正面には袴又は裳の表現があったと見られるが先端部が失われている。この部分は、あとから円筒部分に張り付けたと見られ、下部に指先で押付けた痕が明瞭に残っている。最もこの表現は正面だけで、背側は凸帯になっている。台部又は足部と見られる円筒の裏面には、径 4cm 程の円孔が一個あけられている。残高 33.5 cm、底径 15.5cm、色調黄褐色。

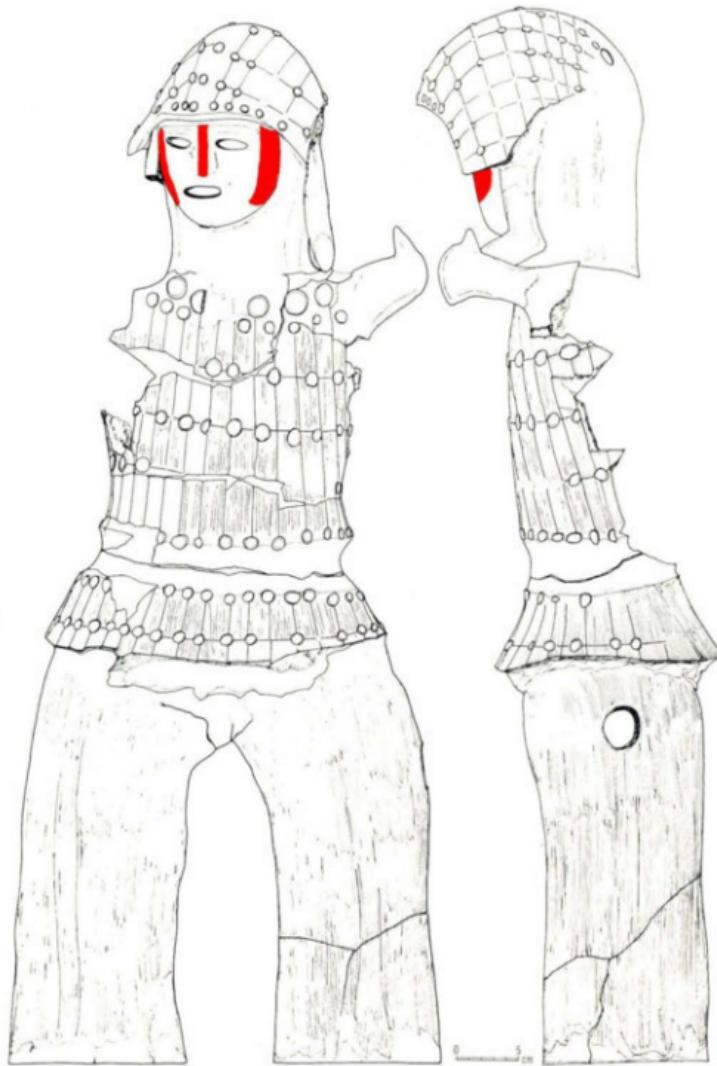
No. 68 No. 70 と同形の武人と見られるが、腰から上を失っている。帯から下の桂甲は二段に表現されており、小札は上下段とも16枚と見られる。総は小円板で表現され、最上段17個が1個も失われずに残っている。二段三段は一部が失われているが、総の表現は正確であるので



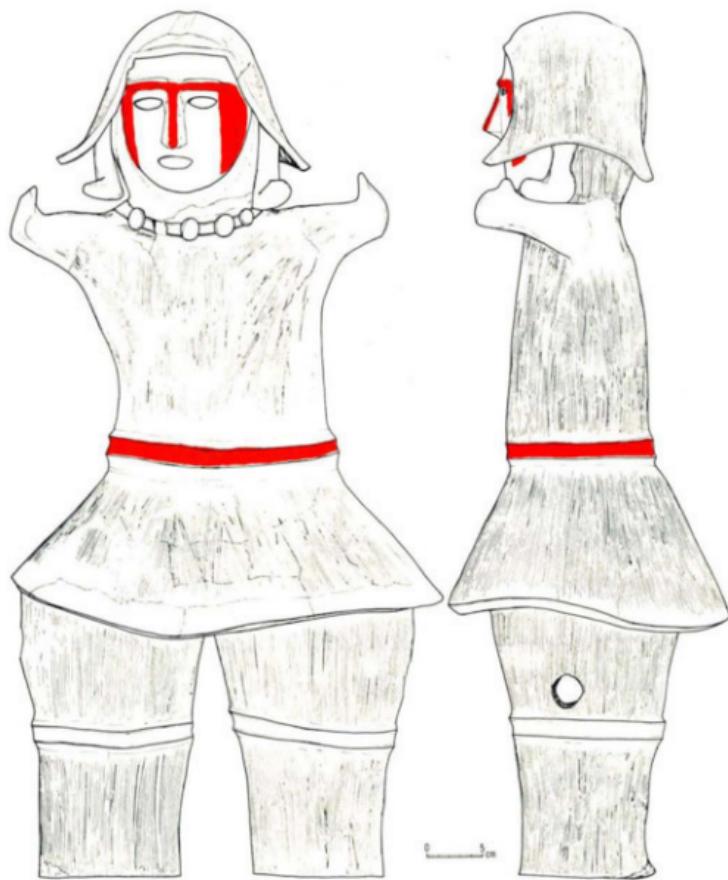
第28図 第5号墳出土人物埴輪実測図 1…No. 58



第29图 第5号填出土人物首輪実測図 2…上 No. 40, 下 No. 59



第30圖 第5号墳出土人物埴輪実測図3 …No. 70



第31図 第5号墳出土人物埴輪実測図4…No.56

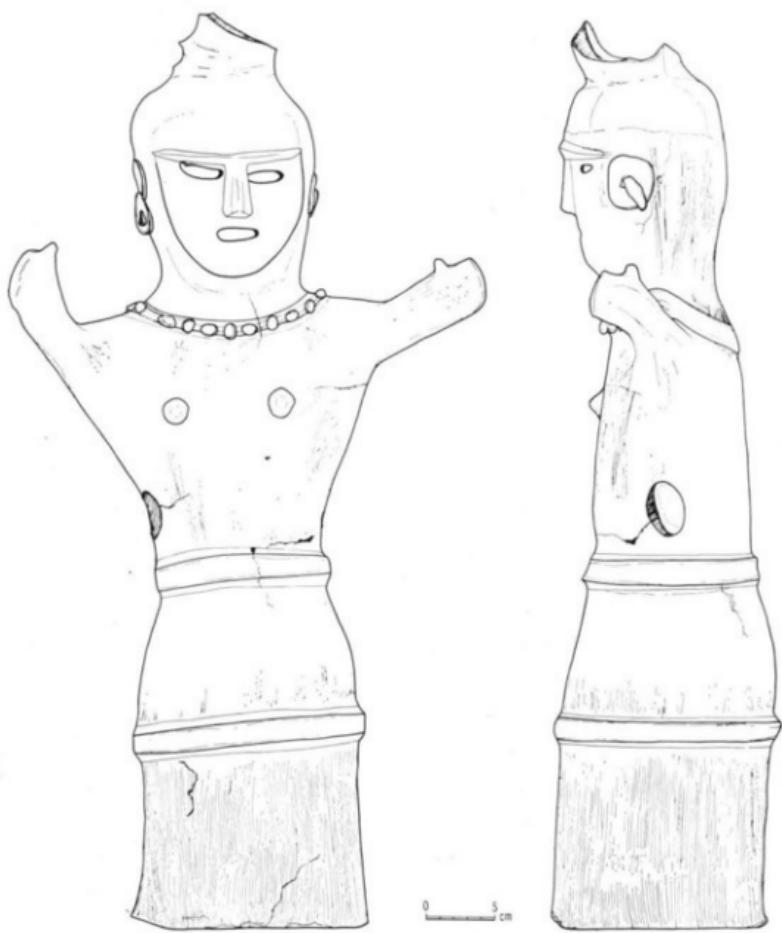
恐らく最上段と同じであったと見られる。背面の表現は省略されている。脚部に凸帯ではなく両脚中央外側に円孔があけられている。色調赤褐色、残高43cm。（極めて軟弱のため採り上げ中に破損し、図に示せなかった。）

**No. 67**（図版第40）武人、恐らく桂甲をつけた武人であると思うが、上体が失われているので正確にはわからない。ただ他の桂甲の武人と較べると小札が一段である事、及び脚の表現が他の武人と異り、台部を持っている点などが違っている。小札は15枚を数える。小札の縫の表現は小円形の平板を貼ったものである。その表現はかなり正確で、沈線で画かれた丁字の上に正確に貼り付けられている。数は上段9痕7、下段14痕2である。この近くに手甲を付けた左手が発見され、本像のものと思われるが、接続はない。残高33.5cm、色調茶褐色。

**No. 69**（図版第40）No. 70と同形の武人の埴輪の腰から下の部分である。焼成不良で極めて軟弱である。小札は16枚迄数えられるが、あとは失われている。従ってこれで終りなのか、更に続いていたのか不明である。縫の表現の小円板は正確でNo. 68と極めて類似している。色調赤褐色、残高38.5cm。

**No. 70**（図版第38・46、挿図第30図）武人衝角付冑をかぶり、桂甲をつけた男子の立像である。冑は堅刃の鉢留であるが胸巻の表現は見られない。左右共に5段に表わされ一段8枚に表現されている。鉢留の縫は上より一段目右4痕4、左5痕2、二段目右5痕3、左6痕2、三段目右4痕4、左6痕1、四段目右3痕3、左3以下失われているので不明、中央は7痕2である。衝角底部には覆輪がほどこされ、その縫は向って右3中央1、左2である。頸飾りの着装が認められ、大玉の数は5個数えられる。桂甲の小札は四段で各段とも17小札を数えたと見られる。但し上二段は一部が失われているので正確にはわからない。縫の表現は（冑の鉢留と同じように小円板で表わされているが革縫であろう）その表現はかなり難であり、必ずしも小札と合っていない。こころみに縫を数えて見ると、上より一段目7、痕1、二段目6痕1、三段目8痕1、四段目4痕4、五段目11痕0となる。併しその数は正確ではなく、特に二段目以下は失われた部分もあるので明確さを欠く。顔には挿図第30図の如き朱の表現がある。左の美津良は残っているが右はその先端が失われている。右手は失われている。腰に大刀を帯びていたと見られる痕が残っているが、大刀は失われている。帯から下の小札は二段に表現されていたものと思うが、裾の部分が失われている。小札の数は胸部と異り23枚を数える。縫の革の表現は上段18、痕1、下段18、痕1である。円筒状の二本の脚が上体をささえるが、台部はない。背面は胸から腰にかけて失われているが、正面程細かい表現ではなく、全体に省略技法がとられている。後頭部及び足に2個処円孔が見られる。右足中央部より下は臥色をしている。脚部にNo. 56のような凸帯はない。総高83cm、色調黄褐色。（カラーロゴ参照）

**No. 56**（図版第36・46、挿図第31図）鉢巻をする男子、幅1cm程の鉢巻をしめる男子の立



第32図 第5号墳出土人物埴輪実測図5…No. 17

像である。髪は中央部で左右に振りわけているが、残りを美津良に結っている。頭飾りをつけるが玉は大玉である。4個が遺存し、他に失われた痕が一個認められる。顔には塗朱された痕が残っているが、その個所は図の通りである。両手は前方に突き出しているがやや左右に開き気味である。凸帯に依る腰紐の表現があり朱が施されている。末広がりに表現された上衣の裾に二本の円筒状の脚が付けられているが、脚の中程に一条の凸帯がある。脚部両外側凸帯上部中央に凹孔各一個があけられている。総高は 76.5cm、色調橙褐色。

**No. 17** (国版第35、挿図第32図) 頭に壺をのせる女子。両耳は中央に小孔を有する円板を貼りつけて表わし、その小孔から宝珠形の粘土紐をつりさげたように貼りつけ、耳飾りを表現している（耳環であろうか）。右は完全な形で残っているが、左はその殆んどを欠き、剝離の痕だけが残っている。両手は前方に開き気味に作られている。頭飾りを着けており、11の小玉が残り、更に失われた痕が2個認められる。胸には乳の表現があり、腰には帯をしめる。台部にも凸帯が一本まわっている。両脇に径 3.5cm 程の円孔が認められる。残高 66.5cm、色調黄褐色。

**No. 64+No. 58** (口絵カラー図版、国版第34・46、挿図第28図) 女子椅像、髪は失われている。両耳はドウナツ状の円形であらわし、その上からやや下にずらして宝珠形に上が三角にとがったドウナツ状の円形板を貼りつけ耳飾りを表わす。右の耳飾りはつけ根の部分を残し失われているが、左の耳飾りはほぼ完全な形で残っている。顔面には塗朱が認められるがその場所は挿図第28図に示す通りである。首には頭飾りを掛けていると見られ、大玉が2個残っている。胸にはタスキを現わすと見られる朱がX状に塗られて、朱の色がかすかに残っている。両手は失われている。腰の正面部分には二段の鋸歯文を施した前掛状のスカートと見られる表現があり、その山形の方向は鋭角が上と下に向く形に沈線が画かれ、朱が塗られている。山形は上下共7個である。この山形の上部に腰紐の表現があるが、この腰紐の左右の両脇には円形の飾りが貼りつけられている。腰部左右及び頭頂部には 3.5cm 程の円孔が開けられている。台部と見られる円筒の中央よりやや上に一条の凸帯がつけられている。正確にいうと本像は立像なのか座像なのか、又は椅像なのか不明であるが、一応椅像としておく。その推考の理由については後に述べる。総高 65cm、色調赤褐色。

**No. 59** (国版第33、挿図第29図下) 二重の頭飾りをつける女子、下半身を欠く女子像である。二連の頭飾りの内、下の段の両端の玉各2点と各玉をつづる紐には朱が塗られている。玉は中玉である。上段5個、下段7個が現存し、失われた痕は、上段2、下段1である。なお髪の表現に使われた沈線は約 2.5cm 幅の工具を用いてつけられた事が明瞭に認められる。耳飾りは、No. 58+No. 64 と同じく中央に小孔を有する円板を貼りつけて耳を形作り、その上にやや上方の尖ったドーナツ状の円形を貼りつけて耳飾（耳環か）を表現しており、その手法は全

く No. 58+No. 64 と同様である。髪には堅櫛をさす。両手は前方にやや広げている。胸には乳の表現があるが、左乳は失われている。腰から下を欠き、残高は 40cm、色調橙褐色。

No. 48 (図版第41上) 女子 腰から下の部分、最初円筒かと見られたが、No. 64+No. 58 と同形と見られる女子の椅像と判明した。但し腰から上は失われている。前掛様のスカートの表現は No. 58 と全く同形であるが、鋸歯文ではなく堅に沈線が施されているだけである。腰の左右に 5.5cm を計る大形の円孔がある。台部中央に凸帯がめぐっている。残高は 33cm、胴径約 13cm、台底部の長径 20.5cm、短径 18cm。色調赤褐色。

No. 42 女子の肩の部と見られるが、正確にはどちらを正面と見て良いのか不明である。頭には小玉の表現が見られるが、それ以上の事は全くわからない。

No. 40 (図版第39、挿図第29図上) 衝角付冑をつけた大形の武人の首である。冑は三段の横板別鉢留に表現されているように思う。鉢留の鉢は正面に向って上より 1 段目右 10, 左 10, 2 段目右 10, 左 10, 3 段目右 8, 左 8, 4 段右 6 痕 1, 左 4 (以下を欠く) である。両側には鏡の表現があったと見られ、左側に小札 6 枚を堅矧にした痕が残っている。冑の背面の表現は省略されている。顔面には塗朱された痕が残っているが、その表現は図に示す通りである。頸元には首飾りを着装していたと見られ、正面に 2 点背面に 1 点の大玉が残っている。後頭部には径 2cm 程の円孔が見られる。残高 29cm、色調黄褐色。

No. 22 (図版第37) 男子の首、髪を中央から左右にわけたやや小形の男子の頭部である。頭には小玉を着装していたものと見られるが、失われていて定かでない。後頭部に径 3cm を計る円孔があけられている。顔には塗朱のあとが僅かに残っている。出土した時は既に數片の破片に別れていたが、接合の結果写真のように復原に成功した。只し肩部以下は失われており、顔の部分も鼻を欠き、口辺の下部もその一部が剥離している。色調赤褐色。

No. 28 (図版第38左) 衝角付冑をつけた武人の首であるが、残念な事に顔の部分が失われている。鏡が頬当のようになっていて背面にその表現がない製作技法などは、全く No. 40 と類似している。後頭部に径 2.5cm の円孔が一個あけられている点も共通である。色調黄褐色。

No. 30 人物頭部、髪を左右に分けた恐らく男子の頭部であると見られるが、髪の毛より下は失われているのでなんとも言えない。

No. 34 (図版第43上) 馬の首部、喰、鏡板、雲珠、辻金具等をつけた飾り馬であるが、首以下の胴部を欠く。鏡板は円環状をなし、喰を通す部分は十字に表現されている。髪の先端部は失われている。口は円筒を切った様に表現されている。残長 43cm、色調黄褐色。

No. 39 (図版第43—3) 馬の首、眼より上を失っているが、その製作手法は No. 34 と同じである。口径縦 10cm、横 6.5cm、色調黄褐色。

**No. 38** (図版第43—2) 馬の首、左眼附近 1/3 を失った馬の首である。右顎の部分に雲珠の表現が見られるが、その足は 6 本である。全体的には No. 39, No. 34 と同手法であるが、鏡板はやや小さい円環状に作られ、喰から導かれて手網に至る革紐は、二本に表現されている。口径縦 10cm、横 8.5cm、色調黄褐色。

**No. 31** (図版第43—4) 馬の首、No. 38 と同じ表現を持つ馬の首である。口径縦 10cm、横 8cm、色調黄褐色。

**No. 33の2** (図版第44) 鶴の首、No. 33 の水鳥の首の下より出土した。鶴冠の表現から見るところ鶴ではないかと思われる鶴の首の部分であり、胴以下は失われている。左側から見られる事を意識したと見られ、嘴や眼の表現は左側に比して右側はかなり雑である。残高 8cm、色調黄色。

**No. 33** (図版第44) 水鳥の首、鶴ほど極端ではないが、どちらかと言へば左側から見られる事を意識して作られたと見られる。近くに胴の下半部があり、(No. 32) 色調その他の面から見て同一個体と見られるがどうも接合しない。ただ脚は前後共殿塚の犬のように 2 本を 1 本にまとめて表現している事だけは分っている。両角の間は 12cm である。色調赤褐色。

**No. 10** (図版第40) 鹿の埴輪、前方部北角より出土した小形の鹿の埴輪であるが、明瞭に三段の角を有するものである。胴の一部や 2 本の脚も近くから出土しており、色調その他の面から見て同一個体と見られるがどうも接合しない。ただ脚は前後共殿塚の犬のように 2 本を 1 本にまとめて表現している事だけは分っている。両角の間は 12cm である。色調橙褐色。

**No. 24** 小形の顔の一部であるが、ごく限られた部分しか残っていないので、性別その他を判断する事は出来ない。

**A—2—2** 周溝内に転落している多数の埴輪片を整理したところ、A—2—2 区割（括れ部外堤近く）内の 4 片の破片を接合して顔の一部を復原する事に成功した。但し完形には程遠いものである。良く見ると塗朱の痕が僅かに認められる。

### 注

記述は No. 7～No. 17 迄一応埴輪配列の順に従って行い、配列不明の分は女子、男子、動物の順で記し、最後に出土地点不明確なものを入れた。埴輪の番号が如何にも不謬で奇異の感を持たれるとと思うが、これは発掘時の出土順にその番号を付けていった為である。整理の段階で番号を統一すべきであったが、混乱を恐れそのまま使用する事にしたので了承賜わり度い。尚埴輪の表も、調査時にメモしたものをそのまま用いたので、名称その他に就いて事実記載の項と多少相異がある様に見える。これは整理の段階で形状が明瞭に把握されたものも数点あった為である。同様に No. 56 のように完とあるのは、最初顔が出土し、その後の整理復原で完形に復原出来た事を示す。

### 第三章 考 察

#### 第1節 小川台5号墳の埴輪について

下海上の国に於て形象埴輪列を持つ古墳として知られるものに城山一号墳がある<sup>①</sup>。調査報告によれば、その埴輪列の順序は先頭が武装男子、次に2頭の馬、武装男子数体（大、中、小と大きさが異なる）女子数体（大きさは中、小とがある）男子数体（形は種々である）最後に家型埴輪となっていたという。群馬大学の尾崎教授が調査された佐原市大戸の片野古墳群の中にも、形象埴輪が囲繞していた古墳が存在するが、未だ報告書が公にされていないのでその配列を知る事は出来ない<sup>②</sup>。次に武射の国古墳について見ると、学術調査に依って形象埴輪列の確認された古墳は下記の通りである。

1. 朝日の岡古墳	調査者	軽 部	慈 恩 <sup>③</sup>	
2. 西の台古墳	"	軽 部	慈 恩 <sup>④</sup>	
3. 殿塚古墳	"	滝 口	宏	31年 <sup>⑤</sup>
4. 姫塚古墳	"	滝 口	宏	31年 <sup>⑥</sup>
5. 塙谷一号墳	"	川 戸	彰	31年 <sup>⑦</sup>
6. 宝馬にわとり塙古墳	"	玉 口	時 雄	32年 <sup>⑧</sup>
7. 高田木戸前一号墳	"	坂 井	利 明	40年 <sup>⑨</sup>
8. 経僧塚古墳 円墳	"	市 毛	勲	43年～45年 <sup>⑩</sup>
9. 殿部田一号墳	"	浜 名	徳 永	47年～48年 <sup>⑪</sup>

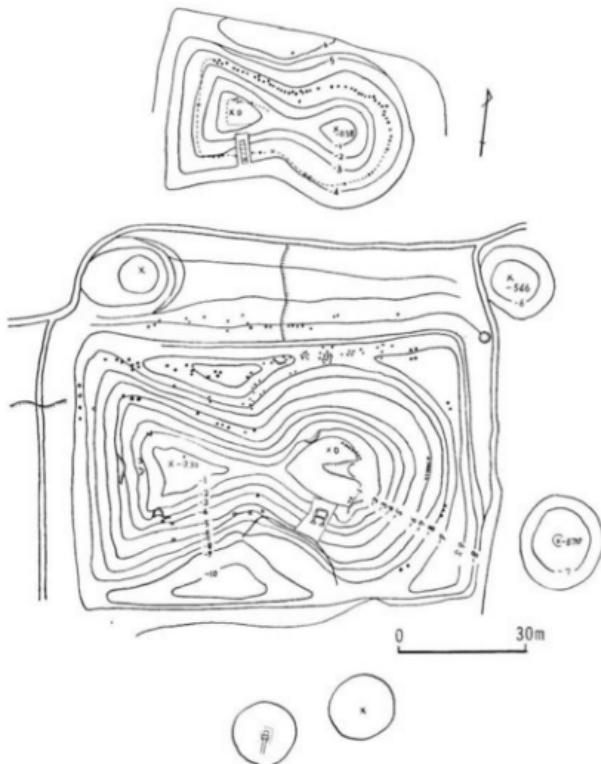
これらの古墳は、経僧塚を除くと總て前方後円墳であり、武射の国古墳群の中でも、それぞれの支群の主墳と目されるものであるという事が出来る。残念な事に以上の古墳總てに調査報告書が刊行されている訳ではなく、概報だけのものや、未報告のものもあって、充分な資料を持っている訳ではないが、今日迄に知り得た資料に依り、先づ各墳の概要を示せば左の通りである。

1. 朝日の岡古墳は松尾町大字蕉木に所在する前方後円墳であり、前方部は南西を指向する。二段築成の墳丘は長軸79m、後円部高さ8.6mを計る。墳丘には3列の埴輪列が樹てられていた。第1列は周溝面に沿った基壇埴籠部にあり、前方部正面の一辺には円筒と形象の両種の埴輪が交互に樹てられていたらしい。形象埴輪は鶴、水鳥、人物などである。この列は後円部に於ては全く円筒のみの配列であったと見られている。（但し東寄りの一部と南側は、道路及び

神社の境内として整地されたため、原形をとどめない) 第2列は墳丘中段に埴輪部に沿って樹てられていた。(この列は神殿を建立するために削りとられた南側の部分を除いては比較的よく残っていた。) 前方部正面には円筒、形象の二種を交互に配し、墳丘北側には前方部の隅から括れ部まで馬と人物等の形象埴輪のみを配置し、後円部に至ると、全部円筒のみとなる。更に南側括れ部に至ってわずかに形象を配置した様子がうかがえたと言う。第3列は墳頂部におかれたものであるが詳細は不明である。本墳の内部主体は北側括れ部に開口する埴輪を用いた石室であると言われる。即ち床面に  $30 \times 14 \times 4\text{cm}$  の埴輪を平敷にし、玄室の幅は  $4.30\text{m}$ 、奥行  $4.10\text{m}$  の大きさを持ち、粘土をもって厚さ約  $1\text{m}$ 、高さ  $1.50\text{m}$  に垂直につみあげている。天井部はここから四方持寄の穹窿天井を構成していたと見られると言う。特に粘土壁面は室内及びその外側で焚火に依り固めたと見られ、焼粘土桟とでも称すべき特殊遺構と調査者は報告している。又副葬品は、管玉1、須恵器片1、土師器片1と記録されている。

2. 西の台古墳は成東町の西方約  $2\text{km}$  の板付部落の北側裏手につらなる丘陵上に位置する。(昭和26年夏に日本大学考古学会に依って発掘調査された不動塚前方後円墳は本墳の東方約  $150\text{m}$  のところにある。) 本墳と不動塚古墳との中間にはかなり大型の円墳數基があり、更にその周辺には10数基の大小の円墳が点在する。本墳はその長軸線をほぼ東西にとり、その長さは  $90\text{m}$  を計るかなり大形のもので前方部を西に向けて築かれている。本墳の築造に当っては、先づその基部に自然の地盤の上に高さ  $1.60\text{m}$  の墳形に応じた壇を築き、その上に封土を盛り上げて墳形を形成するが、墳頂部の高さは前方部後円部共ほぼ  $7\text{m}$  を計る。二重の周溝を持つが、図で見る限り前方部の広がりは殿塚ほどではなく、後円部の直径は前方部の径をはるかに越える形を示している。調査者は本墳の埴輪列については、前方部が永年の開墾に依り破壊されていた事、及び盗掘に依り墳頂部分の埴輪が抜き取られていた事をあげた後に、基部の裾と内溝側にかけて2列、壇上部に2列、頂上部に2列と計6列の埴輪列が置かれていたものと報告している。この内墳頂部は円筒と人物、馬形等の形象であり、壇上部の埴輪列は前方部から括れ部迄は全て円筒であるが、後円部を巡る列は次第に形象の数を増し、家形のものもあり、特に後円部背面には極めて秩序良く人物と円筒とが交互に置かれていた。更に内溝側の2列の内、外側の1列は円筒、内側の1列の内北側にのみ円筒に交えて形象を置いたと見られると言う。ただその精しい記載はない。内部主体は南側括れ部にあり、壇状の土塊に依り築造された横穴式石室であり、その規模は幅約  $4\text{m}$ 、長さ  $4.30\text{m}$  であり、これに幅  $90\text{cm}$ 、高さ  $1.20\text{m}$ 、長さ  $2.30\text{m}$  の羨道部が附隨する。石室内からは土師片2個以外遺物はなかったと記されている。

3. 殿塚古墳は芝山古墳群中最大のもので、前方部を西に向け姫塚古墳と同一方向に並列し



第33図 殿塚・姫塚埴輪配置図

て築かれた前方後円墳である。その規模は長軸88m、後円部幅58m、前方部幅58m、高さは後円部で10.40mを記録し、（前方頂は後円頂より36cm低い）二重の周溝を持つ堂々たるものである。埴輪列は埴頂部及び埴丘中段及び下段、ならびに北側内堤上に発見されている（挿図第33図参照）。前方部埴頂両隅

附近に「さしば」がおかれていたのをはじめ、後円部には円筒群が置かれていたらしいが詳細は不明である。調査者は括れ部中段附近にあった家形片は埴頂から落下したものであろうと推定しているので、家形もこの円筒群内に置かれていたと見たい。ただし原位置と見られる家形は発見されていない。次に埴丘中段の埴輪列は、前方部正面及び南側に不明瞭ながら円筒列の破片が点々と認められ、そこに円筒列が配置されていた事を示していた。埴丘北側面には姫塚同様形象埴輪が樹てられていたが、中段の幅が狭かったために、その大部分が周溝内にころげ落ちた形で発見された。従ってその埴輪配列については、不明な点もあるが、先頭の動物群には馬のほかに、犬、牛、牝鹿、猪（二頭）の破片があった。下段には鴨、水鳥、鹿などの動物群が別に置かれていた事が分っているので、馬以外の動物群は下段に置かれていたのかも知れ

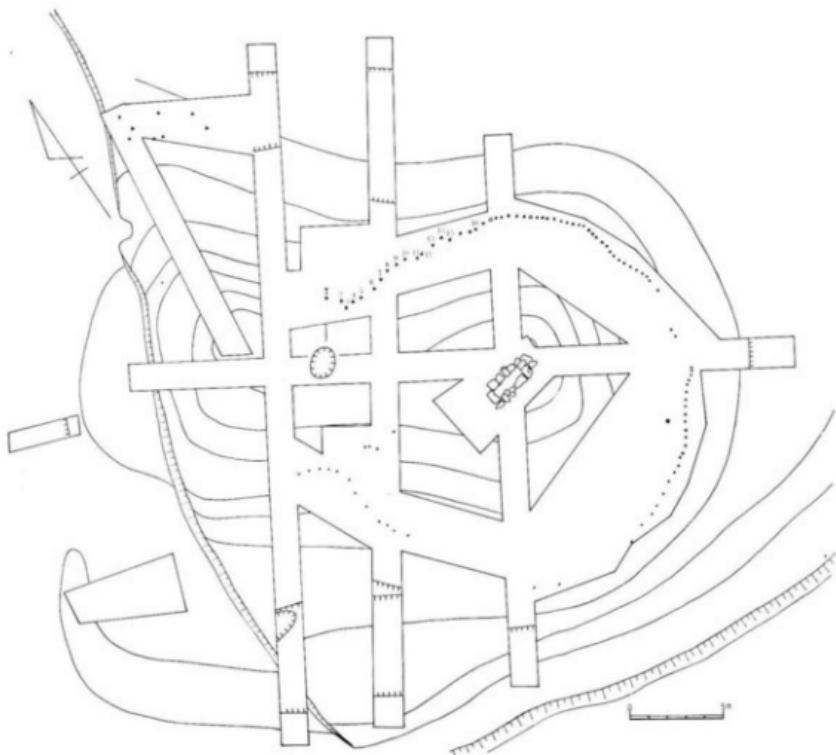
ないと言われる。男子群には天冠を被ったもの 3 体、衝角付冑をつけたもの 1 体その他があり、女子には玉ダスキをかけたもの、上半身裸体と思われるものなどがある。括れ部には軸数個、鏡又は家形の屋根の部分と見られるもの、太刀形らしいものなど、各様のものがあった。次に北側の内堤上には 1m ほどの間隔を置いて朝顔及び円筒を配し、その中央部附近に奇形の人物埴輪 2、又は 3 体が置かれていたと報じられている。内部主体は後円部中段南側に開口する横穴式石室である。羨道部は破壊されているので精細は不明であるが、石室は奥行 2.74m、間口 2.50m を計る。中央に砂岩の切石を一枚横に入れて前後に分けており、内部は一面に朱が塗られていた。副葬品は頭椎大刀 1、鉄直刀 5、刀子 1、鉄鏃數 10 個、白銅製鏡 3、鏡具 2、金銅鈴 8、金環 6、大形勾玉 1、ガラス大玉 4、中玉 5、小玉數 10 個、琥珀玉 5 等である。

4. 姫塚古墳、本墳は山武郡横芝町大字外記に所在するもので前方部を西に向か、長軸 58m、墳頂は前方部にあって 6m を計る前方後円墳である(後円部は 58cm 低い)。埴輪列は墳丘中段にあり、一列に囲繞するが、ほぼ原位置を保って発見された。この埴輪列は、前方部はほぼ中央に 1 個の朝顔形埴輪、南側は前方部から後円部にかけて円筒、石室上部括れ部よりに朝顔形をおいていたが、特筆すべきは墳丘北側面の前方部の隅から後円部背面迄、約 50m に及び形象列が配置されていたところにある。行列の順序は先頭に人物 1 体、つづいて馬 4 頭、それに 1 体づつの男子がつき、次に警固の武人と思われる堂々たる男子 2 体、更に琴を膝におく男子をまじえた男性群、次に 5 人の女子、最後に再び男子となっていたものと見られる。更に一段低い列外に、上半身丈の特徴な男子埴輪が発見された。これは両手を地につけて、ひざまずく姿を表わしたもので、下僕が座して埴輪列を見上げている位置に配されたものと見られている。内部主体は、前方部南側括れ部近くに開口する横穴式の石室であり、軟質砂岩に依り築造されている。即ち羨道部は幅 96cm、奥行 2.65m、高さ 1.37m、玄室部幅 76cm、奥行 3.06m である。副葬品は方頭太刀 1、鉄直刀 10 数振、刀子 1、鉄鏃と鉄釘數 10 個、馬具(轡、雲珠、杏葉)金銅製球形飾 4、金銅製飾金具數個、金環 6、瑪瑙勾玉 4、水晶切子玉 2、琥珀玉 3、ガラス小玉約 100 個、須恵器 2 である。

5. 墳谷 1 号墳 前方部を北に向けた全長 36m、墳高 3.40m の小型の前方後円墳である。埴輪部に一重の埴輪列が配置されていた。併しこの埴輪列は全体に囲繞せず、人目につかない西側は、括れ部に円筒埴輪をおいたのみであった。即ち埴輪列は前方部東側面より後円部の石室発見箇所(石室は後円部背面の埴輪部に設置されていた)に亘って樹てられており、その配列は、先頭部分に馬、武装人物等をならべ、括れ部に四注造の家形 2 を置き、更に人物埴輪と続き、後円部背面は円筒である。内部主体は後円部背面にあって、しかも周溝にはみ出して

設けられていた。主軸を南北にとり、南に開口する半地下式の横穴式の石室である。羨道部は長さ1m、幅50cm、高さ70cmを計り、これに続く玄室は、前方幅60cm、後方幅90cm、長さ4mをはかる。このほぼ中間部には仕切石が置かれ、前室、後室に分けられていたと報告されている。副葬品は墳頂下80cmのところに直刀一振と、それに近接して鉄鏃1、土師器片1、石室内では後室に刀子片1、鉄鏃3、金環2、須恵器(脚付盃)1、前室から金環1、須恵器2、と記録されている。

6. 宝馬にわとり塚 芝山町高田に所在する前方後円墳で、長軸約40mを計り、前方部を北に向いている。前方部前方から側面にかけて水鳥2、鶏5、男女各数体、括れ部附近に家形



第34図 高田木戸前1号墳埴輪配置図

2棟等の埴輪列を確認しているが、精しくはいずれ出版予定の報告書に依り度い。内部主体は括れ部に設けられた半地下式の箱式石棺で、遺体1が埋葬されていた。副葬品は耳環4、刀子1(銀装)、雲珠1、櫛1、ビーズ玉89、直刀数振、鉄鏃多數である。

7. 木戸前一号墳(挿図第34図)芝山町大字高田に所在する比較的小形の前方後円墳で、前方部を西北に向け、全長40m、高さ3.80mを記録する。本墳には埴籠部と埴頂部の二段に約100個以上の埴輪が樹てられていたと見られるが、この内上段は円筒で、少くとも6個以上が南北両側に対象して樹てられていたと見られる。下段は北側面括れ部から總数16体に及ぶ形象とそれに続く円筒列よりなり、南側に於ては極めてまばらとなる。前方部前面裾部にも円筒が樹てられていたと考へられる。又前方部北側周溝際に少くとも4羽以上の鶴が樹てられていたものと推定されている。従ってこれを一列と見れば本墳を繞る埴輪列は三段であると言へる。なお形象列の配列を示せば下記の通りである。先頭に大型の女子1体、次に大型の男子1体、太刀形1個、女子4体(大型2体を含む)次に家形3棟、女子4体、次に男子1体、円筒2、最後に男子となっていた。内部主体は後円部埴頂部分に設けられた箱式石棺であり、材質は軟質の砂岩である。長軸はほぼ東西に向けられ、幅約1.20mを計る。内部は盜掘を受けている為に副葬品としては鉄鏃片少量、耳環、ガラス小玉、直刀片1、刀子1などを検出したに過ぎない。

8. 経僧塚 成東町大字野堀にあり、麻生新田古墳群に属し、附近に15基の円墳を認める事が出来る。経僧塚はこの古墳群中最大のもので埴丘径45mを計る円墳である。高さは7.15m、周溝外堤の径は78m、埴丘は二段築成で、周溝は二重にめぐっている。埴輪列は、三段と見られ、内堤上に円筒列、埴丘中段に円筒と形象からなる埴輪列、埴頂平坦部近くに円筒8個が発見された。この内埴丘中段の埴輪列は、等高線4m~4.50mの段上(平坦面)にあり、63個以上を数えるが、この内形象が少くとも42個以上含まれる。その配置を見ると、円筒は北東側から東側にかけて樹てられており、この円筒の樹立する位置を除く範囲に形象埴輪列が配置されていた。もし馬の埴輪を先頭近くと見るならば(馬は南側に頭を向けていた)、西側から北側にかけて4体以上、それに続いて北側から東北迄が人物埴輪(男、女)、南東から南側にかけて家形で石室上が人物(男、女)さらに水鳥、(南西側は追葬の箱式石棺が埋められた為に破壊されて不明)となっていた。内部主体は二ヶ所発見された。一つは埴丘南側に開口する横穴式石室で、内側奥行6.30m、幅1.6mである。出土遺物は蘭玉、小玉、鐵刀、刀子、馬具がある。もう一つは箱式石棺で埴丘南西側に発見された。雲母片岩板石13枚からなり、長軸は埴頂を通る線に直角に造られ、旧表土を10~20cm掘り回めてある。その規模は内側1.85m、幅70

cmで、壁は70cmの高さを持つ、遺骸2体（男、女）を埋葬し、副葬品としては円形座金付金銅製大鉢10個（これは革帯についていたもので帶の全長80cm、幅12cm、金銅装主頭大刀など鉄刀7振、刀子2口、鉄鎌5塊、馬具金具、金銅製耳環2個、鉄地銀張耳環2、首飾（小玉、巻貝）胡簾などである。

9. 殿部田1号墳（挿図第35図）この古墳は芝山町大字殿部田に所在する小形の前方後円墳で長軸は31mを計る。この古墳の調査は実は吾々が中心となって行ったもので、既に埴輪の整理は終了しているが、第2次迄の調査では内部主体が発見出来なかったので、報告書の作製を見合せていたものである。併し小川台5号墳の埴輪の配列を論ずる上に於ては、是非共必要な資料なので埴輪配列の大要を記すと、No.1-2 鎧を腰につける人物、No.3 飾馬、No.4 裸馬、No.5、No.6、No.7、桂甲をつけた武人3体、No.8 左手を背に廻し帽を冠する人物、No.9 人物台（性別不明）、No.10 女子、No.11 円筒、No.12 人物（性別不明）、No.13 男子、No.14 球を弾く人物、No.15 女子、No.16 人物台（性別不明）、No.18 壺を頭にのせる女子、No.19、No.20、家形2棟となっていた。

次に未調査ではあるが郡内に点在する古墳の中で、埴輪の樹立が確認されているもの（既に消滅したものも含む）をあげれば左の通りである。

二里塚古墳 小形の前方後円墳であるが、永年の耕作に依り殆ど墳形を失っている。女子の顔2個が出土している。

一本松古墳 小形の前方後円墳であるが道路拡張工事の際多量の埴輪片が出土し、整理の結果女子埴輪1体が完形に近く復原出来た他、少くとも男子1、女子1の存在した事が知られる。

山田古墳A 墳形不明（円墳？）埴輪列のあった事は分っているが、既に消滅してしまったので精しい事は分らない。

山田古墳B 小形の前方後円墳で括れ部より円筒片が出土している。

宝馬古墳 小形の前方後円墳で埴輪列の存在した事が分っていたが、ブルドーザーに依って削平されてしまった。地積の境木附近から女子埴輪2体分の破片を蒐集、復原の結果完形に近い形を得た。

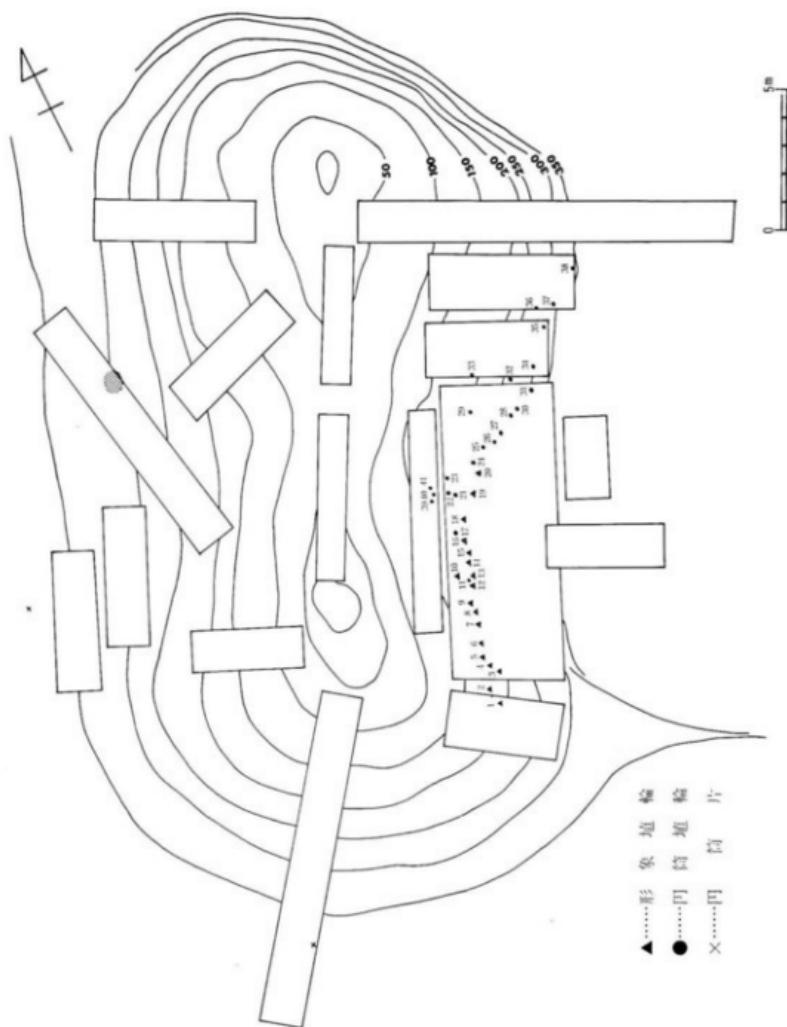
取立古墳 小形の前方後円墳で家形と女子頭部が発見されている。

蕉木古墳 小形の前方後円墳で奇形台形埴輪（？）が出土している。

大堤古墳 円墳で、人物、円筒の破片が出土している。

埴谷古墳 小形の前方後円墳で括れ部より円筒片が出土している。

胡摩手台古墳 小形の前方後円墳で、農耕に依り削られた後円部より円筒底部が出土した。



第35図 殿部田 1号墳埴輪配置図

市場古墳 小形の前方後円墳、水鳥の埴輪が出土している。

白糸遺跡 古墳ではないが完形に近い魚形埴輪の他、調査採集した破片から魚形3体、鞆1個、家形1棟、馬2頭があった事を知り得る<sup>10</sup>。

さて以上の資料をもとに、形象埴輪の配列について、その共通点をあげて見ると、木戸前一号墳を除き、他の全ての埴輪列には飾り馬が見られる事である。しかも飾り馬は、いずれも先頭近くにあり、その前には馬子と見られる人物が樹っている。次に男子、女子、家形と統き、ここで終るものと（宝馬にわとり塚、殿部田1号墳）、更に女子、男子、と続くものとに分ける事が出来る。（殿塚古墳）。（先頭が馬子ではなく、家形で完全に終る訳ではないが一応この部類に高田木戸前1号墳も入る）。

家形の埴輪はないが、後円部背面埴輪列がめぐらしに姫塚古墳がある。ここでの共通点は家型埴輪で形象列が終るものは、いずれも後円部前方迄で、埴輪列が終っており、後円部の背面迄は、埴輪列がめぐらしの点である。即ち西の台古墳、朝日の岡古墳、殿塚古墳（以上3基は二重の周溝を持つ）さらに姫塚古墳のように、当地方の埴輪を持つ古墳の内でも、規模や副葬品などから推して、当地方の古墳文化の盛行期に作られたと見られる古墳には、形象埴輪が古墳のいづれかの側面全体にめぐらされるが、その時期を外れると、形象埴輪列が後円部前方迄で終り、その最後は家形と言う特長を持つと考えられる。この配置について最初時代が下るに従い、かかる特長を持つかと考えていたが、（木戸前1号墳の主体部は埴頂部に築かれた石棺であり、宝馬にわとり塚は括れ部に設けられた半地下式の石棺である。）小川台5号墳は、殿塚よりもより古い要素を持った古墳と見られるので、側面全体に埴輪をめぐらす型が造られる前に、家型で終る埴輪列の形が既にあったと見なければならない事を知った。

次に1~9迄の埴輪列の内、最も小川台5号墳に近い配列を示すものをあげると、No.9の殿部田1号墳であると言う事が出来る。

即ち最初に馬子、馬、次に桂甲の武人と続くところは數を別にすれば全く小川台5号墳と同じ配列である。その後の配置は少々異なるが、盃を頭にのせた女子が樹てられている点は共通している。全体的に言って、殿部田1号墳の埴輪は（埴丘の規模との関係もあると思われるが）小川台5号墳の埴輪に比して小柄である事が一つの特長である。その作りを見ると、殿部田1号墳の埴輪の方が写実的であり、技術的にも優れているように思う。例をあげると桂甲を付けた武人を表現するに当り小川台のそれは台部をもうけず、2本の脚を円筒状に表わすが、これを埴丘中段に樹てるのには、脚先を埋めねばならず、その型はいかにも不恰好である。その点殿部田1号墳の武人は、桂甲の下になる見えない脚の部分迄たくみに表現され、それが台部に無理なく接続しているため、足の部分がかなり省略されているにもかかわらず、全く不自然さ

を感じさせない。背面は兜から脚に至るまで極端に省略技法をとり入れているが、その間に不自然さは感じられず、むしろ表現に極めて洗練された高度の技術を感じさせる。これは工人の技術の差にも依るのであろうが、その技術の差が生じて来る理由の一つに、両者の時代的差違を認めないと云ふにはいかないように思う。殿部田1号墳が小形の古墳の割に形象埴輪の数が多く、逆に、小川台5号墳がやや大形であるのに形象の数が少ない事の理由の一つが、そこにあるものと考えられる。殿部田1号墳や小川台5号墳の埴輪配列に極めて類似しているものに、更に埴谷1号墳をあげる事が出来る。埴丘の規模が殿部田1号墳とほぼ同じである事も良く似ており、目につかない側面の埴輪列を極端に省略する事も全く同じ形である。次にNo.58の女子埴輪は、極めて珍らしい形をしているが、これと同形の埴輪が高田木戸前1号墳から大小合せて9体発見されている事が注目される。高田木戸前1号墳の埴輪列は、当地方の他の埴輪列とは、その配列が根本的に異っている事で知られている。即ち、埴輪列の先頭に馬子、馬のセットがなく、巫女と見られる大型の女子埴輪で埴輪列が始まる特種なものであり、全体的に女子埴輪の方が男子埴輪よりも数が多いと言うこの地方では他に類例を見ないものである。三輪玉付の太刀埴輪が出土している事も当地方では他に類例がない。巫女と見られる女子埴輪の数がきわだって多い事や、三輪玉の太刀など、祭祀に関係が深いと見られる埴輪が多いので、本墳に祀られた被葬者は、祭祀的要素を極めて強く持った人物であったと推定されるが、この巫女と見られる小型女子埴輪と、同形の埴輪が小川台5号墳から発見された事は、特に留意する必要があるように思う。この埴輪は椅像を表わしたものと考えられるが、有名な群馬県邑楽郡大泉町出土の巫女の埴輪の様に椅像のイメージの中には、（その職掌上に何んらかの関係があると思われるが）、褲と共に巫女を暗示するなにかがあったのではないかと思われる。人物を主体とする形象埴輪列をやや離れて、野性の動物を中心とする一群の埴輪が樹てられる例は、殿塚や宝馬鶴塚などにも見られるが、（殿塚は埴丘北側下段の稜線近くより始り、括れ部迄は至らない。宝馬鶴塚は前方部西側より北側面にかけて樹てられていたと見られる）高田木戸前1号墳は鷹を中心とする。5号墳の場合はどうも鹿だけが一頭ボツンと樹てられていたようだ。（鷹や水鳥も出土しているが、樹てられていたところは外堤よりと見られ、鹿と同一視する事は出来ない。）この鹿の埴輪については、明確なる角の表現を持った鹿の埴輪の発見はこれが初めてではないかといわれ、別の意味でも注目を集めた。ところで角が三段に別れているのでこの鹿は3歳の鹿を表現したものと言へる。鹿が神の使として神社などに飼われるようになったのはかなり早くからのようで、藤原家伝に依れば春日神社の神鹿は、香取・鹿島両社の鹿を移したものだと伝へている。早稲田大学の滝口教授はその事について、鹿の持つ神秘性に依るものであろうと指摘されている。日本書紀仁德38年秋7月の項に、「朕、このごろものおもひつつ有るに、鹿の声を聞きて歎む」云々と言う一節がある。鹿の声は昔から人々の心をとらえ、郷

愁をさそつたものなのであろう。若しそうだとすれば、時の被葬者の墳墓に樹てられるに最もふさわしい動物と言う事が出来る。教授は「埴輪に鹿を配したのは、古墳後期の発想であるが、単なる野獸という意ではないであろう。日常野山で見かける愛すべき動物に葬祭の座を与へたものとみないのである」と鹿の埴輪の小論を結んでおられる<sup>20</sup>。恐らく埴輪本来の意義から次第に脱して、そこに人間的な情想が加味されて来るに従い、鹿の埴輪が古墳に配されるようになって来たものなのであろう。いずれにしても当地方の埴輪列に就いて言えばこの地方の古墳文化の盛行期のものは、括れ部に家形が来る事、埴輪列は家形で終らず、更に人物が続くと言う形を示すと言えそうである。先にも述べた様に、私は小川台5号墳を調査する迄は、当初後円部背面迄めぐる形で配された埴輪列が次第に省略され、やがて後円部前方迄となり、その最後が家形となると考えていたが、5号墳は当地方の埴輪を持つ古墳の中では最も古いものに入れられるべきだと思うので、古い形の中に家形で終る埴輪列があったと考えなければならなくなってしまった。

本来家形埴輪は蓋形埴輪などと共に墳頂部の供獻用円筒埴輪に依る方形の中の所謂聖域中に樹てられたものであって、被葬者の死後の安住の場所としての家と、威儀具としての蓋が形象埴輪の中でも最初に出現して来たと見られている<sup>21</sup>。それは言う迄もなく内部主体が墳頂部に設けられたものに対応するものであって、東国に於ても赤堀茶臼山古墳の家形配置は特に有名で、一般に良く知られるところである<sup>22</sup>。ところで横穴式の石室が盛行し聖域が墳頂部から移動するに従い、家形埴輪も次第に墳頂から下り、遂に埴輪列の中に組み入れられるようになったものと解したいが、それを証するような明確な出土例は未だ報告されていないようだ<sup>23</sup>。只、群馬の親音山古墳の人物埴輪列は、後円部左側、やや斜め後方に開口する横穴式石室の前庭部前面にある墳丘中段の平坦面から前方部に列を延ばし、中段部を一周すると推定されたと言う<sup>24</sup>。この埴輪配列は後円部侧面や前方に於て家形で終る埴輪配列が生れる素地を何かに暗示しているように思へる。形象埴輪全体の配置に就いても、最初被葬者を祀る聖域の中に樹てられた少種類の器財埴輪が、その祭祀的要素を次第に失い、裝飾性をますと共に、示威、その他の要素が加味されて、今日知られるような多様な形象埴輪が生まれるに至る訳であるが、その過程に於て埴輪配列も次第に変化し多様化を来たして来る。古式の様相を持つ横穴式石室を有する群馬県榛名町の本郷古墳では、埴輪人物像群が横穴式石室に対応するように羨道部入口に向けて配置されており、その配置場所も主体部に近接するように考慮されていた。又この時期には群馬県上芝古墳のように墳丘につくり出し部をもうけて、そこに形象埴輪類を限定配置した例も見られるが<sup>25</sup>。当地方ではこのような形で形象埴輪が樹てられている古墳は未だ発見されていない。西の台古墳は当地方では比較的上記に近い形態の埴輪配列と見られるが、併し墳頂部に馬形を置くなど、当地方の独自性を濃厚に持っていると言へる。最近市原で埴輪を持つ古

墳が調査されたが、この古墳は括れ部近くに張り出し部を設け、形象埴輪がまとめて樹てられていたと言う<sup>30</sup>。この事実は群馬の上芝古墳などと規を一にする埴輪配置を持つ古墳が、少くとも房総半島の内湾岸の台地に存在する事を示すものであるが、その分布がどのような広がりを見せるかは今後に残された一つの課題であろう。

只 5 号墳の場合北側周溝内に転落していた埴輪片を整理検討してみると、出土状況の項で記した通り、その殆どが円筒片で、形象埴輪の破片は極めて少ない。その比率は 8 分の 1 程である。この多量の円筒埴輪が樹てられた位置であるが、形象列の上から埴丘を転がり落ちたすると、形象列の中に何点かは引っ掛けかかっていなければならないと思うが、一点もそう言う形で発見されないところを見ると、これ等の円筒は形象列の下に、相当間隔をつめて樹てられていたと見なければならない。しかも形象列のある場所以外は円筒片も全くまばらであるから、張り出し部はないが、5 号墳の埴輪配置は一定区劃内に形象埴輪を配置する配列法に極めて近いものであると言う事が出来る。一定区劃内に配置された形象埴輪が、ある時期に埴輪列として埴丘をめぐる様に樹てられるようになって来ると見る事には全く問題がないと思われるが、そこで少々大胆な推論を試みると、5 号墳の埴輪配置は、その中間的な要素を持つものであると言へるのではないか、要するに 5 号墳の埴輪配列は、5 世紀末か、6 世紀初頭の要素を濃厚に示していると言へる。換言すればそれは 5 号墳の築造年代を比定する一つの要素にはなり得よう。

いずれにしても、今迄発見されている当地方の形象埴輪列は他の地方と異り、より人の眼を意識し、古墳の莊厳さや、視覚的効果を深く配慮して樹てられたものばかりである。当地方の古墳の内部主体が括れ部附近に設置される変則性を持つ事は良く知られるところであるが、埴輪の配列に就いても同様の事が見られるのかも知れない。

なお小川台 5 号墳の埴輪配列とは直接的には関係ないが、当地方の家形埴輪は、2 棟一対になって出土する例が殆どで（経僧塚、埴谷 1 号墳、高田木戸前 1 号墳、殿部田 1 号墳、宝馬鶴塚）しかも勝魚木をのせる家の二棟置かれる場合が多い。（経僧塚、殿部田 1 号墳、宝馬鶴塚）赤堀茶臼山古墳の場合などは、家形は埴頂附近から 8 棟発見されたにもかかわらず、勝魚木をのせる家は 1 棟である。これは一体何を意味するのか、にわかには断定し難いが特筆すべき事と思う。更に細かく論すれば、西の台のひげをつける男子の埴輪は写真で見る限り、姫塚のそれに良く類似している等、指摘すべき点は多いが、本論に直接関係がないので、当地方の埴輪についての精論は他日に譲り度い。又殿部田 1 号墳の埴輪配列が極めて小川台 5 号墳のそれに似ているところから推考すると、高谷川東岸は武射の国よりも下海上の影響をより強く受けたと解した方が良いように思われるがどうであろう。更に調査研究を進め、類例を集めて正確さを期し度い。

## 註

- (1) 丸子 亘「千葉県小見川町城山古墳の調査」立正大学博物館学講座研究報告第2 昭和40年刊。
- (2) 本報告書は昭和50年夏頃には出版される予定である。
- (3) 軽部慈恩「千葉県山武郡朝日の岡古墳」日本考古学年報5 昭和27年度、昭和32年3月刊。
- (4) 軽部慈恩「千葉県山武郡西の台古墳」日本考古学年報7 昭和29年度、昭和33年3月刊。
- (5) 滝口 宏「千葉県芝山古墳群調査速報」古代19・20号、昭和31年6月。  
滝口 宏、久地岡隆雄「はにわ」日本経済新聞社、昭和38年。
- (6) 川戸 彰「千葉県山武町埴谷古墳群調査概報」上代文化27輯、昭和32年4月。
- (7) 報告書は刊行予定
- (8) 板井利明「千葉県芝山町高田第1号墳発掘調査概報」塔影第1集、本郷学園、昭和41年刊。
- (9) 市毛 黙「千葉県山武郡成東町經宿塚古墳の調査」史報83、昭和46年3月。
- (10) 昭和50年中に概報刊行の予定
- (11) 市毛 黙・浜名徳永「蛙の埴輪」古代44号、昭和40年2月。
- (12) 滝口 宏「鹿のはにわ」楓の木11月号、昭和49年11月。
- (13) 伊達宗泰『畿内の埴輪』古代史発掘7「はにわと石の造形」村井富雄編、昭和49年10月、講談社刊。
- (14) 後藤守一「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」帝室博物館学報第6 昭和8年4月刊。
- (15) 群馬県二ツ山、高崎市観音山の両墳は前方部埴頂に家形が配置されている。
- (16) 梅沢重昭『関東の埴輪』古代史発掘7「はにわと石の造形」村井富雄編、昭和49年10月、講談社刊。
- (17) 須田 勉氏教示。

## 第2節 石製模造品出土古墳について

小川台第1号墳第1主体部土壌内より、鉄鋸、剣、鐵とともに発見された有孔円板10枚、臼玉32個については、当古墳群の性格と、年代検討のため、多少類例をあげて考察しておこう。また第1主体部外に存在した臼玉151個については、別主体における副葬遺物と見られないことはないが、一応これは埋葬を伴わない遺物としてとり扱ってみようと思う。

この臼玉群の位置は、第1主体部の土壌外であることは明らかであるが、もしこれを埋葬を伴わない遺物、つまり古墳における祭祀の遺物としてもやや疑問も残る。臼玉群は第1主体の墳底から約40cm 上部であり、墳丘表土から約92cm とやや深すぎる。第3主体?などに比すれば、墳底とほぼ同じレベルであり、これらに対しての埋葬後祭祀の遺物としてはなお深すぎる。もっとも埋納用にピットでも掘ってあれば別である。なお、この意味では墳頂西側から出土した土師器盤形土器も、完全に封土中に埋没して発見されている点とも合せ考慮する必要があろうか。

さて、第1主体部の有孔円板10枚は、土壌中央部に散在し、特別な配列などは観察されていない。

千葉県内の古墳出土石製模造品の例をみると次のようにある。

1. 千葉市生実 七廻塚古墳<sup>(1)</sup> 主体部ならびに祭祀跡

2. 松戸市河原塚 河原塚古墳<sup>(2)</sup> 填麗部 刀子3(破片)
3. 小見川町 城山第5号墳<sup>(3)</sup> 前方部填丘中 有孔円板2, 勾玉1, 白玉
4. 八日市場市塚原<sup>(4)</sup> 扁平勾玉1
5. 千葉市高品町 石神第1号墳<sup>(5)</sup> 刀子1, 立花1
6. 印旛郡印西町小林 鶴塚古墳<sup>(6)</sup> 壱棺内 白玉
7. 香取郡神崎町小松 能照寺裏<sup>(7)</sup> 有紐鏡, 刀子, 鎌, 剣形
8. 木更津市 長州塚<sup>(8)</sup> 有紐鏡, 円板, 刀子, 鎌
9. 同 諸西 第I群2号墳<sup>(9)</sup> 周溝内, 有孔円板1
10. 同 同 第II群5号墳<sup>(10)</sup> 周溝内, 有孔円板1
11. 同 清見台 A-4号墳<sup>(11)</sup> 白玉14
12. 同 同 B-2号墳<sup>(12)</sup> 白玉2
13. 君津市南子安 門馬古墳<sup>(13)</sup> 勾玉1, 白玉77
14. 市原市姉崎 二子塚古墳<sup>(14)</sup> 刀子5, 有孔円板2, 勾玉1, 管玉4, 白玉3, 立花4
15. 成田市, 成田ニュータウン内 天王・舟塚32号墳<sup>(15)</sup> 白玉21
16. 同 同 33号墳<sup>(16)</sup> 白玉21

等である。これらの内正式に報告書の発刊されているものは、2河原塚古墳。6鶴塚古墳—但し白玉は紛失。11・12清見台古墳群, 13門馬古墳などがあげられるが、これらの内の主体部内と考えられる例は、1七廻塚古墳例, 6鶴塚古墳例, 11・12清見台古墳例, 13門馬古墳例, 15・16天王・舟塚32・33号墳例などであり、明瞭ではないが3城山古墳例, 8長州塚, 14姉ヶ崎二子塚後円部なども加えられるようである。もっとも七廻塚では祭場址と呼ばれた部分からの出土である。

千葉市生実町七廻塚古墳の概要を示すと、台地端に近く占地した古墳で、推定直径約60m、周辺古墳群中の主墳とみられるもので、昭和33年調査された。主体部は両端に粘土をつめた木棺直葬で2つあったと思われ、各々から滑石製立花5点が出土し、他に鉄刀、剣、鉢4、鎌4、斧3、刀子2、不明鉄片1などが棺部出土品として保存されている。この2つの棺部とは別に、今1つの主体部があり、報告者は祭場址と呼んでいる。詳細は不明であるが、北西より東南に長く遺物が発見されたようで、北西から滑石質棒状品2点、ついで銅鏡1面、ついで大形剣1点が中心軸にならび、更に南東に石製模造品の大形剣1、刀子17、斧甲1、斧乙2、鎌2が置かれていた。またこの鉄から模造品にかけて、白玉773個が散在していた。これらの石製模造品は皆優秀品で、丁寧な造りのものである。先にあげた古墳出土品中、これに類するのは、木更津市長州塚例などである。

一般的に石製模造品が古墳から出土する場合に、滑石質の粗製大量化された玉類のみの例と、ここにあげた七廻啄、長州啄に代表されるような、刀子、斧、鎌などを中心とした模造品を出土する例の二種が普遍的であるといえる。ところが今回調査された小川台第1号墳の例は県内における石製模造品出土古墳の例ともやや異り、県外例を比較しても、同様のことが観察される。そこでこの小川台第1号墳にみられたような例を全国の石製模造品出土古墳約200例の内から選び出すと、

1. 奈良県新沢千塚第48号墳<sup>19</sup>
2. 岡山県石城2号墳<sup>20</sup>
3. 同 隨庵古墳<sup>21</sup>
4. 広島県三玉大塚古墳<sup>22</sup>
5. 同 国成古墳<sup>23</sup>
6. 島根県薬師山古墳<sup>24</sup>
7. 福岡県飛山1号墳<sup>25</sup>
8. 福岡県浮羽郡吉井町徳丸塚堂古墳<sup>26</sup>
9. 同 行橋市下稗田検地<sup>27</sup>

これらの古墳の内7飛山1号墳、8塚堂古墳、9行橋市検地は単孔円板であるが、他はいずれも双孔円板が重要な遺物としてあげられる遺跡である。

1 奈良県新沢千塚第48号墳は、16.5m×17.1m の方墳で円筒埴輪を周囲し、鏡2面、素環頭太刀、剣、鉾、硬玉勾玉、管玉、ガラス玉を出土したほか、棺内頭部から双孔円板2個が発見されている。新沢千塚からはこのほか第160号墳の前方部木棺直葬主体から画文帶神獸鏡、平縁変形獸文鏡、珠文鏡、短甲、挂甲、三環鉢、刀劍類、金製飾付耳飾などとともに、双孔円板が出土している。この双孔円板は、画文帶神獸鏡の東側にあり、その左右には耳飾があったという。

2 岡山県石城2号墳は、高松市所在の古墳で、碧玉質の勾玉、管玉のほかに、双孔円板8枚が弧状にならべられていたという。

3 隨庵古墳は、全長約40m の帆立貝式古墳とみられ、埴輪などはない。後円部径約30m、同高約4m の墳頂部に竪穴石室があり、木棺が一部残存していた。石室の内法は長3.5m、幅0.8~0.9m、高さ1.1m を測る。木棺は割竹形木棺と思われ、石室東北部に偏して置かれ、長さ約2.9m と推考される。東北部では木棺と石室の壁の間がわずか10cm ほどであったが、この間に矢（鎌）が束のまま壁に立てかけられた状態で発見され、反対の西南棺外には短甲、冑等一領、工具、鍛造具、漁具、尖頭形鉄器、更に南東壁ぞいに、木心鉄張輪鉢、轡などの馬具類、鉾などが納められていた。遺骸は全く残っていないが北東に頭を置いていたと思われ、こ

の北東端には有孔円板6個を弧状にならべ、やや西に滑石製白玉75個、同扁平勾玉1個、金製環状品が置いてあり、付近に大小7個の刀子が発見されている。これらは遺体の頭上に置かれたものであろう。ついで胸のあたりに位至三公鏡1面が鏡背を上にして発見され、その付近に水晶製勾玉とガラス小玉があり、これらからやや離れて滑石製白玉19個とガラス小玉がまた1群となっていた。さらに剣3口、直刀2口が、切先をいずれも南西に向け、鏡より西方にならべられていた。報告者は有孔円板6枚が整然と配列されていたので、なにかにはりつけてあつたかもしれないと推察している。

4 広島県三玉大塚古墳は明治39年に発掘され、詳細は不明であるが、石棺中から遺物が発見され、棺の周囲は小石を積み、上には長さ約3m、幅約1.2mの巨石が置かれていたという。鏡2、筒形銅器1、刀、鉾6、斧5、鎌、短甲、樹2、杏葉2、砾石3、管玉1などとともに白玉、有孔円板を出土している。

5 広島県国成古墳は径約13mの円墳で、円筒埴輪破片、須恵器1片などもみられるが、内部主体は粘土桼、木棺であったよう、棺床の左右に、東側2口、西側3口の直刀が副葬され、頭部付近に双孔円板が5個群在し、うす水色の滑石製双孔円板4個と、滑石製白玉、ガラス製丸玉、ガラス製白玉、管玉が散在し、珠文鏡1面、勾玉1個が中央やや北西よりに存在した。その他副葬品として手鎌1、小刀子2、のみ1、鉄片が棺の内外に散在していたという。

6 島根県薬師山古墳、島根大学敷地内に存在した古墳で、箱式石棺?を内部主体としたらしく、彷彿四乳鏡1、刀身2、鎌、須恵器の題、壇、大形壺、有蓋高坏、高坏、蓋付坏、土師器の壇、高坏などとともに、双孔円板6枚が発見されている。

7 福岡市飛山1号墳は、丘陵尾根上に小規模の墳丘を持つ古墳で、内部主体は竪穴系横口式石室といわれるもので、長軸約2.2m、N27°E、幅は奥壁1m、閉塞部で0.8mを測り奥壁にはペニガラが塗布されていた。遺物は直刀1口、剣1、刀子1のほか、勾玉とガラス玉群が奥壁近くにあった。これに対し、閉塞部東隅に白玉と単孔円板4個が発見されている。

8 福岡県浮羽郡徳丸塚堂古墳は、昭和10年の報告によれば前方後円墳の前方部から発見された竪穴系横口石室で、直刀9、短甲3、挂甲1、衡角付冑1、鉾2、刀子1、鎌など武器武具のほか、ごぼうらの貝釧、ガラス管玉などが人体近くにあり、入口近くの石壁によって、彷彿神獸鏡(径10.5cm)1面と滑石製白玉720個余り、有孔円板4個が一括して発見されている。この出土状況は7飛山1号墳の場合とよく類似している。有孔円板は報告書からでは単孔か、双孔か判明しないが、九州の他の例からみて単孔である可能性が強い。

9 福岡県行橋市下稗田検地の箱式石棺内から、単孔円板2、扁平劍形1、白玉160余が発見されている。

このように九州地方の円板は単孔品が多く、地方色としてとらえることもできよう。

さて、以上数例の有孔円板を中心とした石製模造品出土古墳をあげてみたが、これらはいずれも埋葬を伴う主体部内から発見されたものであり、いくつかの共通性がみられる。まず地域としては、奈良県の新沢千塚を除き瀬戸内沿岸から、北九州にかけてみられる現象である。

新沢千塚は大和の古墳群の内では、特異なグループとして把握し得る古墳群で、新古ともに石室の受容を避けた例とみられる。もっともこの素掘り土壤による埋葬、あるいは粘土桿などによることが、本論にどう関係するかは未解決である。瀬戸内沿岸にこのような石製模造品の出土状況のあることは以前ふれたことがあるが<sup>四</sup>、北九州の単孔円板もやはりこの類とみられて、ここに追加することにした。また、島根県薬師山古墳例は、やや離れてみえるが、さきにもふれた通り<sup>四</sup>、生産遺跡である中島第1号址にもみられることから、将来この方面にも類例の増加する可能性を認める。

年代については、詳細な報告書の少ないことから、これらの古墳相互間の追求はむずかしいが、隨庵古墳における位至三公鏡は、御廟山古墳の陪冢とみられるカトンボ山古墳から多数の石製模造品とともに出土しているほか、三重県一志郡筒野古墳、島根県岡田山古墳、山口県吉敷郡赤坂古墳、長崎県東松浦郡谷口古墳など著名な古墳からの出土例がある。このほか神奈川県、福岡県（筑前）から各1面などと全体としてあまり多い鏡式でもなく、郡村未詳の神奈川県例を除くと、西日本に分布図を持つようでもある。これらの鏡を出土している古墳の内でもカトンボ山古墳が5世紀中葉、隨庵古墳が5世紀後葉とすると、やや後出のグループのようである。

次に薬師山古墳の場合にみられる古式須恵器の伴出は、他にあまりない。飛山1号墳でも少量の甕口縁破片が、古式須恵器として報告されているが、明瞭でない。薬師山古墳の須恵器については、山本清氏の論考があり、山陰地方でも、金崎第1号墳出土須恵器とともに最も古いグループとされているものである。

今一つ年代を知る上で、九州地方の飛山1号墳、徳丸塚古墳にみられる竪穴系横口式石室という石室形態がある。ここではあげなかったが、同じ福岡県内の福岡市老司古墳第1号石室<sup>四</sup>も同形式の石室で、鏡とともに小形扁平滑石製勾玉20個余が石室中央部にあり、そのやや南に硬玉製勾玉2、碧玉製管玉48、ガラス小玉多数があった。この古墳は前方後円墳で、主体部を數多く持ち、墳丘には壺形埴輪を周囲にめぐらしている古式古墳である。

これらは竪穴式石室から横穴式石室への中間的位置にある石室とみられている。

これらの状況からおよそこれらの古墳が5世紀代にあることが考えられる。

/

ところで、これらの古墳に出土した有孔円板の数量をみると、1奈良・新沢48号墳2個、2岡山・石城2号墳8個、3岡山・隨庵古墳6個、5広島・国成古墳9個(4+5)、6島根・薬

師山古墳6個、7福岡・飛山1号墳4個、8福岡・塚堂古墳4個、9福岡・検地2個と偶数が圧倒的に多く、今回の小川台1号墳第1主体部出土の10個もこの例にもれない。

これらの出土状況は隨庵古墳のように特殊な配列を示す例は少ないが、飛山1号墳、塚堂古墳などは遺体部を離れて一括してあり、埋葬にともなう「まつり」に使用された品の埋納ともみられる。今回の場合、主体部の中央ややかたよって臼玉と出土しているので、あまり明瞭ともいえない。

小川台第1号墳の石製模造品のありかたは、上記のように瀬戸内沿岸を中心とした西日本に類例のみられるものであり、これらの古墳がほぼ5世紀代に築造されたことも推測される。小川台第1号墳の他の主体部をみても、鉄製武器として全て剣を主体とするものであり、直刀を混えないというかなりかたよった傾向を示している。

鐵も大形鉄鎌が少量納められていること等、この地方としては古式古墳の例にもれないものである。墳丘の形も整美された円形、墳頂平坦部を持つこと、台地端部に占地していることなどから考えて、小川台古墳の最も古い古墳と推測して大過ないと思われる。

## 註

- (1) 武田宗久「千葉県千葉市七廻塚古墳」日本考古学年報11、昭和33年度、昭和37年3月。
- 武田宗久『七廻塚古墳』『千葉市史』昭和49年3月。
- (2) 大場磐雄・小出義治他「松戸河原塚古墳」昭和34年12月。
- (3) 丸子 亘・渡辺智信「千葉県東庄町前山土師遺跡—第1次調査概報—」立正大学博物館学講座研究小報1、1966.9。なお渡辺智信氏の教示も得た。
- (4) 丸子 亘「八日市場市塚原における前方後円墳調査(予報)」立正大学史学会創立35周年記念史学論文集、昭和35年10月。
- (5) 武田宗久氏教示、千葉高校蔵。「千葉市史」昭和49年3月。
- (6) 市毛 熊「下総鶴塚古墳の調査概況」昭和48年3月。
- (7) 高橋健自「古墳発見石製模造器具の研究」帝室博物館学報1、大正8年12月。後藤守一「石製品」考古学講座28・29、昭和5年7月・8月。
- 円墳か、埴輪あり、石製枕、劍身、土器片、石製模造品出土、明治33年発掘。
- (8) 大場磐雄「鑑鏡」日本考古図錄
- (9) 桐山林誠他「木更津市請西遺跡—昭和49年度発掘調査概要」木更津市教育委員会、昭和50年3月。
- 00 渡口 宏・中村恵次他「千葉県木更津清見台古墳群発掘調査報告」清見台古墳群発掘調査団、昭和43年3月。
- 01 野中 徹「君津市門馬古墳発掘調査報告」君津市教育委員会・馬門古墳発掘調査団 昭和49年1月。
- 02 大場磐雄他「鷲崎山王山古墳」市原市教育委員会、1963年10月。
- 後円部墳頂下0.6~1.2m位の間に雜然と出土した。轟蛇文鏡1、他鏡2、硬玉製勾玉7、琥珀製蜜玉5、ガラス小玉300+, 直刀片2、鉢甲冑等であった。
- 03 財團法人千葉県北総公社業務部業務課文化財調査第一班「(成田ニュータウン) 週報65号」昭和45年1月。
- 不整形方の周溝、一辺約23m、高2m弱、墳頂部素掘り土壙、内部からの出土品白玉のみ。
- 00 同「(成田ニュータウン) 週報66号」昭和45年2月。不整形方一辺17m前後、高1.4m前後、墳頂部素掘り土壙から白玉のみ出土。

- 15 伊達宗泰・網干善教・小島俊次・藤原光輝・森 浩一「奈良県橿原市新沢千塚の調査」日本考古学協会第31回総会研究発表要旨（於東京教育大学 昭和40年5月）。なお、48号埴縄部分は省いた。なお、網干善教、森 浩一、音谷文則氏をはじめとする方々に種々御教示をえている。
- 16 漢戸内考古学研究所 鎌木義昌氏教示
- 17 總社市阿曾所在、鎌木義昌「總社市鰐庵古墳」總社市教育委員会 昭和40年7月。
- 18 高橋健自「古墳発見石製模造器具の研究—帝室博物館学報第一冊」帝室博物館、大正8年12月。
- 19 広島県深安郡神辺町中条所在、神辺町教育委員会「国成古墳調査報告」昭和40年1月 は未見。
- 村上正名「広島県神辺町国成古墳」日本考古学協会第31回総会研究発表要旨（於東京教育大学 昭和40年5月）
- 村上正名「広島県深安郡国成古墳」日本考古学年報16、昭和38年度、昭和43年3月刊。
- 20 山本 清『島根大学敷地兼師山古墳遺物について』『山陰古墳文化の研究』昭和46年7月。
- 21 塩屋勝利・島津義治『飛山古墳群の調査』『福岡市和白遺跡群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告第18集、福岡市教育委員会、昭和46年10月刊。なお、塩屋、島津両氏から御教示をえている。
- 22 宮崎勇藏『筑後國浮羽郡千年村塚堂古墳』『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十輯、昭和10年3月。
- 23 小田富士雄「祭祀遺跡—九州」神道考古学講座第2巻、昭和47年6月、雄山閣
- 24 舟山林維「漢戸内における古代祭祀」神道宗教61 昭和45年12月。
- 25 福岡市教育委員会「福岡市老司古墳調査概報」昭和44年3月。森貞次郎、松本翠氏等からの御教示をうけている。

## 跋

栗山川東岸の古墳群については、かなり以前からその存在が知られていたにもかかわらず、本格的な学術調査が行われたのは今回が初めての事である。しかも1号墳からは木棺直葬の主体部とその副葬品として有孔円板や白玉などが多数検出された。この古墳は栗山川西岸のいわゆる山武郡内の古墳群をも含めて、現時点では当地方で一番古い古墳と見て良いであろう。又5号墳は形象埴輪列を持つ前方後円墳であるが、その主体部は木棺直葬であった。今迄調査された当地方の埴輪を持つ古墳は全て横穴式石室か、石棺であり、副葬品から推しても、形象埴輪を持つ古墳としては、これも目下のところ当地方で一番古いものに入ると見て良いであろう。4号墳は盃掘に依り主体部が完全に破壊されていたが、最も時代の新しい時期のものである事は間違いない。このように今回の調査は、単に栗山川東岸に於ける始めての発掘調査であると言つだけではなく、学問的に極めて重要な多くの新事実を学界に提供する結果となった。さして広くない一つの台地上に、最も古い時期の古墳から最も新しい時代の古墳迄が並存している事実は、それだけで識者の注意を喚起するに十分であろう。この調査が導火線となって、当地方の古墳文化の解明が一段と進む事を心から期待したい。

顧り見ると、当調査の成果は決して吾々だけのものではない。先づ調査の機会を与えて下さった文化庁・県文化課の先輩諸賢、八箇教育委員会の飯田課長を始め、わざわざ事務一切を引受けた社会教育課の皆さん、炎天下直接発掘に参加協力して下さった地元の各位、忙しい中を玉稿を寄せて下さった市川博物館の山田友治学兄など、数多くの人々の御支援御尽力にはげまされて、ようやく本書を上梓する運びにまでこぎつけ得た。特に恩師滝口先生には數回にわたり現地視察を賜はり、その都度適切なる御教示御指導を戴いた上に序文迄賜はる光榮に浴した。思えば誠に有難い事である。ここに改めて関係各位の御好意に、心より感謝申し上げたいと思う。又各位の御支援にむきいるためにも、吾々はこのささやかな経験をもとに、今後一層精進を重ねて、いささかなりとも当地方の古代文化の解明に協力する事が出来るなら、望外の幸である。最後に、吾々はもとより浅学菲才の一学徒であるに過ぎない。従って本書の記述中にも見落や、あやまりがないとは言ひきれない。識者の御叱正と御教示を心から御願いして筆を搁く次第である。

昭和50年3月

芝山はにわ博物館館長

浜　　名　　徳　　永

## **English Summary**

An Excavation Report  
on the Ogawadai Mounded Tomb Group  
Hikari-machi, Sōsa county, Chiba Prefecture

This is an excavation report on five mounded tombs, located in Ogawadai, Hikari-machi, Sōsa county, Chiba prefecture. The topography of north Chiba Prefecture consists of pleistocene terraces drained by a complex run-off system; forming a small scale alluvial areas. Ogawadai is located on a terrace in the north-eastern part of Chiba close to the Pacific coast. To the west of this site the Ogawadai mound group, is the Kuriyama river which forms an alluvial plain and which flows into the Pacific Ocean. This alluvial plain is presumably the main cultivated area of the people who made these tombs.

There are about twenty tombs—the Ogawadai mound group. Five tombs were excavated on July, 1975. These tombs nos. 1 to 5. Excavation was carried out under the supervision of the following; Hiroshi Takiguchi, a professor of Waseda University, the Director of the excavation; Tokuei Hamana, Chief Curator of the Shibayama Haniwa Museum, was the Vice-director, and supervisors were Shigetsugu Sugiyama of the Institute for Japanese Culture and Classics Kokugakuin University; and Takashi Kamiyama, the Curator of the Shibayama Haniwa Museum.

Three of the five excavated tombs have since been destroyed. They are no. 2 a round mound tomb; no. 3 a keyhole-shaped mound tomb; and no. 4 a square-mounded tomb. A *Sue* vessel and several remnants of iron implements were salvaged from tomb no. 4. These artifacts indicate that this tomb was the latest of the tombs in the Ogawadai mound group.

Tomb no. 1 was virtually untouched. It had a moat, and a mound that was 3.5 m. high and 26m. in diameter. There were three burial pits at the top of the mound. From burial pit no. 1: 1—iron sword; 1—halberd; 1—iron knife; 2—iron arrowheads; 10—perforated disks and 32—beads were found. Pit. no. 2 yielded 1—iron sword and 2—iron arrowheads. Two iron swords; 1—iron axe and 3 arrowheads were recovered from pit no. 3. Organic remains were not found in these pits. A *Haji* pot and a bowl and 151 beads were found elsewhere on this tomb. This tomb no. 1 is considered to have been constructed during the 5th century.

### English Summary

Tomb no. 5; another well-preserved keyhole-shaped mounded tomb has its round part in the east, and its square part in the west. The tomb has a total length of 33m. and has a surrounding moat. A burial pit presumably with a wooden coffin was found on the top of the round mound of this tomb. From this burial pit came; 5—Japanese type swords; 1—knife; a mass of tarnished iron arrowheads; 1—agate *magatama*; 51—glass beads; and a pair of stirrup (*Tsuboabumi*) chains. A large quantity of Haniwa were found on the northern slope of this tomb. These Haniwa were perhaps symbolic of the funeral procession. The procession began with a group of animals, (for example, a three year old deer, a seagull and chickens); followed by a man on foot leading a horse by the reins. Four ornamented horses; fully dressed men and women; and a woman with a jar on her head followed in this order. The procession seemed end in house shaped Haniwa. A considerable amount of broken cylindrical haniwa were also excavated. This area including the famed *Tonozuka* and *Himezuka* sites, is particularly rich in haniwa. Judging from their characteristics, these haniwa are datable to the late 6th century.

Of the 20, mid-5th to 8th centuries mounded tombs comprising the Ogawadai mounded tomb group are five large ones. These large mounded tombs seem to be the main tombs of this site. Tomb no. 1 is round; no. 5, 6 and 15 are keyhole-shaped; and the last is round.

The country name of this area '*Sōsa*' was once pronounced '*Safusa*'. The '*fusa*' of which may originate from the '*Kanitsufusa*' and '*Shimotsufusa's fusa*'. This indicates that the region once was a part of the old '*Fusa*' country. According to old documents, this Safusa country had an Imperially appointed bureaucratic head of the country, (*Shimotsu Unagami no kuni no Miyatsuko*). The residence and tomb of this Miyatsuko family has not been found yet. This Ogawadai mounded tomb group is considered to have been under the Miyatsuko family's jurisdiction; and may be the burial place of the relatives of this family.

(March, 1975 Shigetsugu Sugiyama)

# 付 図



折込付図 1 桑山川流域を中心とした古墳分布図



図2 第5号被検品表面

トレンチ面

# 図 版



直上撮影、上方北、縮尺六五〇〇分の一、一九七四、(京葉測量株式会社撮影)

図版第ニ景観



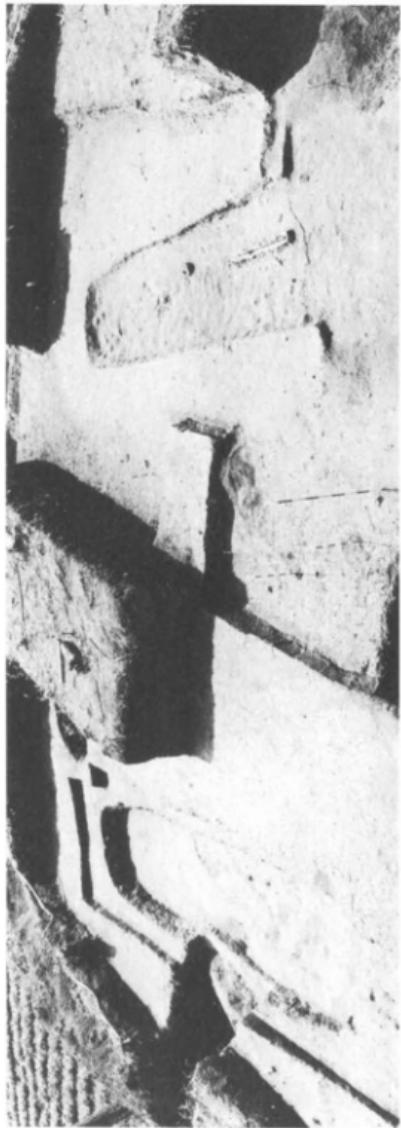
上：北方から小川台を望む、下：1号墳上から南を望む

図版第三第一号 墳



上：南から、下：西からみた墳丘

図版 第四第一号墳



上 東から見た第一主体(左)第二主体(右)



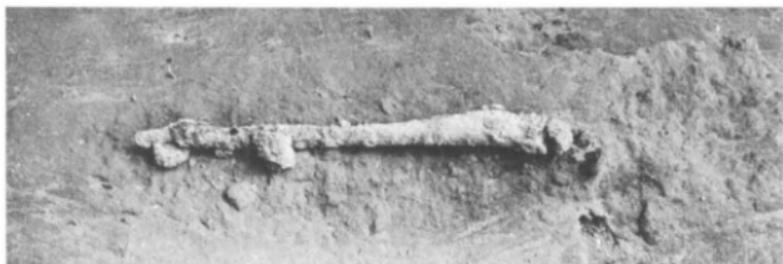
下 中央部遺物出土状況

図版 第五第一号墳



上、第一主体、北から 下、第一主体中央部南北断面（左半）





遺物出土狀況 上：有孔圓板，白玉，劍，刀子，中：鉤，下：鎗



中央部遺物出土状況 鉄斧、鐵劍と鐵

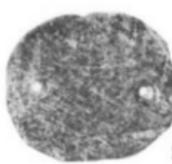
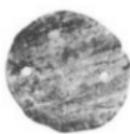
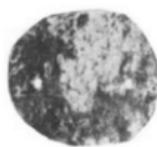
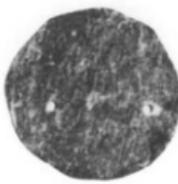
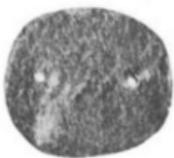
圖版第十八  
第一号墳出土遺物



1~5: 第1主体, 6~8: 第2主体, 9~14: 中央部出土



1



3

1·2: 第1主體, 3: 第1主體北側

第一号墳他出土遺物

1



2

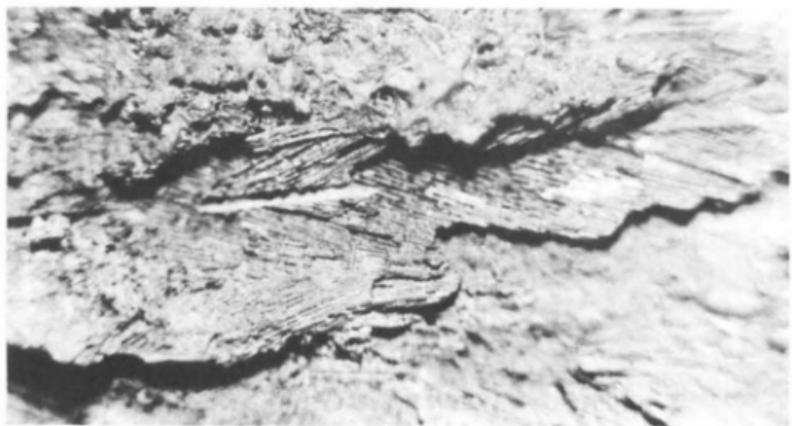


3



1：第1号墳南周溝内、2：同墳頂、3：第4号墳南周溝内出土

図版第一一出土遺物細部



上：剣身に付着した矢羽根（1号墳第2主体），中：1号墳第1主体の刀子，下：5号墳No.5直刀部分



上：第2号墳南から、下：第3号墳西から

圖版第一三第四号 墳

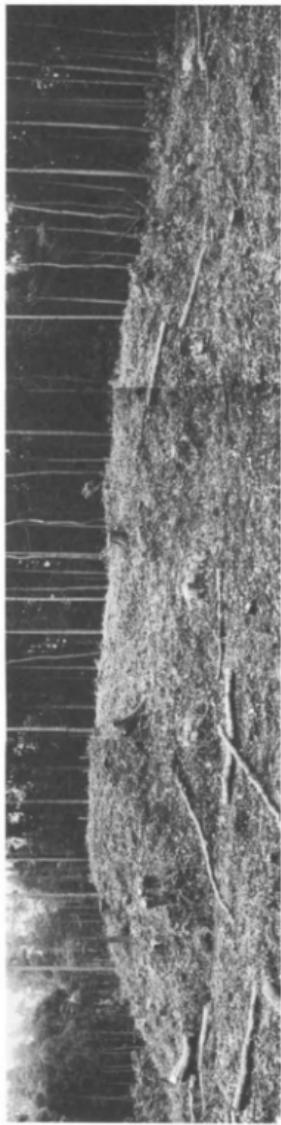


上：北からみた墳丘。下：石室材、直刀等出土状況



第4号墳主体部跡（右上）、須恵器出土状況、出土の譯（1）、金具（2・3）

第一回 第五号 塗



上：北側から見た填丘

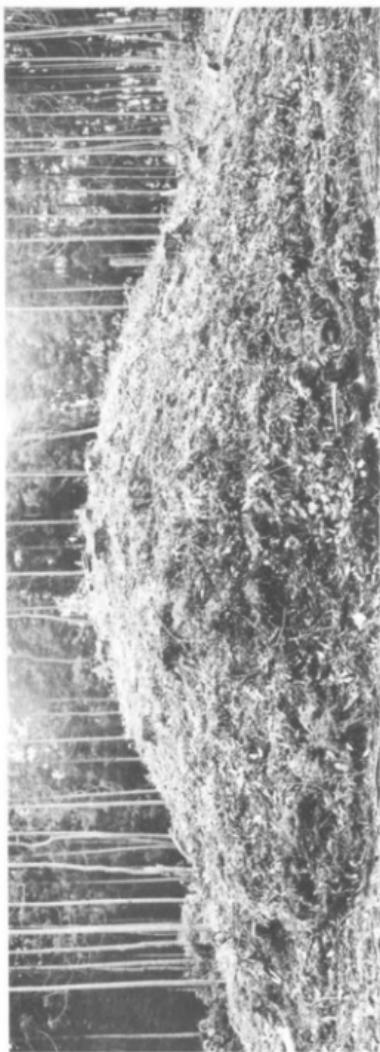
下左：後内部横断トレンチ

下右：中央縦断トレンチ（右後内部）





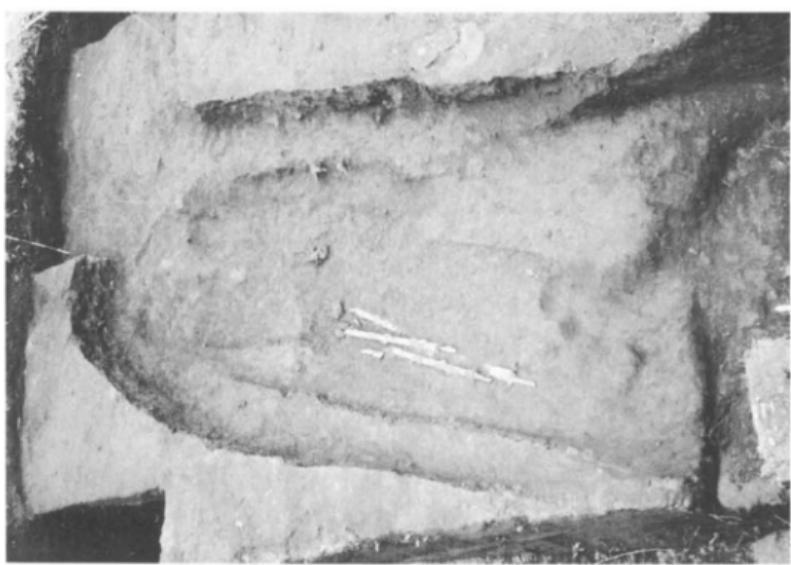
上、前方部前面 下、後面部裏面





第5号墳北側周溝（後円部から）

圖版第一八 第五号墳主体部



左、遺物出土状況、東から

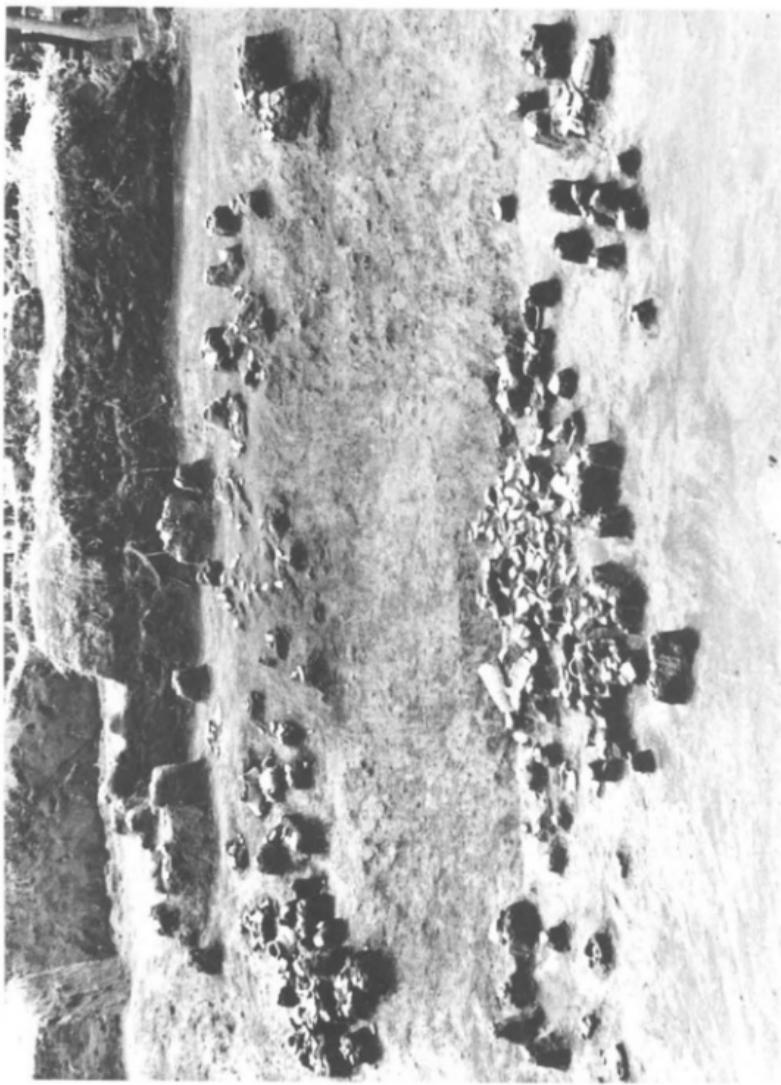


遺物出土狀況 上：玉類と鐵器，下：鐵器



上：前方部から。下：後内部から

圖版 第二一 第五号埴輪出土状況



北側くびれ部、周縁から

圖版 第二二 第五號墳塚輪出土狀況



上：鹿頭部，下：水鳥（No. 32, 33）

圖版 第二三 第五號墳填輸出土狀況



右上：水盤，左下：器

圖版 第二四 第五號墳埴輪出土狀況



埴輪馬(上よりNo.34, 38, 39)

第五号墳埴輪出土狀況



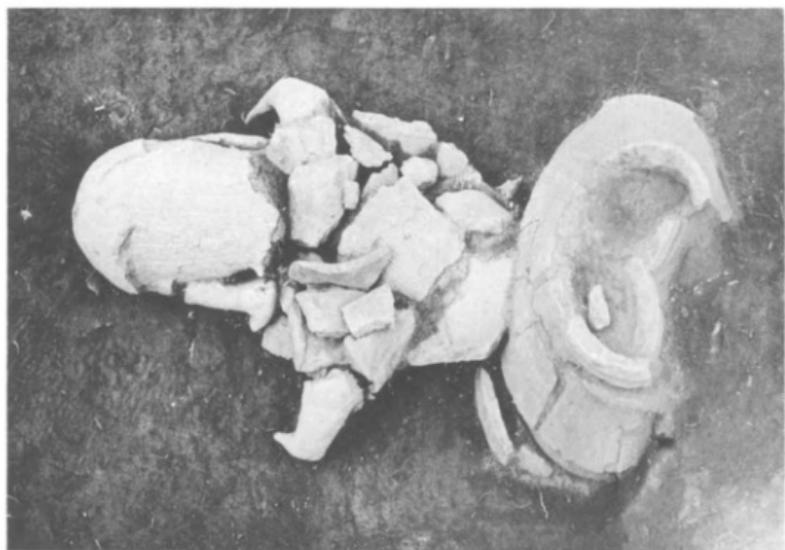
転落した人物埴輪（上：No. 56, 17, 58, 59, 60, 下：No. 36—人物頭部）

圖版第二六 第五號墳埴輪出土狀況



人物埴輪(上: No. 58, 下: No. 17)

圖版 第二七 第五號墳埴輪出土狀況



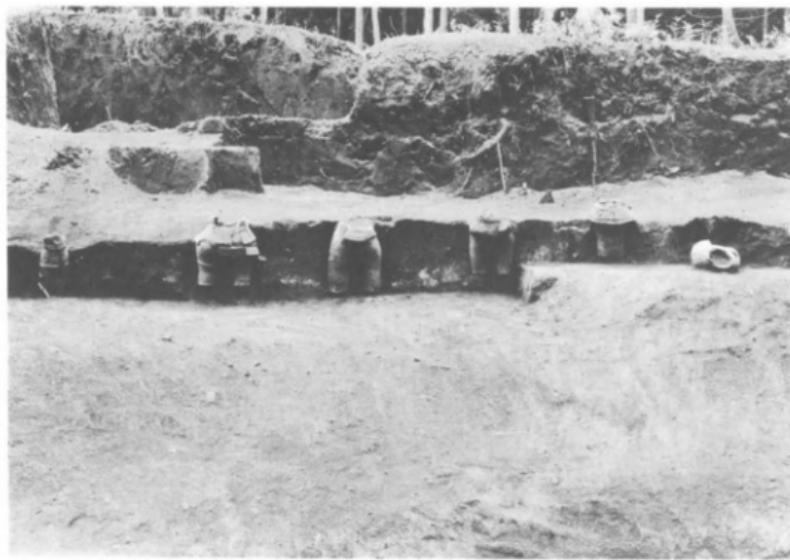
人物埴輪(上: No. 56, 下: No. 59)

圖版 第二八 第五號墳埴輪出土狀況



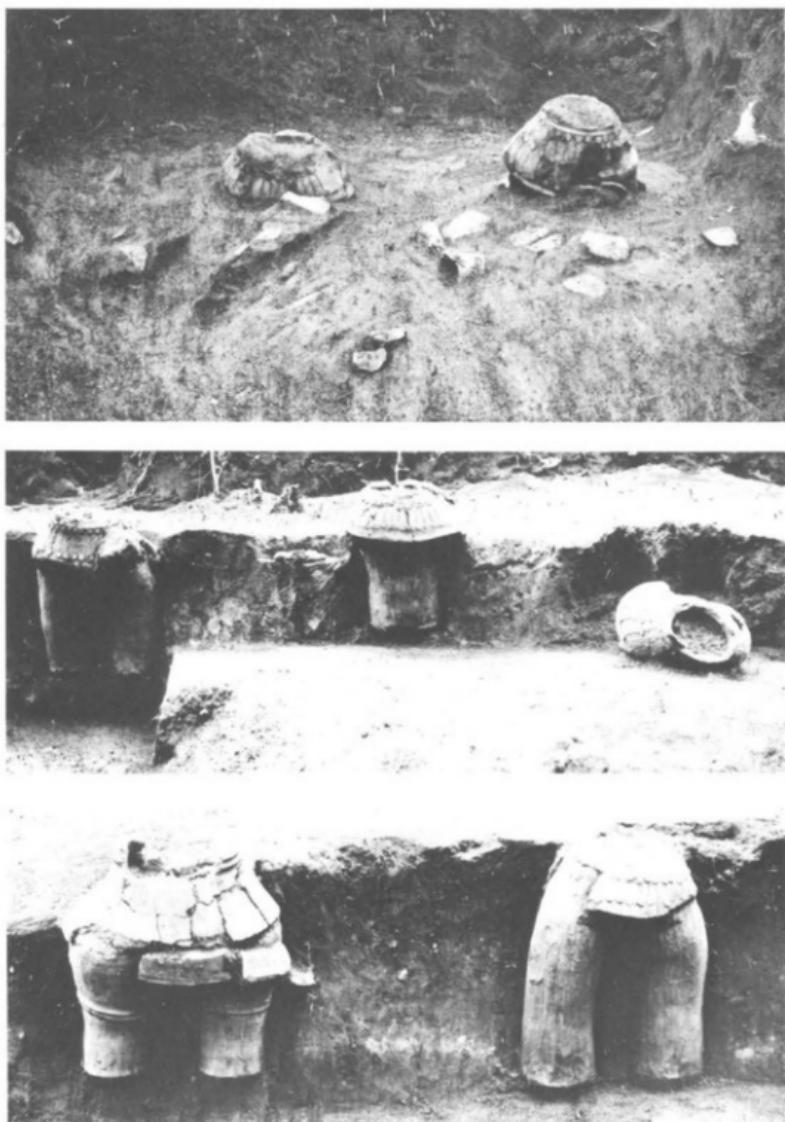
人物埴輪（上：No. 22—頭部。下：No. 36—頭部）

図版 第二九 第五号埴輪出土状況



原位置の脚部（左から No. 17, 56, 70, 69, 67, 68）

図版第三〇 第五号埴輪出土状況



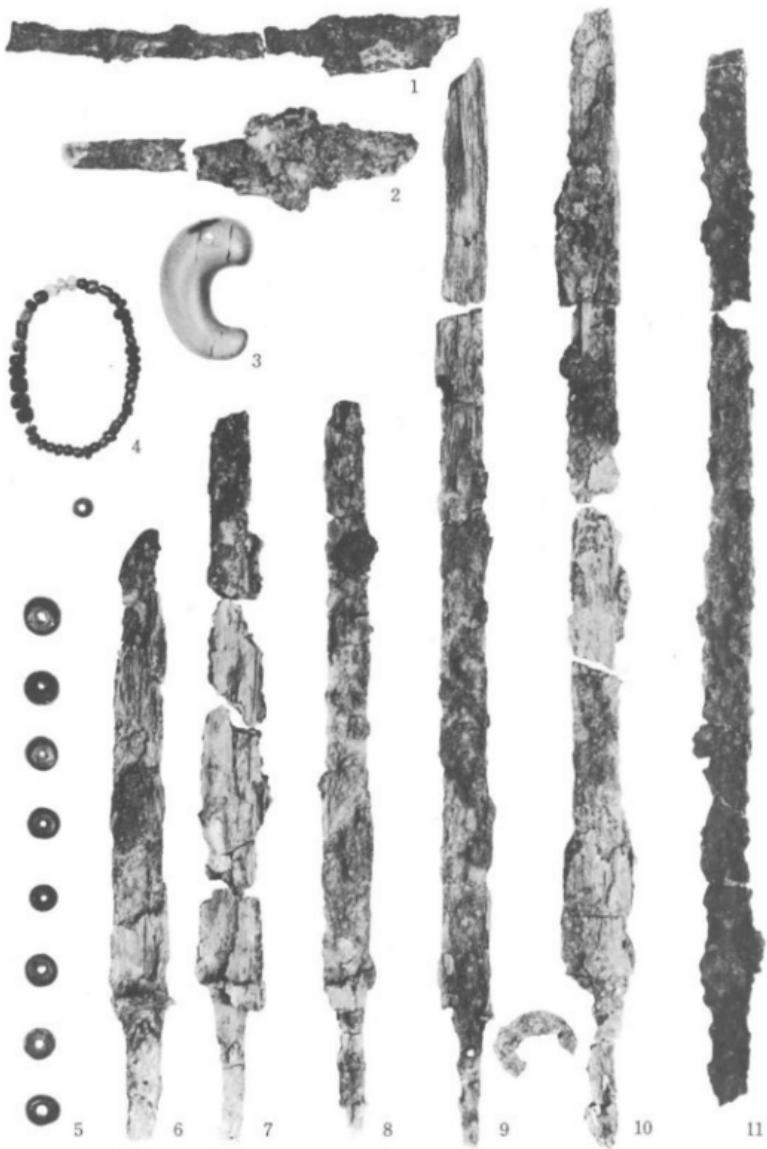
原位置の脚部 (上: No. 67, 68, 中: No. 69, 67, 68, 下: No. 56, 70)

圖版第三一 第五號墳埴輪出土狀況



人物頭部 (上: No. 40, 下: No. 22)

図版第三二 第五号墳出土遺物

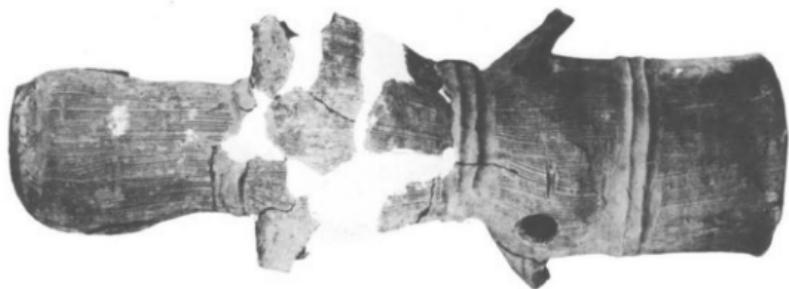
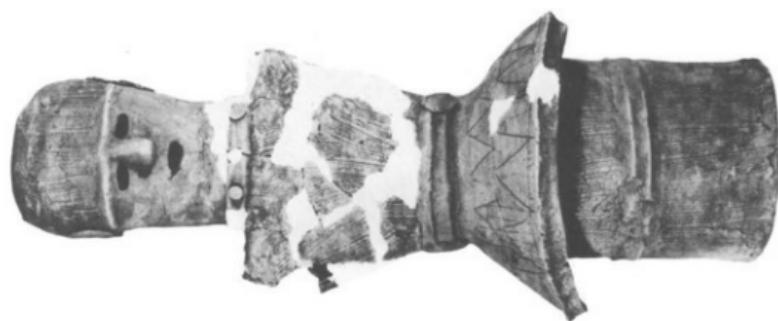
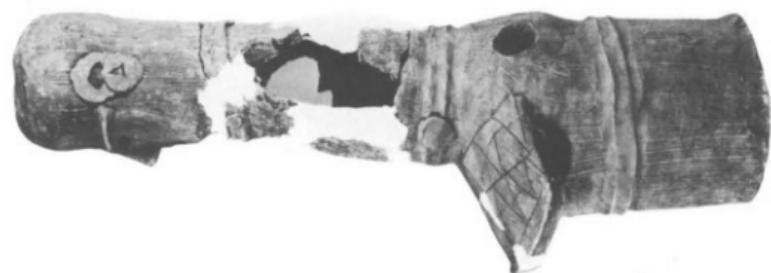


1. 鐵, 2. 刀子, 3. 勾玉, 4・5. ガラス玉, 6~10. 直刀, 11. 第4号墳出土直刀 (1~5と6~11は異尺)

圖版 第三三 第五號墳出土埴輪



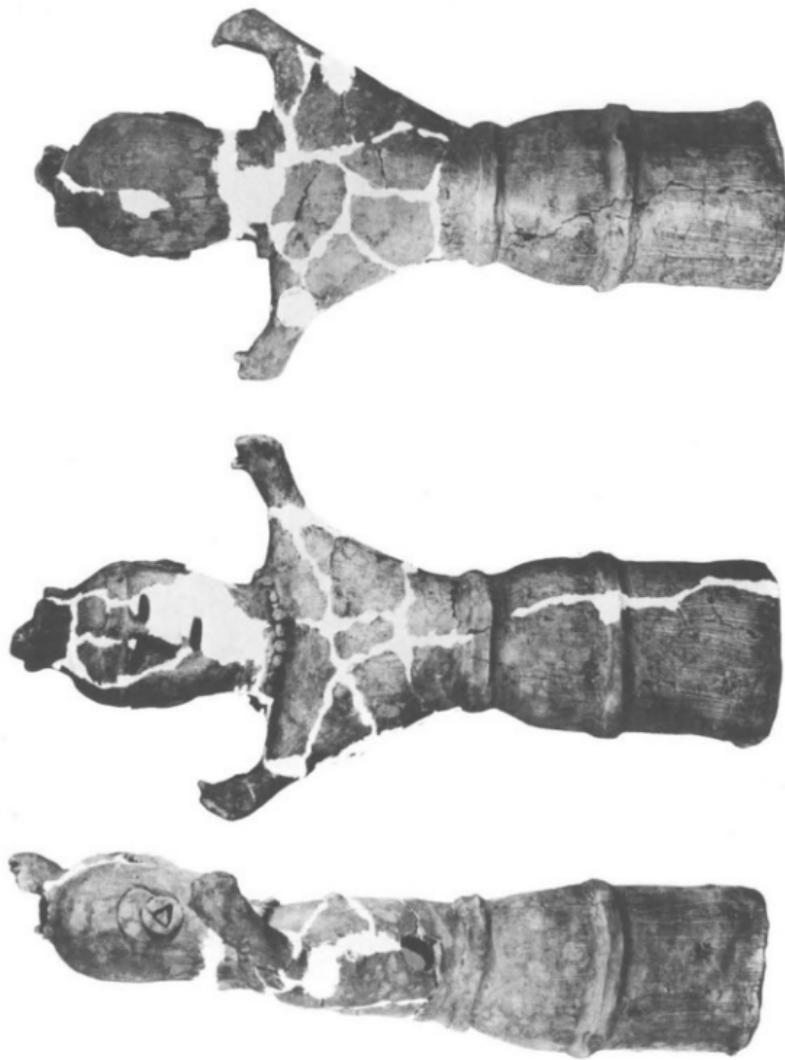
人 壇（透空）



人

物(足)

図版第三五 第五号墳出土埴輪

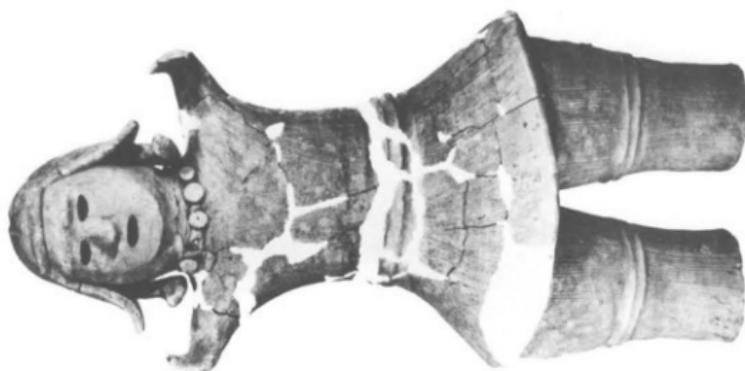


人

物（第17）頭を頭上にした女子

圖版第三六

第五號墳出土埴輪

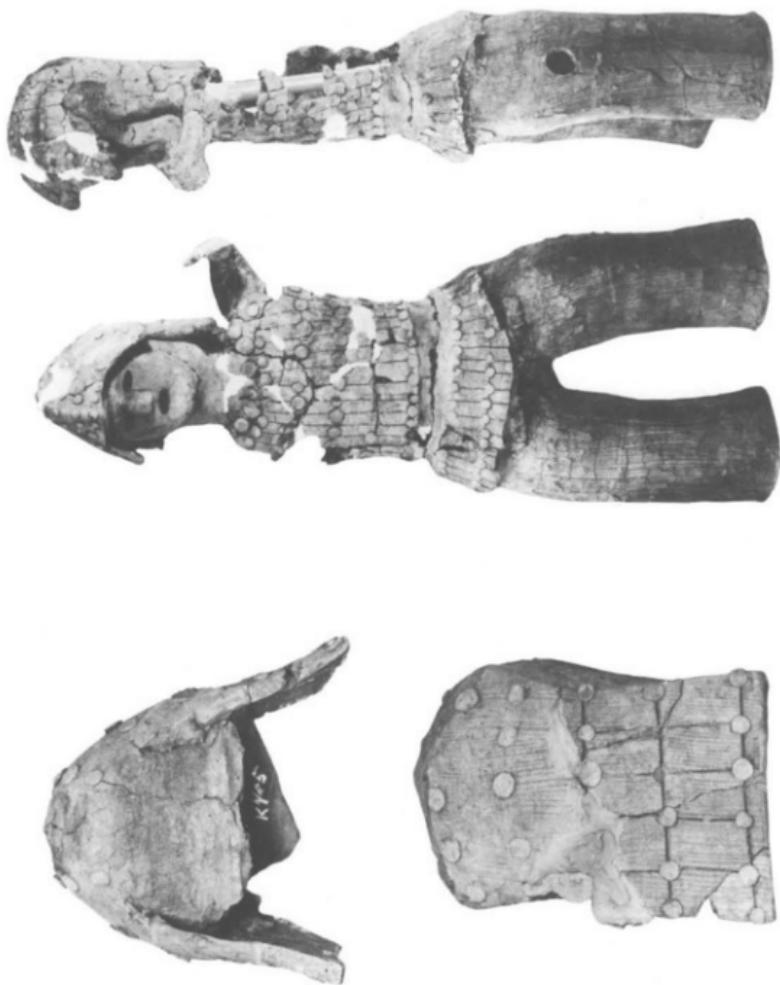


人 帽（埴輪）

圖版第三七 第五號墳出土埴輪



人 物 (1: 頭部—No. 22)



人 物（右No.36，左No.29） 武人

圖版三九

第五号墳出土埴輪



人 物(埴輪) 武人

第五号墳出土埴輪



人 物 (上: No. 69, 下: No. 67) 武人

圖版 第四一 第五号填出土埴輪



1



3

人物台 (上: No. 48, 下左: No. 60, 下右: No. 7)



2

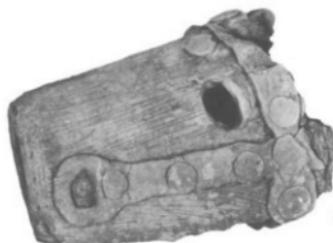
圖版第四二  
第五號墳出土埴輪



人物部分(1~17: 手, 18·19: 太刀)

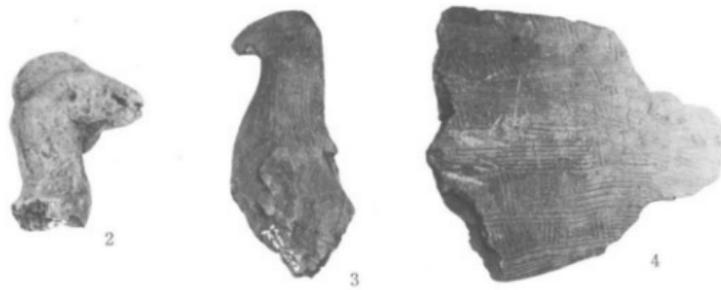
圖版 第四三

第五號墳出土埴輪



埴輪馬 (1: No. 34, 2: No. 38, 3: No. 39, 4: No. 31)

図版 第四四 第五号填出土埴輪



1: 家形埴輪破片, 2: 頭, 3・4: 水鳥の頭及尾

第五号墳出土埴輪



鹿（下左：前脚，右：後脚）

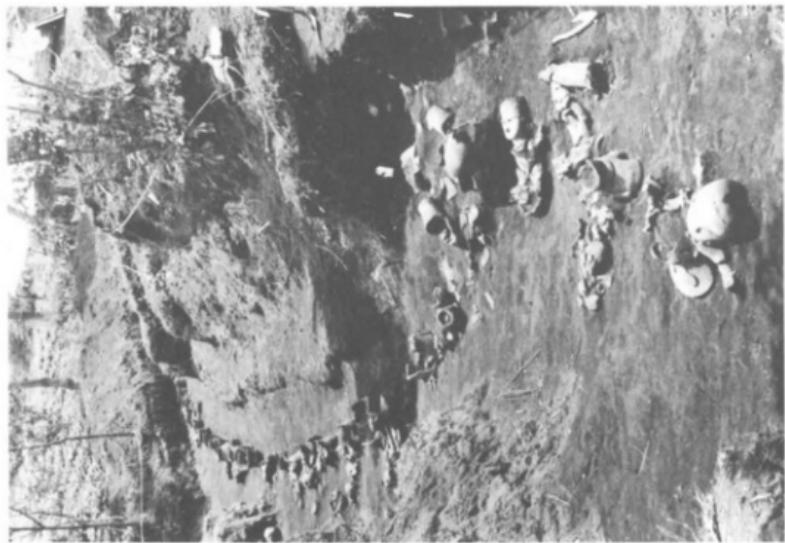
圖版 第四六  
第五号墳出土埴輪



人

物 (元から  
No.36、  
No.37、  
No.38)

図 漢 考 參 四 十 四



右、殿部田二号墳、左、高田木戸前二号墳埴輪出土状況（いずれも前方部から）



埴輪出土狀況 上：芝山姫塚古墳，下：經鶴塚古墳。

図版第四九参考図版二

4



3



2



1



芝山町飯田一号墳出土埴輪の一部

圖版第五〇 參考圖版四



1



2

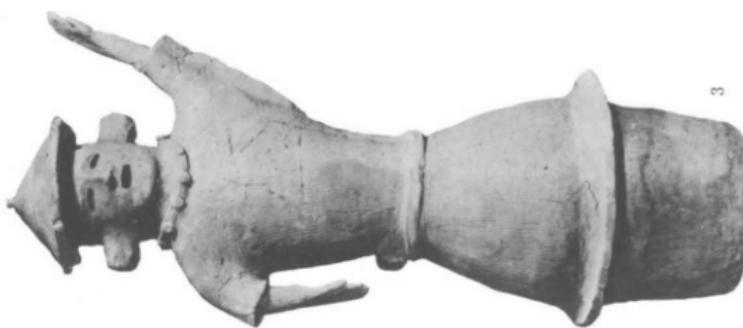


3

高田木戸前1号墳出土埴輪

圖版第五一參考圖版五

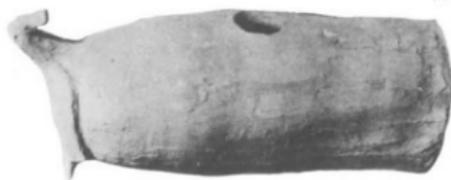
3



2



1



橫芝町前塚出土木戻 同前塚出土人物埴輪

---

## 下総小川台古墳群

—千葉県匝瑳郡光町小川台古墳群調査報告書—

昭和50年3月20日 発行

著 者 下総小川台古墳群調査団

代表者 滝 口 宏

発行者 千葉県八匝教育委員会

印刷所 株式会社 柏屋印刷所

---